

月も前から、酒も煙草も、茶も菓子も絶つて云ふ記事を読んで、拳闘試合前三ヶ月止めても有効なものならば、自分は一生これを絶つことにして、不斷の努力を續けて來ました。

本年私は五十二才、鍛錬修養を重ねること三十有五年、一日も怠りも怠らず。ツマラヌ諸君……世の中にグラグラして流行を追ふて、昨日は東に、今日は西に、漂ふて、止まる所を知らぬ様な浮浪なことで如何して、肉體精神改造の根源を捉へ得るものぞ。古人道を學ぶこと二十年三十年、漸くにして悟道の奥義に到達する。只一つのことでも、多年の努力を傾注して始めて、其道を得られるのであります。

私は今此機會に於て、自己の研究過程中の誤りに就て告白致します。それは所謂形式上の理論に捉はれて、最も重要な點で一つの誤りをなしたことであります。それは何であるかといふに、腹に力を入れて、それを土臺として、鍛錬するといつたが、腹に力を入れると、胸が狭められ、息が詰りてしまつて、腹の形が圓くなり膝が曲り、體重が踵に落ちる。息を吸ひ込めば、胸は開き、膝は伸びて、體重は爪先に落ちる。此兩者を對照するに正反對になつて居つて、理論的に見ると面白い實際上から云ふと、不完全不十分である。其れはズット以前のことであつて、本社で行つて居るのは始めから正しい型であります。

大正十二年六月十八日夜、伊豆半島の一砲、巨木に圍まれたる丘上に於て、一人熱心に練修して居つた所が、いまだ嘗て經驗せざる、強大なる力が腰と腹との中央に湧き起つたのであります。其力は地軸を貫き、無限大の空間に迸はした。此處に於てか冷靜に、細密に其力の作用を検討致しましたのに、これは腰にも腹にも片寄つて居ない、其中央の物理的重心から支撐底面の中央に向つて、垂直に落ちて行つた力であつた。心を慮うし、無形の中心に向つて力を集

めた時に忽然として發現されたる力である。これが了解せられると共に、從來の腰と腹との交互の力が、不完全不十分であることが明瞭になつたのであります。諸君に於ても、其要領方式に正しく合つたならば、何人でも私同様の經驗を得られることは疑はぬのであります。愛は惜みなく與ふ。私は出來得れば、惜みなく諸君に與へたいと思ひますが自ら取らねばならず、何人も得ること能はず。無上の至寶は請ふ、諸君自らの努力によつてこれを取れ。私が至高の道を傳へんために如何に努力しても、諸君が得んとして努めるのでなければ、之を與へることは出來ない。然らば私自身之を得てごんな變化があつたか。正確な最も正しい中心力が發動し來れば、頭に働いて居る神経の機能は、機械の運轉が止まつた如く、ヒツタリと止まつて仕舞ふのであります。此時に於て一切の思念は悉く拂ひ去られて明瞭透徹、ダイヤモンドの神殿は我が裏に作られ、太初より永劫に亘り、無限大の宇宙を一貫して、動かさざる處の、真理の大法則に我が心身は完全に合致するのであります。全世界に於て最も優れたる至寶は吾裏に在り、最大最上の幸福は、我が中心に在るのだ。其力の造られし時、天地は忽然として光を放つ、宇宙の生命は躍々として、我が心身に迫り來る。極めて平凡なる景色の中にも、金色燦爛たる光が映つて來る。此處に到れば、健康問題など實につまらん、他愛のないことである。中心の根本さへ養つたならば、健康なんかは、自ら我身に具はり、強大なる力は自ら我身に溢れて來る。年を取るに従ひ體力は益々増進し、體格は益々優秀になる。精神の中心と、肉體の中心とが、正確に合致した時、私の道場の一寸板は、足の形に踏み抜け、圍り一尺四寸餘の根本も踵の形に踏み折られてしまふ。私自身でも測り知る事の出來ぬ強大なる力が此の中心から近り出る。此の力は精神を強くし體力を養ふ。又體を造り精神を造る。かくして原因は結果となり結果は又原因となつて心身共に益々鍛錬せられるのであります。私は實に世界第一の幸福者であると感じる



茲に於てか人生の名利榮達の如き何するものぞ。さりながら此の心を養ひ、此の體を強ふ力は、悉く諸君の衷に在ります。何故に開かれぬか。たがそれは堅く重い鐵の扉で鎖されて居るんだ。よい加減なことで開かんと。開かうとするなっは、先づ己の私我を捨て。そんなものは一切ぶち棄て、仕舞つて、士足で踏み蹂つて、只純眞の精神を以て、熱誠を籠め、生命を打込んで造れつ。夫れ上士は恨みに就き、中士は徳に就き、下士は利に就く。今の世は師たる者が暖かく大切に指導せぬと云ふと、弟子共はみんな離れてしまふ。貴様はこんなことではいかんぞと、叩きつけられ、士足にかけられても、猶ほ且つ其れに甘んじて、道に進むの精神なき者は、自分の中に絶大の至寶を抱きながら、終生遂に之を開くことが出来ないのだ。

私は兄弟の私情を離れて私の兄が、天稟の素質を磨くのに、何十年の苦心修行をなし、以て此の聖境に這入つたその一端を窺ひ得て、是れ誠に容易ならぬ苦心の結果であると思ふと同時に、私の兄が全く、靈妙崇高なる境地にあることを信ずるものである。私の如きは、到底其靴の紐を解くにも足らぬ者であります。諸君此の大聖を戴きながら果して何物をか、學び得たる。凡て自我を棄て、明瞭透徹の心境を以てせなければ、到底其境地を窺ひ知ることは出来ないであります。中心力を得て始めて完全に而も易々として、健康問題を解決することが出来る。これなくして漫然と努力したとて、遂に何物をも得らるゝものではないのであります。

本日講話は、之を以て終ります。國家の非常時に直面し、且又當社の大逆境時に於きまして、諸君の各自が、根強き修養向上の道を辿られることは、當社を發展向上せしむるは勿論、又國家に盡す所以であることを考へ、最も重要な、自分の中心力を養ひ、赤誠以て、其の鍛錬に奮勵せられんことを希望致しまして、此の演壇を降ります。

## 滿洲事變と

# 皇國日本の大飛躍

(昭和八年四月五日午前八時三十分  
於 静岡縣立高等女學校講堂)

一昨昭和六年の九月二十三日午前、私は當講堂に於きまして簡單なる、體育講話をなし、午後は静岡歩兵第三十四聯隊に於て、將校團のために講演致しました。

恰かも其の數日前、私は大阪青年會館に於て、十數年振りで心身強健術の講演會開催中、濱田學務部長より縣廳々員一同のため、講演してくれとの御依頼を受け、静岡に向はうとした時、中村大尉慘殺事件の發表を見ました。けれども協調主義の幣原外交ではグズグズに結末を告げることと思つて居つた。

然るに教育會館その他にて講演中、御承知の柳條溝に於ける鐵道爆破事件が勃發した。此に於てか帝國は重大なる國策を確立しなければならん處の局面に逢着し、一步を誤れば國運の前途は岌々乎として危きの岐路に立つたのであります。退くか進むか、國運消長の機はかゝつて斷の一字に存する。私も亦國民の一員として、一片憂國の至情禁すること能はず、直ちに上京致しまして丁度修養團本部に於て平沼樞密院副議長二木博士など御出席の場所にて講演の際、私は渾身の力を集注して對支最強硬論を力説した。而して勸聲一帯鐵拳を振つて叫んで曰く『こんな小つぽけな日本なんて、木ッ葉微塵に叩き壊してドブの中へぶち込んで仕舞へ。國難打解の途ただこの覺悟と、只此の決心とのみ。然らば聯盟何かあ



る。然らばロシア何かある。然らば米國何かある」と。

更に私は此所に御出席の石田海軍大佐の御紹介を以て、鈴木侍從長に面會を申込んだ。曾て、高松宮殿下、伏見宮殿下、山階宮殿下が江田島の海軍兵學校に御在學の際體育講演ならびに實演を依頼されて兵學校へ行つた時、鈴木大將は吳の鎮守府司令長官であつて私は兵學校からの歸途長官室で、鈴木大將ならびに幕僚に強大なる體力の養成法につき、解剖學力學、幾何學の理論を應用して説明した處が「目下艦隊の檢閲中であるから、二三日遊んで居つて吳鎮守府の全海軍將校に、今の話をもう一度やつてくれ」と云はれたが、豫定があつたから御断りしたら、長官の自動車に私を同乗させて送つてくれた程喜ばれて、私のことは御存じであるけれども、石田大佐からは特に私と云ふものを信任して會つてくれるやうに、紹介狀を出して貰つたのであります。

處が鈴木侍從長から六時迄は 陛下の御そばに奉侍する故七時に宮内省官邸に来て呉れとの御電話でして、私は正七時に御伺ひして、十二時過ぎまで御話し致しました。翌日更に長文の書面を以て、臣子の忠誠を披瀝して、重大案件に就て建言致しましたが其の内容は申上ぐる事が出来ませぬ。それは昭和六年九月二十九日の事であります。

それから私は南陸相、金谷參謀總長に滿洲は完全に獨立せしめて宣統帝を首班に立て、帝國はこれと緊密なる提携をなし、あらゆる障害を排除して勇往邁進すべきことを進言した。當時陸軍は飽くまでも強硬方策を執り、政府は國際協調主義によつて事件の擴大を極力防止せんとし、兩者は常に正面衝突の危機に立つて居つたのであつて、陸相は閣議に臨む毎に辭表を懷にして居つたやうな状態であつた。

滿洲事變が聯盟に出訴されてより十七ヶ月、本年二月二十四日午前十時五十分世界外交史上に特筆大書せらるべき劇的大詰の聯盟總會が開催せられた。

勞銀イーマンス議長は「日本の意見書を研究したが、全員一致良心を以て採擇せられたる報告書草案を變更する何等の理由をも發見しない」と述べ開會を宣言した。表決の結果四十二對一の大多數を以て聯盟規約第十五條第四項に基く勸告案は採擇された。曰く

- 一、滿洲に於ける日本の行動は、自衛權の範圍を逸脱したものであるぞ。即ち聯盟規約不戰條約、九ヶ國條約に違反したる侵略行爲である。
  - 一、滿洲國なんて、そんなものは認めない。
  - 一、支那のポイコットは正當防衛である。
  - 一、日本軍は滿洲附屬地帯へ撤退しろ。
  - 一、滿洲は或る程度の國際管理のもとに置け。
  - 一、此の勸告案實施を監視する委員會を作り、其れには聯盟外の米露二ヶ國を招請する。
- と云ふのであります。松岡代表は堂々二十二項に互つて其の非違を指摘し「日本は即座に且つ明確に否と答へる」と、斷乎として此の不當なる勸告を蹴飛ばして仕舞つた。而して嚴然として聯盟絶縁の宣言を朗讀し、演壇から降りると自席へ歸らず其のまゝ悠々として出口に向ひ、他の代表も連いて席を立つて退場して仕舞つた。

聯盟創立以來十有三年、國際平和へ眞摯なる貢獻をなし來つた日本として、過去六十年間の外交を清算して、新なる出發點から世界の舞臺に乗り出すべき重大なる轉換である。時に午後一時四十五分……日本の反對によつて勸告案は空文となつた。反古紙となつた。これを活かさうとすれば、残された唯一の道は經濟封鎖であるが、これは他面日本に賣らなければ買つてやらない、日本のものを買はなければ賣つてやらないと云ふことになり、我れ傷けば彼も亦痛さを感じるをまぬがるゝことは出来ない。強い



て無理をやれば戦争を誘致するやうになり、聯盟本來の目的と背馳することとなる。

日支紛争問題を飽くまでも和協手段で解決しようとした日本の提案を一蹴して暴戻極まる勸告案を短時日の間に、バタ／＼とデッチ上げた裏面を摘剔して見る。

昭和七年十二月二十四日午後四時、國際外交の中心地ジュネーブに於て、露國外交人民委員長リトヴィノフと聯盟支那代表顏惠慶との間に取交はされた兩國々交回復の公文書が、突如として發表された。正に是れ青天の霹靂、各國代表は餘りの意外に暫し呆然として自失した。

蓋し、共産軍の爲めに苦しめられて居る支那の中央政府としては、赤化防止の條項を入れて居つたから容易でなかつたのが、無條件回復にしたから、忽ち成立したのであつて、一時的に小細工の爲めに、自ら墓穴を掘るの愚を敢てしたのである。見給へ。ソビエツトの恐るべき後援によつて、武漢、武昌、漢口の大地は、再び共産軍の猛襲に吹き捲くらくらうことであらう。

けれども、これによつて日露不可侵條約は全く停頓し兩國の關係は冷かになつて仕舞つた。

日露不可侵條約が成立したら露國が極東に感ずる不安は一掃されるから、赤化の魔手はシベリヤから中央アジア、ソビエツトからトルキスタンを経てアレキサンダー大帝が侵入したカイバル峠を通過して英國の生命線印度に伸びる、これが英國にとつては最大の恐怖である。

露支國交回復によつて此の不安が除かれたから、最近英國の對支貿易の急激な低下ならびに戰債問題にからんで米國に對する政策上、俄然態度を一變して、本來の面目に立ち歸つたのである。ジュネーブの空気を緩和するにとつてめたサイモン外相は、其の後一回姿を見せた丈で、エデン外務次官に旨を含めて日本壓迫にかゝつたのである。

フランスは、チエツク、ルーマニヤ、ギリシヤ其他中歐小國をまとめて其の首座に坐り、依つて以

て獨逸、伊太利に對抗して居つたが、小國は自己保全の必要から聯盟至上主義になつて居るから英國の態度約變から忽ちにして硬化して仕舞つたのである。

獨逸は巴里條約の重壓から脱せんとして居るが、日本の聯盟脱退によつて、巴里條約から出て居る聯盟に亀裂を與へることは、自國を有利に導くことになり、其の上日本脱退によつて、委任統治の南洋諸島がころげ込んで来れば、モツケの幸だと思つて、聯盟對日本の惡化を望んで居つた。

米國は建國の歴史比較的新らしく、爲めに内面的整備を要するので、モンロー主義の假面下に隠れて居つたが、一大工業國たる陣容が一通り出来ると、極東大陸の新開拓地に向つて其の爪牙を伸ばして来た。

明治三十一年に其の足踏場としてハワイを奪ひ、次でフィリッピンを占有した。然るに支那には既に日、英、露、佛の勢力範圍が決つて居るので、明治三十二年十二月、國務卿ジョン・ヘイは、支那に於ける門戶開放、機會均等の提言をなした。これは當時ヨーロッパ各國間に擡頭して居つた支那分割計畫に對して其の分け前に與らんとした伏線であつた。而して太平洋進出の便を得るがために、千九百〇三年パナマ運河兩岸五哩の土地永久割讓をコロンビアに要求してこれを獲得した。

地球表面の九分の八を、謂れなく奪取したヨーロッパ白人の鐵鎖を断ち切らんとして、千九百〇五年有色民族中、殘された唯一の戦士日本は、敢然戦を執つて、大ロシアの強兵を滿洲の野に撃破した。ために支那分割論は解消した。

日露戰爭當時、ルーズベルト政府が日本に同情したのは、滿洲の資源が、ロシア及び、ロシアの經濟的支持者たるフランスに、獨占されることを惧れたからである。ポーツマスに日露平和條約を成立させたのは、疲弊した日本と運敗したロシアとに恩を賣り、支那大陸に於て、有利な地歩を占めんとしたか



らである。

果然——平和條約成立の翌月、鐵道王ハリマンは滿鐵買収案を携へて日本に來り、朝野の政客を籠絡して、假契約まで取り交はせたが、遙々ポーツマスから歸つた小村侯の、斷乎たる反對により危機一髪の處で否決された。

滿鐵が米國の手に渡つて居れば、今日の滿洲國が生まれる機會は、永久に起らなかつた。

千九百〇八年即ち明治四十一年一月ルート高平協定が成立して、米國の主張にかゝる太平洋の自由通商、支那の獨立保障、機會均等主義に、日本は裏書した。

千九百〇九年國務卿ノックスは、突然藪から棒に、日本の滿洲に於ける權益を、根こそぎ拂ひ除ける計畫のもとに、滿洲鐵道の國際管理を提議した。日本は即座に一蹴した。すると同年、錦州から愛理に至る滿鐵並行線たる錦愛鐵道を布設せんとしたが、日本は強硬に抗議した。

血を以て得た日本の權益は、一通りのことでは驅逐するに出来ないと思ひ、翌千九百十年には英佛、獨と提携して滿蒙開發の美名のもとに四國借款組織の計畫を樹てたが、目的は日本驅逐であつたら日本は斷乎として反對した。

間もなく歐洲大戰勃發し、米國の對滿蒙政策は一時中止の姿となつたけれども、千九百十五年、大正四年大隈内閣と袁世凱との間に、二十一ヶ條の日支條約が締結さるゝや、大統領ウィルソンは、米國は此の日支協定によつて、何等の拘束を受くるものではないとの聲明を發した。

けれども米國としては歐洲大戰に参加した爲め、極東に於て、日本と争ふことの不利なことを知つて千九百十七年大正六年十一月、滿洲に於ける日本の特種權益を認めるといふ、石井ランシング協定の成立を見た。けれども、歐洲大戰終結と共に、再び支那に飛躍すべく、支那の國權恢復運動を利用して大

正十一年ワシントン會議に於て、ルート四原則を確立せしめ、翌年四月石井ランシング協定をも、吹き飛ばして仕舞つたのである。同時に日英同盟の廢棄、青島並に濟南鐵道の還附、其他山東の利權放棄及び二十一ヶ條中七ヶ條削除、而して海軍力は、主力艦、補助艦共に五對三の劣勢に墮落したのである。其處へ日本は關東大震災に見舞はれたので、此所ぞとばかり、僅か百四十六に制限した日本移民に對して、大正十三年六月入國絶對禁止を、壓倒的多数を以て、上下兩院を通過せしめたのである。

米國の排日政策が、近時益々猛烈になつたのは、歐洲大戰を好機として、産業の發展に全力を傾注し大量生産をモットーとして、世界國富の四割を占むるに至つたのに、平和克復と共に、參戰各國は着々産業の恢復を計り、且つ戰爭の傷手深き結果は、大資本活躍の餘地なきため、四億の顧客を有して、而かも大戰の影響なき支那大陸こそ、經濟的活動の絶好市場と認め、これが妨害になるのは、其の進路に横はる日本だからである。かくして經濟的日米衝突の形勢は、造られて居つた處へ、勃發したのが滿洲事變である。

米國の勢力は、近年著しく支那にしみ込んで居るので、聯盟と支那とに恩を賣り、自國の立場を有利に導くことに汲々として居つた、一方に於ては大西洋太平洋兩艦隊をまとめて、ハワイを中心にして海軍大演習を舉行し、公々然として示威運動をやると同時に、一方に於ては總領事、駐スイツツル公使、駐ベルギー大使の三人が、聯盟の會議が始まると猛烈なる策動を試みたのであつて、戰債問題とからんで、今回の勸告案を作り上げた傀儡師である。松岡全權が『陰謀の府聯盟』と喝破したのは當然のことである。

滿洲問題は柳條溝の鐵道爆破から起つたけれども、其の淵源する處は極めて遠く、其の間憂國の志士が、幾度か滿蒙進出大陸經綸の爲め、畫策し苦心された事であるが、今其の裏面史の一端として隠れた



る稀世の聖雄押川方義先生が、其の方面に於ける活動の概略を御話し、て見ようと思ふ。  
押川方義先生は、新島襄氏と共に宗教教育家の二大双壁と稱せられた人であるけれども、人物の大き  
さから云つたら、新島氏など到底比較にもならない。

先生は大隈首相、田中首相を動かして其の王道的世界政策を實現せんとした。維新三傑をも空ぶする程の識見膽略ありと自信した大隈侯も、先生に對しては衷心から畏敬して居つたやうである。曾つて私が大隈侯を訪ふて十數名の來訪者と共に、御高話を拜聴して居つた時、應接間の向ふの入口に先生の姿がヌツと現はれたかと思ふと、侯の方を見て、一寸顎でさし招いた。すると今まで議論風發の侯は、忽ち倉皇として出て行かれた。當時の状況は雜誌冒險世界に書いたことがある。大正十三年絶對的排日案が米國の上下兩院を通過するや、押川先生は日米開戦を主張され、一舉にハワイを取つて押付けと云はれたが、諸君今日に於て如何の感がせられるか。

千九百十四年歐洲大戰が勃發するや、先生は日英同盟を破棄して獨逸と結び、東方の戰場四百二十里の廣きに出兵せる露の後方を脅かして、其の兵力を分割せしめ、以て獨逸をして佛都パリを衝かしめ、北方カレの海岸よりは、直ちにロンドンを砲撃して、歐羅巴の覇を握らしめ、帝國はロシヤを撃つて樺太及びシベリヤの大半を略取すると共に、優に滿蒙支那を壓へ、東印度諸島よりは和蘭を退け、印度支那よりは佛蘭西を逐ひ、英吉利の東洋艦隊は撃破して印度濠洲を解放し、世界は日獨米三國鼎立の形をなし、日獨堅く結んで米をして戦はずして、我が脚下に拜跪せしむると云ふ壯大雄渾の大策を樹立し大隈侯はこれに賛同されたけれども、閣議に於て破れ、遂に對獨宣戰の詔勅は發布せらるゝに至つたのである。蓋し此の和き大策はナポレオン、ヂンギスカン以上の大英雄でなければ遂行することは出来な  
い。先生が最後の最後まで方策實現のため努力せられた経緯に就ては、障目張贖すべきことがあるけれ

ども、公會の席上でお話することは出来ない。

其の頃私は、牛込築土八幡下の隠れ家に、支那革命黨首領孫逸仙をたづねたり、内藤新宿の寓居に支那浪人の巨頭宮崎滔天を訪ふたりした。

大正二年十月某日、東京の某所に於て、私は押川先生と共に、第二次革命の討袁軍總司令河海鳴と會見した。彼れは北軍の攻撃に抗して南京を死守し、常に挺身、最前線に奮闘したが、内應する者があつて朝陽門から破れ、腹心の苦諫によつて再舉を圖るべく、逢頭垢面、身を苦力にやつして東京に逃れ來つたのである。彼れは蒼白の顔貌に悲壯なる決心を浮べて、『袁を倒すがためには手段を撰ばぬ』と云つて居つた。彼が最愛の妻子は北軍のために虐殺せられたのである。

大正四年一月二十八日、北京にある日置公使は、突然大總統の袁世凱へ、二十一ヶ條の要求をつきつけた。其れを起草したのは加藤外相であり、其の方針を授けたのは大隈首相であつたが、其の根本策は押川先生から出て居るのである。これ聞いた革命黨の首領孫逸仙は、袁世凱が二十一ヶ條を入れて帝位に就き、日本がこれを援助したら、革命の前途は全く杜絶されて仕舞ふと、『中華革命黨總理孫文』の名を以て日本政府へ、二十六ヶ條の密約を申込んだ。其の第三條には滿洲と内蒙古の行政權を、完全に日本に讓渡する旨が明記されて居る。其の代り支那本土に於ける革命運動のため、借款と兵器購入を承諾されたいと云ふのであつた。

二十一ヶ條の交渉は三十餘回重ねたけれども、反袁運動に絶好の資料を與へることを恐れて容易にまとまらない。そこで日置公使は、孫逸仙の二十六ヶ條の密約を袁世凱に示した。そして五月七日二十一ヶ條諾否の最後通牒が、日本政府から發せられた。袁世凱は慄然として、直ちに全要を承認する旨を回答したのである。間もなく『討袁』の旗が雲南と貴州とから上つた。それが所謂第三革命である。袁



世凱は反袁の機勢を殺ぐために盛に排日を煽つた。

大正五年四月六日押川先生の招きにより私は芝公園内の先生邸に至つた。先生は肅親王と謀つてバブチャブに討袁軍を起させ、宣統帝を立て、帝國の勢力を支那全土に扶殖するの大計畫を打ち明けられ、これは大隈首相外二三人の者しか知つて居らぬと附言され、支那行を勧められた。私はこれを諾したけれども、丁度著述中であつたので、先生は先づ單身大連に渡つて、目覚しき活躍をつゞけられた。

大正五年七月出版の私の著書、強い身體を造る法の四百九十四頁に、こんなことが書いてある。「其れより隣邦の形勢浮雲の如く、幾度か變轉して、大勢の定まる所を知らず。六月六日突如として怪傑袁世凱迎くの報に接す。先生今如何なる天地に、雄大なる經綸を伸べんと奮闘せられつゝある。筆を擲つに臨んで、瞑目して日本の前途を念ふ。蟲豸々々雨紛々、大正五年六月七日夜著者誌す」と。

バブチャブの軍が怒濤の如き勢で、北京の城近く迫つた時幸か、不幸か、袁世凱は革命黨の婦人のために毒殺され、其の女も亦毒を仰いで斃れて仕舞つた。此所に於てか討袁軍は無名の師となり、各國の駐屯軍は聯合して其の撤退を迫り、形勢忽ち逆轉、バブチャブは戦死して、先生雄大の方策も慘たる結末を告げ、大隈内閣は俄然として倒壊するに至つた。復辟運動によつて、如何にして全支那に日本の勢力を、扶殖するかと云ふ秘策に至つては、遺憾ながら言明するの自由を持たない。

大正九、十年、田中陸相のもとに、シベリヤ出兵を斷行し、成上りの將校に指揮された玩具のやうな過激派の軍兵等を、迅風枯葉を捲く底の勢で掃蕩し、もう一息の處で、バイカル湖以東、東部シベリヤを獨立國となし、日本の勢力下に置くことが出来る瀬戸際まで漕ぎつけた時、米國の干渉が起り、何も知らぬ國民は更に支持せず、おまけに無責任な政黨は「徒に無用の師を出して、陛下の赤子を極寒に曝らす」と、彈劾案を議會に提出して咆哮したので、遂に九俵の功を一簣に缺き、遠大なる雄圖空しく挫

折するに至つた。思ひ来れば残念至極、足りた感じがするけれども、過ぎ去つたことは何とも致し方がない。これが出来て居れば、ウラヂオからの空襲を恐れることもなく、滿洲國も易々として造ることか出来たのだ。

次は張作霖の片腕であつた郭松齡が、よく滿洲に於ける日本の立場を理解し、且つ人道的見地から滿洲三千萬民衆のために、敢然として立つて、張作霖の政權を根本から破壊掃蕩せんとした。彼は連戦連勝、まさに一撃のもとに張作霖を倒さうとした。勿論我が憂國の志士が、多數これを援助して居た事は申すまでもない。然るに張作霖は日本政府の有力な或る者を動かして、援助の手を引かしたので、形勢一轉、郭松齡は孤城落日、秋風索寞の悲境に陥り、同時に張作霖軍は忽ち猛然として盛り返へしたので郭松齡夫妻は身を以て免れ、或る百姓家の高梁を積んだ小屋に、隠れて居つたのを發見され、二人とも活きながら兩手兩脚を切斷されて仕舞つた。これが成功して居れば、滿洲國なんかどうの昔に出来上つて居つた筈だ。その當時には聯盟規約だの、不戰條約だのといふ五月蠅い羈絆は無かつたのだ。

馬賊の頭領より滿洲王にして貰ひ、郭松齡事件には虎口の危きより助けられながら、時の經つに従つて恩を忘れた張作霖は事々に日本排除に取りかゝつた。殊に吉林から會寧を結ぶ吉會鐵道は、日本が多年これを渴望しながら、張作霖の妨ぐる所となつて紙上一片の空文になつて居つた。これによつて裏朝鮮と裏日本とが、北滿の物資に惠まるゝのであつて軍事的にも最も重要な路線である。

張作霖は、京奉線と滿鐵との交叉點に差しかゝつた時、轟然爆彈が破裂して、張作霖の乗つた列車は粉微塵に飛ばされて、彼は敢へなき最後を遂げた。其の真相を發表すると、議會でも大問題となつた。張作霖の爆死事件は吉會鐵道にからんで起つて來るのであつて、壯絶悲絶、危機一髪の大活劇であつたが、其の内容に至つては述ぶることが出来ない。



田中首相は内閣組織の大命を拜するや、財界の整理と、對支強硬方針の二大政策に邁進すべしと聲明した。

昭和三年張作霖の爆死前に我押川方義先生は腦溢血のために、溘然として長逝せられた。御通夜の晩私は先生の遺骸の前で、支那通の最高權威者五百木良三氏と、火鉢を圍んで對坐して居つたら、氏は如何にも残念さうに「支那問題も進展して来たのに、もう少し生きて居て貰ひ度かつた」と、唇を嚙まれた。而して絶世の大英雄の屍が靜かに眠る柩を仰いで自作の句を口吟された。

『凍る灯に巨人空しく眠らる』

『凍る灯に聖雄の死を見詰り居し』

田中首相も親しく弔問に來られた。滿洲國成り、吉會鐵道は直ちに工事に着手、其の完成を急いで居るから開通も目睫の間に迫つて居る。

千九百十八年十一月十一日歐洲大戰が結末を告げると、次第に平和思想と民族自決の思想が現はれて來た。此の機運に乗じて支那は着々國權の回收に成功した。そこで日本の滿洲に於ける權益其の他に向つても、戦先を向けて來たのである。

未解決の案件は積んで三百有餘に上り、昭和四年までは奉天に於て日本の商店が百三十四戸あつたのが、昭和六年にはたつた二十三軒になつて仕舞つた。吉林の農安では八百人の日本人が五人になつた。法庫門では百四十人居つたのが、一人も居なくなつて仕舞つた。洮南からも日本人の影は消えた。壓迫されて居ることが出来ないのだ。日露戦争後民間で滿洲への投資は約七億であつたが、全部廢滅して僅かに残つて居るのは、本溪湖にある張作霖と大倉との鐵礦業だけである。長春から吉林、吉林から敦化四平街から洮南、洮南から北へ行く洮昂線、これ等の鐵道のために一億八千萬圓から出してやつて居る

のに、元金は勿論、利子一錢も支拂はない。婦人や子供が路上で毆られる。しまひには兵士までもピストルで撃たれたり、袋叩きにされたり、或は公安所に引張られたりした。

昭和六年八月二十九日の晩、奉天軍第七旅長王以哲少將は、多數日本人も居る宴會の席上で『我が奉天軍は内地戦で屢々彈雨をくゞつて居るが、日本兵は實戰の経験がない。我が中華民國の青年將校は日本軍との一戦を熱心に望んで居る』と豪語した。

滿洲の形勢はこんな風になつて居つたので、昭和六年の三月第二師團が交代して出發する時には、今度何かあつたら、たゞでは濟まないと思ふ覺悟のもとに、別れの盃をくみ交したのである。滿鐵守備の六ヶ大隊も整備して、幹部は悉く優秀な腕利きに取替へ、兵には猛烈に銃劍術と射撃の練習をやらせ。夜襲の時には何々上等兵は何處の土手を登れと云ふことまで、訓練して置いたのである。

けれども外務當局としては、何とかして平和的解決を遂げたいものだ、帝大始まつて以來の秀才と云はれた前亞細亞局長木村銳市氏を、滿鐵理事にして張學良と交渉を開始させたけれども、當時日本の各地では共産黨の檢擧が盛に行はれて、其の中には多數の青年が這入つて居るので、兵の大部分がそんな青年だから、毫も恐るゝに足らぬ、と高をくゞつた張學良は木村氏など、てんで相手にもしない。さすがの秀才も手も足も出ないで引き下つて仕舞つた。

其處へ中村大尉の慘殺事件が起つた。昭和六年六月二十五日中村大尉は井杉曹長と、ロシア人蒙古人の四名で興安嶺を馬で旅行し、スークコンフーへ日没までに着くつもりで路を急いで居つた處が、屯墾第三聯隊東北監視所に居た衛兵司令が、十七八人の兵をつれて追ひかけて來た。そして村はづれの飯屋の店さきに休んで居る所へやつて來て、兵營につれて行つた。身體檢査をされて旅行券、拳銃、藥、金手紙などが現れた。手紙で日本人と云ふことが分ると、俄かに險惡な形相と成つて『貴様は日本人か、



何者だ』と詰問した。『陸軍歩兵大尉中村震太郎』とハッキリ答へた。一日たつて二十七日の夜十時頃聯隊長代理中佐關玉衡と云ふ奴が、四人を引出して、口の中へ綿を一杯詰め込ませ、兩膝の下を縛つて革の鞭で半時間餘亂打させ、それから營庭に大形の荷馬車一臺と、石油一罐とを持つてこさせた。四人は全身の痛みをこらへて、漸く車に乗つた。すると兵營の東へ千三百米ばかり行つた畑の中で降り、銃殺して石油をそそぎ、火をつけて焼いて仕舞つた。以上は森少佐が特に參謀本部から派遣されて、極力調査した結果、明かになつた真相である。中村大尉は參謀本部附現役將校である。幼年學校時代から私の運動法を熱心に學ばれ今日に至るまで極親しくして居る遠山大尉とは士官學校が同期の親友で『壯烈な最後を想ふて感慨に堪へぬ』と、遠山大尉は私の處へ書面をよこした。『須く實力を以て磨礪しろ』と軍部は憤慨したけれども、濃厚なる幣原外交は沈黙した。

其處へ起つたのが鐵道の爆破である。九月十八日午後十時廿分、虎石臺にある獨立守備隊第二大隊第三中隊の河本中尉が、六名の兵をつれて、北大營西側の鐵道線路を巡察して居つた。陰曆七日の月は高粱の彼方に落ちて、満天の星は降るやうに瞬いてゐる。時に後方に於て轟然爆聲が起つた。線路の爆破だ。直ぐ駆けつけて見ると、支那兵がバラ／＼と北大營の方へ逃げて行くので、直ちに之を射撃すると同時に、所屬中隊に報告し、附近の部隊と合して二ヶ中隊、約二百三十名で、一万二千六百の支那兵が駐屯して居る北大營に向つて、攻撃を開始した。もうお話ししても差支へあるまいと思ふが、異變のあつた場合、携帯電話機を、線路についてゐるジャック、ボックスに接続して報告すると、南は旅順、大連から、東は安東、北は長春まで滿鐵の至る所へ通知される。そして奉天から東京の參謀本部へは直連電話が通じて居つて、第一報が這入つたのは夜中の二時であつた。

金谷參謀總長は『觸れる奴は皆な斬れ』と叫んだ。南陸相は『よし、斷行ぢや』と怒鳴つた。大橋ハ

ルビン總領事以外の在滿各領事、滿鐵、關東長官等皆な悉く周章狼狽なす所を知らざるの醜態を演じて居つた中であつて、獨り關東軍幹部は、毅然として泰山の如く、一路既定方針に邁進した。

張作霖の爆死、張作相問題、滿洲事變前の三月事件、事變當時の裏面的大活劇、勃發直後の十月事件等に於ける大川周明博士の行動に就いては、遺憾ながら一切御話することが出来ない。

北大營は東西二千米、南北一千五百米、中で觀兵式が出来るほどの大きなもので、十二時頃に兵營の近くまで進んだが、携帯彈三十發は瞬く間に打ち盡したのに、敵は小銃機關銃を雨霰と發射するので、一時は非常の苦戦に陥つた。其の中に撫順から第二中隊が應援に來た。夜が明ければ味方の小勢が分る。暗い中に落さなければならぬ。時間を見てもう三時半を過ぎて居る。營門の近くに、歩兵砲一門と砲丸二個遺棄されて居るのを見出して、それで門扉を打碎いた。忽ち起る突撃のラツパ、劍光一閃『突き込めい』、日本歩兵特有の突貫を開始した。『わあーッ』と怒聲の如くになだれ込んで、茲に忽ち壯絶なる白兵戦が演ぜられ、格闘、亂闘、敵は悉く城外に驅逐され、天地を搖がす萬歳の聲と共に、營門高く日章旗が掲げられた。時に九月十九日午前五時、東が漸く白んで來た。奉天の近くに居つた歩兵第二十九聯隊は、北大營に於ける日支兩軍激戦の報を受けるや、これが救援には赴かずして、直ちに奉天の支那兵を驅逐して、其の東にある大きな砲兵工廠と飛行隊とを占領し、更に六千の支那兵が居る東大營へ向つて、突撃を敢行し、夜の明けない中に、悉く我軍の手中に入れたのであります。敵は飛行機九十臺、砲四十八門、馬八百を殘して逃亡した。

長春では夜零時十五分、警備司令官長谷部少將の處へ電話がかゝつた。『只今奉天で日支兩軍が衝突し激戦中』と。長春の近くの南嶺には支那軍對砲隊があつて、三十六門の大砲は、日本附屬地の中央にある、水道タンクを目標として砲口を列べ、其下には一千餘人の同胞が眠つて居る。風前の燈とはまさ



に此の事だ。猶豫瞬を秘すべからず、直ちに南嶺の夜襲を敢行し、更に寛城子の支那兵營の攻撃となつたが、優勢の敵軍に對して、夜が明けたから戦死六十六名、負傷者七十三名を出した。戦死者の割合が非常に多かつたのである。條約上大砲は持てないから、小銃射撃と肉弾突撃の外ないのだ。安奉線上の鳳凰城には一ヶ隊居つたのを、一ヶ中隊で包圍して降伏させた。

張學良のもとに事變の第一報が這入つたのは午前五時過ぎ、奉天省主席臧式毅からで、『奉天と長春、日本軍のために占領されつゝあり』學良は起き上つてすゝり泣きした。『バイチンラ。敗盡了』しまつた。盡く敗れた。最初の叫び聲は、全く學良の運命を暗示したものであつた。

學良は英國公使ランブソンを招いて、事情を訴へた。ランブソンは南京政府の名を以て、國際聯盟に出訴することを勧めた。かくして事件發生後僅かに三日の二十一日、日支問題は早くも聯盟の俎上に上つて仕舞つた。干涉の手は續々と現はれて来る。

二十倍以上の敵に對して、帝國の生命線を守る我關東軍は、朝鮮師團に向つて増援を請求した。第一電は十九日午前二時に這入つて來た。兒玉參謀長も塚田參謀も旅行中師團砲兵第二十六聯隊は三十四里も離れた平康へ、歩兵第七十七聯隊は溫井里へ。歩兵第八十聯隊は昌寧へ何れも演習に行つて居る。朝鮮軍司令官林中將は、止むなく電命を各所に飛ばし、混成旅團を編成し、第一次部隊は午前八時に早くも平壤を出發した。すると午後一時南陸相から急電が來た。意外千萬。『事態擴大を極力防止すべし』の政府の方針により、朝鮮軍の出動を停止せらるべし。林軍司令官以下幕僚悉く色を變へた。『關東軍を見殺にして、政府は滿洲を捨てる氣か』と。然しながら上司の命は拒むべからず。止むなく鴨綠江の國境で停止を命じた。事態は愈々進展して、増援請求の電報は七回來た。二十一日午前、『關東軍は吉林方面に進出するに決し、南滿洲の警備は偏に貴軍の力に俟つ』と云ふ、第八回の電報がやつて來た。

援軍を俟つこと切なる本庄軍司令官、應援すべくしてなし得ない林軍司令官、共に苦惱慘膽たるものがある。待てども／＼應援軍は來ない。グズ／＼して居れば機を失つて仕舞ふ。——致方ない。出動しろ——。關東軍は救援を待たずして、遠く吉林に向つて出發した。本庄軍司令官は飛行機に乗つて前線に出て行つた。茲に於てか林軍司令官は兒玉參謀長の進言を容れ、獨斷專行、身を以て責に任ずるの覺悟を以て、停止部隊に對し、即時出動を命じたのである。

馬占山と張海鵬との軍が洮昂鐵道の沿線で衝突しかけた時、滿鐵が懸けた嫩江の鐵橋を馬占山軍が破壊した。我が濱本枝隊は工兵を以て修理することに決した處が、馬占山軍の石參謀長が、日本軍には必ず抵抗しませんと、言明したから、大日章旗を掲げて前進した。すると突然馬軍の陣地に砲聲があがり我が枝隊へ猛烈な射撃を浴びせかけた。これがため忽ち死傷十八名を出した。濱本大佐は即座に攻撃命令を下し、猛進突撃、四百の寡兵を以て馬占山軍一萬六千に當つた。奮戦三日、其處へ長谷部少將の増援隊が來て、敵は遂に總崩れに成つた。これから追撃戦に移つて、敵を全滅しようとした時訓令が來た。『事件擴大を極力防止すべし』。敗走する敵を見す／＼眼の前にしながら、追撃することが出來ない戦つてはならないと云ふのだ。眞晝間總崩れになつて、逃げて追ひかけて來ない。『これや不思議だ、主力を昂々溪に堅めろ』と、馬占山は易々と兵を集結した。そして悠々と四段の陣を構へた。國際聯盟と、日本外務省とは忽ちにして目に一丁字なき野羅武士馬占山を、稀代の英雄に造り上げて仕舞つた。

日本軍なすなしとして攻撃準備を整へた。本庄軍司令官は敢然『事態擴大防止』なるジュネーブからの綱をぶち切つて多門第二師團長に馬軍脅愾の命令を下した。零下三十度、双の如き朔風秒速十五メートル、凍傷を堪へながら第二師團の精銳は昭和六年十一月十七日から十八日の夜中まで二晝夜の猛進猛撃、十倍の大軍に對し、第一線、第二線、第三線、第四線と疾風迅雷！ 遮二無二、中央突破を敢行し



た。そして兩翼を引包んで擧殺すると云ふ作戰を執つた。師團長の自動車は突撃の最前線に出て仕舞つた。後も、右も、左も皆敵である。星もない闇夜に敵味方入り亂れての混戦に、至る處大格闘だ。其處へ電信隊の兵が少しばかりやつて来た。同乗の上野參謀長が何名居るか聞いたたら、其の大亂戦の眞只中で、兵は直ちに整列して番號を付け、人員報告をした。水筒の水は凍つて石の如く、飯盒の飯は氷結して砂利のやうである。一晝夜以上飲まず食はずに突撃又突撃、十九日朝はチ、ハル入城、足踏揃へて示威行進を行つたと聞いては、其の節制訓練、規律嚴正、忍耐克己の雄々しさに、そぞろ熱涙のじみ來るのを禁ずることが出来ない。

東支鐵道問題から露兵と戦つた經驗のある支那兵は、『露軍は強いけれども、尙戦ふことが出来る。日本兵に至つては、人間ではなくして猛虎だ』と語つたさうであるが、是等勇士こそは、まさに日本の國寶である。この勇敢無双の兵力が背後にあつてこそ、國際舞臺に於て華々しい行動が執られたのだ。

大聖キリスト云はずや、『人其の友のために命を捨つ。これより大なる愛はなし』と。祖國の發展擁護のために、犠牲の屍を荒野に曝らし、誠忠の血潮に白雪を染む。正に是れ宗教上高貴なる聖愛の域であつて、王道大義のために死を見る歸するが如き日本精神は、粹然として宗教の極致を發現せるものにあらずして何ぞや。

——只望む。此の如きの國民を餓えしむること勿れ。此の如きの同胞を虐ぐる者を壓抑すべし。政治の要道は其處にありと切言する。

錦州には張學良が假政府を立て、滿洲の治安攪亂を圖り、風雲急を告ぐるに至つたので、第二師團は全軍を擧げて、長驅南方に大移動を行ひ、將に總攻撃を開始せんとした。時に英米より『錦州を攻撃せざることに就ては幣外相の保證あり。強ひて斷行するならば我々にも考ふる所がある』と、最も強

硬なる抗議がやつて来た。爲に死すとも退く事を知らない日本軍は、涙を飲んで潮の引くが如く、大凌河の後方まで撤退したのである。もう少しすれば滿鐵の附屬地だ。回天の偉業も、亦々雲散霧消するのかと、私は大磐石を以て、頭上を壓縮されるやうな感に撲たれた。

此の時若槻内閣が倒れて、犬養内閣が出現した。陸軍の人氣を一身に集めた荒木中將は、教育總監部本部長から陸相の任に就いた。作戦と外交政策とは正しく一致した。昭和七月一日、斷乎として錦州總攻撃を開始した。果然、米國のステムソン長官から、外務省へ通牒が来た。犬養兼任外相は鮮かに一蹴した。皇軍は三日に錦州へ入城した。錦州陥落の報は上海の排日を悪化させ。日支兩軍は遂に衝突した。英米兩國政府からは早速抗議が来た。芳澤新外相は敢然として反駁した。

我が第三艦隊は出動した。米國の艦隊は揚子江を上つて来た。米國聯合艦隊の示威的大演習は、ハワイを中心に活躍して居る。國務省ではステムソンがブラット提督に『戦争の準備は出來て居るか』と訊いた。東郷元帥始め軍事參議官の緊急會議が開かれた。『やるならやつて見ろ』と第一、第二艦隊は其の行動を極秘にした。日米國際關係は極度に尖鋭化し、兩國々民が想像した以上に險惡なものであつた。揚子江上で日米兩國軍艦が摺れ違ふと、甲板からは双方とも戰闘準備をするのが、あり／＼と見へたかくして世界の強國英米佛の三回にわたる連名抗議も、聯盟十二ヶ國會議の警告をも、悉くこれを峻拒して、金澤第九師團に命じてウースン砲臺を陥落せしめ、續いて上海の總攻撃を行ひ、七千の日本軍は六厘の支那兵を打ち拂つたのである。これは軍に支那の暴戾を膺懲したばかりでなく、支那大陸から通商貿易上、日本を驅逐せんとしたる、英米の陰謀を打ち破つたのである。上海に於ける海陸協同の作戰の目覺しきを見て、米國は日米海戦に勝算なきことを悟り、一方北滿に馬占山を助け、丁超や李杜などの反日軍を支持し、國境に三十萬の大軍を集中したソビエツトも、日本陸軍に對して、勝目のないこと



を知つて、暫く中立の態度を執る事に決したのである。

茲に於てか米國は、實力を以て日本を押へることは、當分出来ないことを考へて、極力聯盟の道德的壓迫を加へやうとした裏面の策動が、即ち今回の勸告案と成つて現はれたのである。

願つて省みよ、米國は一體、日本に對して、そんな出しやばつた行動をとる資格があるだらうか。私は今、米國横暴史の一端を述べやうと思ふ。「我々は領土を擴張するがためには、土着民を屠殺せざるべからず」。驚く勿れ、これは正義、博愛平等をモットーとして標榜しつゝある米國が立國の始め、ウアジニア會議に於て、議決した一條である。而して此の決議は忠實に實行せられ、星章旗を飾る四十八州中、流血の慘事を演ぜずして購はれたのは只ペンシルバニアの一州のみであつて、他は悉く戰慄すべき鐵火によつて掃蕩せられたのである。

一八三六年、日本よりもズツト大きなテキサスは、米國人の煽動によつて獨立運動を起し、獨立成るや否や併合されて仕舞つた。

一八四八年、ヌエセヌ、リオ、グランデ河間の紛議に乗じ、米國は兵力を以てニューメキシコ、カリフォルニア、ネバダ、ユター、アリゾナ、コロラドの諸州を奪取した。

一八九三年ハワイの女王リリオカラニに對し、米國人が主となつて革命運動を起し、米人ゲルを大統領としたサンドウィッチ共和國を組織し、間もなく是れを併呑した。

一八九四年にはスペイン領キューバに於て、内亂を煽動し、居留民保護に名を借りて、軍艦メーン號をハバナ港に送り、自ら爆沈しながら、スペイン兵の所行なりと誣いて、遂にキューバを保護國となし、ポルトリコ及びグアムを奪ひ、事件に關係なきフィリッピンに、遠く陸海軍を送つてマニラを占領した。一八九九年には、サモア群島のチュチュイラ及附屬島嶼を得た。

一九〇三年には、太平洋上飛躍の鍵たるパナマ運河の兩岸五哩の土地永久割讓を、コロンビア國に要求して應じられなかつた爲め、パナマ州民を煽動して獨立させ、直ちに之れを承認して其の權利を獲得した。

一九〇五年にはサンドミンゴ共和國の内政に干渉し、税關を管理した。

一九一〇年にはマデロの叛亂を援けて、米國の勢力をメキシコに扶植した。

一九一三年には日英獨佛伊西の各國が承認したウエルタの承認を拒み、反軍に武器を供給して内政の紊亂を圖つた。

一九一六年ニカラガ共和國より、大小コロン島を割讓せしめ、又米國海軍根據地として、フオンセカ灣の九十九ヶ年租借を承認せしめ、更にニカラガ湖とサン、ジュアン河とを連絡する運河の開鑿權を、永久に米國に讓渡せしめた。同年更にデンマーク領西印度の三島を手に入れた。其の中のセント、トーマス島は大艦隊の投錨に適し、パナマ運河の安全を確保し、カリビアン海の戰略的價值を占むることになつた。

一九二一年十一月華府會議に於て、米國は支那を支嶽して、帝國から青島及び膠濟鐵道を返還させ。其の他滿蒙の優先權全部破棄、石井ランシング協定も解消されて仕舞ひ、九ヶ國條約の原則、機會均等門戶開放主義を受諾させられた。これが支那に於ける帝國勢力凋落の第一歩だ。

今や米國はサモア群島のチュチュイラ、ハワイの眞珠灣、マニラのオロンガポー、カビテの諸港と鼎足の形をなし、太平洋上の海軍大根據地を作り、ビューゼットサウンド、アラメダ、サンチゴ等の太平洋岸の根據地、及びカリビアン海の大西洋根據地と策應して、南はパナマ、サモア、フィリッピンから印度へ、中はサンチゴ、ハワイ、グアムから支那へ、北はビューゼットサウンド、アラスカ、アリウシヤ



ンから滿洲へと、亞細亞大陸に向つて、武装せる米國勢力の翼を張らうとして居る。これに對して日本は樺太の南半、千島、北海道、本島、四國、九州、琉球、臺灣及東西二千哩、南北一千哩、千三百有餘の珊瑚島から成つて居るマリアナ、マーシャル、カロリンの南洋委任統治の諸島を以て、喰ひ止めやうとして居る。

フィリッピンのマニラ軍港には、亞細亞艦隊四十一隻の軍艦が居つて、其處から揚子江哨戒隊を出して居る。マニラ灣の入口を扼するコレヤドル島の要塞は、十四吋と十二吋の巨砲で固められ、其の戦時任務は、東支那海及び黃海往復の日本汽船の襲撃である。

ハワイは米國海軍の前進根據地で、太平洋作戦の焦點である。その眞珠灣軍港は、水深六十尺、港外の海岸は斷崖絶壁、山の如き怒濤競ふて岩を嘯む。此所に重砲二十門、高射砲二十門、要塞砲二十門据えつけられ、其のダイヤモンド岬には威力絶倫の十六吋要塞砲が隠されて居る。後方は山又山の金城鐵壁、これを守るに一個師團の陸軍と、七個中隊の爆撃機百五十臺がある。

米國海軍は、二十年前から熱心に、東京攻撃を主眼とした太平洋大作戦を研究し、各軍艦は航續力を極度に大ならしめて居る。メリーランド級の如きは、二萬哩も行動することが出来るから、ハワイ横須賀間を三往復される。こんな足の長い戦艦は、世界三十有餘の海軍中他には何處にもない。そして其の艦底は二重底にして重油を入れ、一には燃料を貯へ、他には潜水艦にやられた時の防禦にして居るのである。

主力艦は三萬噸級が十五隻で、四十種砲二十四門、三十六種砲百二十四門、三十種砲十二門を備へて居る。もう二年すると八隻しかない大巡洋艦が一躍十八隻となる。

そして空軍第一主義を執り、航空母艦として各三萬三千噸、建造費各二億圓と云ふサラトガ、レキシ

ントンを持ち、目下更にランチャーを建造中で、何れも戦闘機百三十餘臺を搭載する。その甲板は爆弾でも凹まない電氣熔接の鋼鐵で張られてある。「空中戦に破れた軍隊は全滅する」と云ふのが、現在海戦の鐵則であることを、我々は忘れてはならない。

將來若し日米戦ふことがあるならば、マニラは軍需品輸送の關係上、太平洋海戦の根據地とすることは出来ないから、彼等は桑港ハワイを根城として、一七直ちに海空より東京襲撃の作戦を執るであらう。米國海軍の司令官ナイトは曾つて米國の國是を、一、モンロー主義の擁護 二、パナマ運河の安全 三、東洋の門戸開放 四、亞細亞人の排斥に歸して居る。日本人の耕地は一人分九畝二十三歩、米國人は五十三反歩の多きを持つて居る。無限の寶庫は固く其の門を鎖し、亞細亞に向つては門戸開放を主張する。是れ即ち米國人が神の前に於て、自己の良心に向つて叫び得る處の正義人道であるか。

今や米國は、太平洋上に於て、軍艦百六十七艘、飛行機二百五十臺を以て日本を假裝敵國としたる露骨なるデモンストレーションをやつて居るが、歐洲大戦勃發の動機が、オースタリー軍がセルビヤ侵入の想定のもとに演習したのに對して、セルビヤ住民が憤慨したのに、端を發したことを考へたならば、我が國民がそれに對して、大なる衝動を感じるのも、無理ではあるまい。依つて帝國に於ても今夏、空前の大規模の下に、海軍大演習と帝都防空大演習とが行はれることになつて居る。

東京の空襲は、第一、太平洋上の航空母艦より、第二、支那の上海或は廣東より、第三、ウラジオよ

り、第四、アラスカ方面より遣ることが出来る。千九百十四年六月二十八日、ボスニヤの首府サラエボに於て、十九歳になるセルビアの一青年ブリ



スタリーに向つて動員し、一日置いて八月の一日、獨逸はロシアに向つて、二日にはベルギーに向つて三日にはフランスに向つて宣戦し、四日には興國の大軍を堤げて、リエージュの要塞を攻撃し、二十日には萬國公法によつて、永世局外中立として、永久に其の存在を保證せられたベルギーの首府、ブラッセルは陥落した。ベルギーは英國にとつて、國防上の垣根であるから、嚴重に抗議を申込んだが、直ちに一蹴されたので、獨逸に對して戦を宣するに至つた。

日本は日英同盟の好みにより、對獨宣戰詔勅の發布となり、かくして世界、國をなすもの凡そ五十あつた中、國交斷絶三十二ヶ國、參戰二十九ヶ國、渾圓球上を擧げて戰亂 渦中に捲き込むに至つた。

亂極れば治生じ、治極れば亂生ず。天生天殺、何の時かこれ止まん。人は是非、何の日かこれ盡きむ。

世界歴史の道程をたづぬるに、始めは個人と個人の争、次は部落と部落の争、次は封建の争、次は國家と國家との争、次は民族と民族との争、而して最後に來るものは、人種と人種との大衝突である。歐洲大戰は、アングロサクソン民族とゲルマン民族とスラブ民族との衝突である。

滿洲問題をめぐつて、聯盟對日本の正面衝突の實質は、まさしく黃白兩人種對抗の姿である。米國が大西洋をガラ明きにして、全艦隊を太平洋に集中したのは、英佛の默契を示し、ロンドン電報は、日米開戦の曉はシンガポールの要塞を、米國海軍の根據地に提供すると傳へて居るが、そんな事はやり兼ねない。シヤムが英佛への氣兼ねを捨て、聯盟總會の表決に棄權したのも、亞細亞人としての意氣を示したものと見られないこともない。

諸君は、世界平和のためには、軍縮會議あり、國際聯盟ありと云ふか。軍縮會議は英米の協同武力に對して、日本に安全保證を與へたか。國際聯盟は日本の過剩人口と、食糧問題とに就て、何の諮る處あつたか。のみならず自己の入口には高く障壁を築き、剩へ亞細亞大陸の門戸まで、堅く閉鎖せしめんと

した。滿洲事變勃發の爆弾は、其處に埋没せられたのである。

櫻井少將の肉弾の巻頭に、かう云ふ話載せてある。明治二十八年、日清戦争の終の事、或る凱旋部隊が、將に本國に歸らうとして、戦歿將兵の墓前に、最後の別をしやうとして整列した。

十有餘ヶ月の其の間、共々に風雨に曝され、天日に焦がされ、彈丸の雨を潜り、劍戟の林を破り、陛下の御爲め、御國のためと、荒涼たる滿洲の原に轉戦した、亡き戦友の面影を忍びては、せき來る涙に、そゞろ戎衣の袖を濡したのである。

此の時一人の兵卒は、平素兄弟のやうに親しくした戦友の墓標の頭を撫でながら、「オイ加藤、オレはもう國へ歸るぞ。お前と一緒に村を出て、お前と一緒に戦をしたが、お前は立派な名譽の戦死オレは此の面を下げて國へ歸る。お前を此處へ残して置くのは、實に残念だ。だが喜んで呉れ。遼東半島は日本のものになつたぞ。お前の骨は矢張り、日本の土に埋つて居るのだ。安心してくれ。オイ加藤、オレはもう歸るぞ」と、彼れは恰も生ける者に語るが如く、一言一句に血を吐く思ひ込めて、戦友の忠魂を弔つたのである。「たそがれに亡き戦友の墓とへば、先つものは涙なりけり」

だが遼東を船出した凱旋部隊が、下關に上陸して見ると、三陸干渉のために、遼東半島は再び支那に還附され、戦友の忠義の骨は、日本の土に埋められたのではなかつたのだ。のみならず、間もなく露都に於てウイツテと李鴻章との間に露支秘密協定が結ばれて、遼東半島から南北滿洲の領土權は、ロシアの爪牙に委ねられ、鐵道は數く、砲臺は築く、引いて朝鮮半島より、帝國の腹部に向つて、槍の穂先が擬せらるゝの危機に迫つたのである。

茲に於てか日本は、決死的反抗を敢行すべく、國運を賭して、三十七八年の戦役を戦つたのである。日露戦争が無かつたならば、滿洲はとうに、ロシアのものとなつて居つたに相違がない。



當時ロシアの面積は日本の五十倍、常備軍は五倍、クロバトキンは日本兵三人に對して、ロシア兵は二名で充分だと云ひ、兒玉大將は單線であつたシベリヤ鐵道の輸送力を二十萬と見、これに日本が三十萬の兵を出して、五分五分の戦が出来ればよい。せめては六分四分までに、こぎつけたいと云ひ、山海相は帝國軍艦の半分は沈める覺悟をした。そしてたつた十億圓の軍費を拵へる目安も立たず、何とかなるだらう、と云ふ悲壯なる決心のもとに戦を始めたのである。然るに露兵はドシ／＼増員して、三十八年の八月には、ハルピンのリネウイチ軍は百三十萬、後方部隊を合して二百萬となり、これに對抗する大山軍は七十萬、後方部隊を合して、百萬となり、豫後備の兵も悉く前線に送られたのである。單線のシベリヤ鐵道で、どうしてソナナ大軍が送られたかと云ふに、戦争が済んでから分つたのであるが、彼等は列車を送りつ放しにして、來た列車はドシ／＼線路から外して仕舞つて、後から後から送るの大英斷をやつたのであつた。

此の如くにして、再び我同胞二十萬の鮮血は、滿洲の草を染めたけれども、ポーツマス條約によつて得た處のものは、滿鐵の沿線左右僅かに二十メートル、其れも取つたのでなくして租借、タツタ二十五ヶ年借りたのだ。大隈内閣の時、二十一ヶ條で九十九ヶ年に延ばしたけれども矢張り租借である。

處が、ベルサイユ會議に於ても、ワシントン會議に於ても、米國と支那とは協力して、二十一ヶ條の撤廢を迫り、滿洲に於ける帝國の權益は、累卵の危きに陥つたことは、何回であるか分らない。

然るに今度こそは、名は獨立であるけれども、心から提携して殆んど一體である。會つて一人の國士が、國を憂ひ、世を慨いて、明治神宮に詣で、

『ましまさば、世はかくまでに亂るまじ』

甲斐なき我を許させ玉へ』

と、神前に額いて熱涙を流しましたが、今度こそは、明治大帝の御英靈も、嗚かし御満足遊ばされただらうと拜察する。滿洲の曠野に逍遙ふた忠勇の魂も、始めて安らかに、眠ることが出来るであらうと、嬉しさの思は胸の底からこみ上げて來る。

然かも渺たる東海の一帝國が、全世界を敵とし、敢然として屹立して居る勇ましき姿を見ぬか。昭和八年二月中旬、熱河問題が險悪化した時。滿洲國を認めざるジュネーヴに於ては、日本軍の熱河侵入は明かに戦争であつて、日本對世界決裂の試金石とした時、『熱河討伐は國內問題であり、長城外の支那軍が策應する場合は止むなく國境を越ゆることあるべし』と聲明した。日滿議定書に依て、帝國は堂々と此聲明を實行しつゝある。西に亞細亞の大陸を抱て印度支那の文明を受け入れ、東に米大陸を控へて、ヨーロッパ文明の流れに浴し、世界の何れの國に於ても、經驗することが出来ない所の、東西兩文明が、グレート、ストラッグルする大激浪、大混亂の渦中に立つて、内には思想の險惡、財界の不況、外には聯盟五十有五ヶ國、これに米露の二大強國を加へた大同團結を向うに廻して、孤立無援、自主獨立の勇を奮ひつゝあるは、世界歴史あつて以來、未だ會つて見ざるの一大壯觀と云はねばならぬ。

三千年の歴史によつて養はれた日本武士道の堅い骨は、今尙ほ我々日本人の脈管を躍りつゝ流れて居るのだ。の戦に、滿洲の野に流した忠勇の血潮は、今尙ほ我々日本人の脈管を躍りつゝ流れて居るのだ。

然るに一部同胞の中には、ユダヤ人マルツスの唯物論に立脚した經濟思想にかぶれて、國家組織の破壊、皇室の否定をたくらむ者があるとは何事だ。過般私は上京しました時、赤坂見附を歩いて居つた所が、突然交通遮斷に會つた。何事かと思つて立つて居ると、聖上陛下の御通過である。沿道は憲兵と警官との垣根を以て固められ、陛下の自動車の廻りは、武装した將校が騎馬とオートバイとで、御警衛申上げて居る。



一天萬上の陛下にして、我がしろし召し給ふ國土に於て、而かも帝都の中央に於て、かゝる御警戒をなし奉らねばならぬとは……何と云ふ情けない……何と云ふ心外なことだと、思ひ來つた時、私の兩眼からはハラ／＼と熱い涙が溢れ來つて、眞に腸寸断せらるゝ思に堪へなかつた。私は惘然として、立ち盡したまひ、獨り無念の唇を嚙んだ。『聖上陛下御警衛のいかめしきををろがみて、こゝは日本の都ならずやと唇をかみぬ』。

今……我等日本人は、實に超特非常時に直面して居る。日本を中心として、太平洋上と極東大陸とに世界の暗雲は危機を孕んで居る。傍には紛糾紛亂極りなき東洋の火藥庫支那、各國の利害は此所に交錯し、激突して、濛々たる怪烟は燻つて居る。

眼を上ぐれば大興安嶺の西、茫々として青空に連るコロンバイル高原の彼方には赤色ロシヤ、チタ第十八軍團は、星のマーク嚴しき鐵兜に銃劍を閃かして居る。顧れば東太平洋の波浪白く躍る處、世界最大の海軍が精銳を集めて、巨砲の口を揃へて居る。

世界五十五ヶ國を向うにまわして、日本は聯盟に打ち勝つた。然しながら冷かに世界大潮流の動きを観れば、激浪底に渦き躍り、空の彼方此方には電光閃き怪雲亂れ飛ぶ。孤立日本の航路には山なす浪がうねつて居る。

『一穗の寒燈、眼を照らして明かなり。沈思默坐すれば限りなきの情、首を回らせば知己の人既に遠し。丈夫畢竟豈名を圖らむ。世難多年萬骨枯る。錦城の風色幾變更、歳は流水と共に逝いて歸らず。人は草木に似て春榮を争ふ。邦家の前途容易ならず。三千餘萬の蒼生を奈何。山堂夜半夢結び難く、千岳萬峯風雨の聲』。深夜一穗の寒燈に對して、國運の前途を思へば、憂心忡々として、眠り成り難し。對內的に對外的に日本國家の使命は益々重大である。希くは諸君各自皆な日本國民としての自覺を持

たれ。皇室の神聖、國體の尊嚴をかしくみ國運發展に對して、眞剣なる貢獻を致されんことを、切望して止まざる次第であります。(終)

侍從武官長

榎 陸軍大將

拜啓 此の度は皇國日本の大飛躍なる御講演記録御惠贈下され有難く正に拜讀仕るべく、右厚く御禮申上候 敬具

帝國在郷軍人會々長

鈴木 陸軍大將

先日は貴著御惠贈下され有難く御禮申上候 敬具

南 陸軍大佐

御惠贈下され候貴講演記録二冊有りがたく拜受、一氣讀破、誠に高邁卓絶の御高見、憂國の御至誠、感極まつて身震ひ致し候。一冊は直に家弟次郎(前陸軍大臣、關東軍司令官、現朝鮮總督)に送り申候。押川大英雄の經綸略敬服無恨にて御座候



## ◆伊東小學校に於ける講演の一節

(昭和十一年五月九月午後二時)(北豆東海岸教員大會にて)

心身の中心を養へば、絶対強健を獲得することが出来るが如く、國家も亦、中心を確立することによつて、國勢の隆、國運の發展を齎すことが出来るのである。

我が大日本帝國の中心は、申すまでもなく我が神聖なる 皇座でありせられる。其の莊嚴なる宗教的意義に於ては世界史上、類例を見ざる處のものである。帝國は即ち、上に此の 皇座を戴き奉る處の、立憲政體であります。

立憲政治は即ち、國民の輿論政治である。然らば即ち、國民の正しき意志によつて、正義の士を、議會に送るのでなければ、代議政體は、完全に其の機能を發揮することは出来ないのである。

然るにた。選挙毎に、多額の買収費が、國民と政治とを、腐敗せしむるが爲めに、バラ撒かれる。繼いで起り来る處のものは、何だ。墮落、不正、潰職、收監……マア何と、何と云ふ淺ましい態だ。然かも此の如き、政治的破産恥滅を選出したのは、誰であるか。

かくして金權と政權とは、互ひに纏綿苟合して、政治の公明を汚し、内治外交、ともに萎微して振はず。國民生活は益々脅かされ、社會不安の雰圍氣は、此處に醸成せられつゝある。獨り 至尊をして社稷を憂へしむ。かくの如き状態であつて、三千年來、其の光榮を誇り來れる、此の日本の國家を——何とする。

平和會議とは何だ。國際聯盟とは何だ。軍縮會議とは何だ。列國は獨逸の軍備を、極度に制限しながら、自國はドン／＼と、軍備擴張をやつたではないか。國際聯盟は、弱少國の權利と、其の存立を保全するを聲明しながら、黒人帝國エチオピアの滅亡を、坐視したではないか。ロンドンに於ける軍縮會議で、攻撃的武器の全廢を主張した日本の提案は、にべなく一蹴されたではないか。

我々は一方に於ては、世界平和の爲めに、協力すると同時に、一方に於ては、「我々は大和民族である」この誇りを抱いて、「日本人の日本」のために、文化的生存の戦ひを闘ふのだ。

帝國を中心として、太平洋上と、極東大陸とに、世界の暗雲は、危機を孕んで居る。傍には、紛糾紛亂極まりなき東洋の火藥庫支那、各國の利害は此處に交錯し、此處に激突して、濼々たる怪岬は、煙ぶつて居る。此の時に當つて、内には思想の險惡、財界の不況、農漁村の疲弊、内閣の首班は相ついで、兇刃に斃るゝの、不祥事が續出してゐる。

三月事件、十月事件、五、一五事件、血盟團、神兵隊事件等が、相ついで起つても、梧桐の一片に天下の秋を知らず。吾、落葉正に紛々たるの状態なるにも、關はらず。内閣の諸公ならびに政黨人及び國民は、昏々として時代の潮流に覺醒せず、重ねて、二、二六事件の勃發を見るに至り、恐れ多くも、至尊の御宸襟を離まし奉つて、——何の申譯があるか。天に在つて照覽せられ給ふ、皇祖皇宗の御神靈に對し奉つても、——何の面目があるか。

彼等叛亂軍は、衛門を出でたるの時より、既に皇軍の範圍を、逸脱したるものである。去りながら、多數忠勇なる陛下の將兵をして、國威に反き、國法を破るの行動を敢てせしむるに至つた原因と責任との一半は、誰が一體、誰が負ふべきのだ。叛亂軍の汚名を以て、鐵腕を上げて、彼等を鞭うつと同時に、内閣の諸公ならびに爲政黨、及び國民



は、陛下に對し奉りて、充分に其の職責を盡さざりしの意味と責任とに向つて、須らく顧みて、先づ自らを、鞭打て。

一美濃部の學説なんかで二千年來、輝き來れる帝國の國體は、微動たもせんぞ。諸君は國體明徴を叫び、尊皇愛國を説く。さりながら、陛下、地方行幸の御砌、殆ど全警察の機能を上げ盡して、尙ほ且つ足れりとするこゝ能はず。在郷軍人、消防組までも出動せしめて、御警戒申し奉らねばならぬ状態であつて、果して忠良なる國民の資格があるか……………。

◇拙詠

春 充

- ◇ 山の岨の林の上を徂來する  
白くも聖しキリストに似たり。
- ◇ 夕日染む曠野の末に雲ながれ  
羽をとあわたゞし鳥のむらがり。
- ◇ やとうどが杉のまわしをとるひまに  
足もとの小草に眺め入りたる。
- ◇ 亭々と天をつく杉林に立ちて思ひける  
丈夫のこゝろもかくあらまほしと。
- ◇ 水涸れし無人の澤にひとり立てば  
山の岨ゆかし古木森々。



◇水ぬるむ若草の野に櫻木の

つぼみほころぶ春は來にけり。

◇杳冥の世界はあれか小ぐらき林に

やまもゝの幹白くぞ見ゆる。

◇宵やみにほの白く浮けりすもゝの花

をもたき香り涅槃のしづけさ。

◇大島のはしゆ月あかくと海にかをる

うましりんごの色かもしかす。

◇朝まだき明星一つ空にあり

老松の下にわざはげむわれ。

◇朝なく廊下に立ちて正中心の

絢爛のとばりひらくは樂しも。

◇中心に秘むるダイヤモンドの我が神殿ゆ

ブラチナの扉けふも開かん。

◇風もなき春の夕べにひとしきり

散る花をあびて坐禪くむわれ。

◇いとしてみてもりはぐゝまん吾の衷に

不可侵を誇る光の世界。

◇光得し吾には奈翁の雄略も

何ぞや不朽の世界を誇る。

◇清崇なり艶麗なりはた空無なり

扱てもくすしき正中心の神殿。

◇春さきのころもがえにも似しさやけさ

正中心にふれたる刹那。



◇書きつくし云ひつくし説くもたぞやある

中心の道にひたすゝむもの。

◇五十四歳となりていよゝ若くいよゝ強し

中心に活くるわれいつ老ゆる。

◇人は病のために死すものならず

弱きも強くなるをわれ證しゝたり。

◇醫師がさじなげし瀕死の大患もみな

いと易くいやしたり冷たき天理。

◇裏ざられすてられしとき獨往不求と

思ひ定むればわすらひはあらし。

◇なア！にッ！何人の力もからぬ

宇宙の道はわれひとり往かん。

◇多数の力は強しされどまた

一人の力は更になほつよきものかな。

◇關羽千里獨行のふるごともしさぎよし

吾もあへて執らんか自主獨往の道。

◇一刀一斷 禪機 活機

光明 歡喜 虛無 清明。

◇あゝ神よみめぐみ我れには満ちてあふれぬ

迷へるはらからを願みたまへ。

◇森閑と闇つゝむ山の一軒家

星のまたゝきにとわの聲きく。

◇われは主人兼下男電話なくラヂオなく

山中のすまゐ太古の民。



◇ 山山山ひといい山の中ですね  
初めて訪ねこし友のあいさつ。

◇ 面會謝絶やむなき要談十分間と  
われいくとせか沈黙としたしむ？。

◇ 断聖堂と名けしかども聖を絶てば  
聖そこ あり安かれ君よ。

◇ 臥龍岡のけしきに似たり閑けきかも  
梅よ竹藪よ 畑よ 農夫よ。

◇ 崖のはに枝ひろげたるならの大木  
まゆだんごさして見たしと思へり。

◇ 堀りわりの断層うねり十重二十重  
億万年の 世界 おごそか。

◇ 二十年ぶりにて中里介山君と會ひしかど  
日々ゆき々せる氣輕さよ心の友。

◇ 中里介山君とがけ上の望樓に語れば  
海風はつめたくそで拂ふ夏。

◇ 沼津にすむ兄を訪ねもせず又來もせねど  
日々會ふよりも濃きふたりの情。

◇ われは兄を聖賢と尊び兄はわれを  
眞男子と愛す心のくさび。

◇ 兄病むも兄倒るゝも兄往くも  
我れは關せず神彼れにあり。

◇ 兄われを信愛して絶對自由なりし  
かゝる兄またありと覺えず。



◇ 干渉せず指導せず教も受けず  
神に歩みて 熱愛の兄弟。

◇ わが心わが兄は知るわが意氣を  
わが兄は愛すわれ他に求めず。

◇ 知己を兄に求むる心うかびしは  
我れ老いたるか叱 叱 叱—。

◇ たゞ進むひたぶるにすゝむ上を仰ぎて  
うしろ振り向くは神にかなはず。

◇ 聖靈をけがすものは許されずとキリストは宣へど  
政治をもてあそぶもの又然らずや否か。

◇ うら悲し歴史の底にうもれ去る  
志士の熱 涙 國士の血 汐。

◇ ジュネーヴの雄たけびもまた背後の力  
さらば饑えざらしめよこの國たみを。

◇ 君と民その外になにが要る天とわれ  
たゞ至誠もて直面せよかし。

◇ 天下後世をあいてにするもなほおぞまし  
至誠たゞ神と對する 聖臺に立て。

◇ 英雄の精神をしのびくわつきて天を仰げば  
椎の木の上を白雲悠々とながる。

◇ アレキサンダー、ジンギスカン、ナポレオンをしのびては  
そゞろに腕なる山中の耕夫かな。

◇ 天下のむ意氣われにあり春たけて  
やぶのうぐひす鳴くねのどけき。



◇ はなやかな舞臺きたなき樂屋うら

あゝ人生何ぞ表裏のけじめはへだゝる。

◇ 中央の政界東京市政

地方自治にまつわるしこ草うるさし。

◇ 關羽敵中に赤兎を驅りしがごと

しこ草はらはんすべなきものか。

◇ ライオンのきばかくすわれ國のため

ちみもうりようを嚙みてすてんか。

◇ だきやう苟合にくびつなく市長をもつ東京市民は

生けるしかばねいたゞくにも似たらずや——君。

◇ 電車従業員給料半減市議歳費倍

盲斷の勇だけは偉なりとせんか。

◇ 笛ふきつまことの道のをたけびも

躍る人なし空しきこだま。

◇ 太平洋の浪碎くるを目の下に見て

國をおもふわれは朝日に向へり。

◇ かくのみに我れはなげきぬうつし世に

まことの道のなぞたよりなき。

◇ 總選挙のさわぎをよそに山の上より

太平洋のなみ寄するを見る。

◇ 政黨の總裁は落ち無産黨士は最高點

そこに世相の流れをくむべき。

◇ 一萬圓で候補に立たんか其の一萬圓を

ルンペンに與へて喜ぶ様みんか。



- ◇ 代議士に立つは丈夫の恥なれど  
國のためとをしく叫ぶをのこは居ぬか。
- ◇ 帝國選良のうそぶく議會なるかや  
ばくだん動議の愚劇はかなき。
- ◇ 叩頭愁訴かたいにも似し候補者の  
演説會場にわが足むかざり。
- ◇ 籠の中に一羽の目白さえづるをきく  
そこは選舉なく政黨もなき天地。
- ◇ 審判者たる選舉民があらかじめ判決を  
下すにひとし不可解の地ばん。
- ◇ 不義不淨の財をくらふさうかの犬と  
肅選演説にわれ聴衆をむちうちける。

- ◇ かくして欽定憲法の大典を汚すとは  
何ごとだと叱咤せしにみな泣く人性は善。
- ◇ 立德關羽張飛が同じ日に死なんと  
桃園の誓にわが心は躍る。
- ◇ 我が子たすくべからざれば君とれと云ふ女徳の  
うつくし心にわがこうべは垂る。
- ◇ 臣の肝腦地にまみるとも泣く諸葛の誠忠に  
男の子の涙われとゞめあへす。
- ◇ 官軍のたまがよくあたる日本も  
安心でこわすと斃れし南洲慕はし。
- ◇ 萬死もて迫らるゝとも捨てめやも  
この清き節この心意氣。



- ◇ やがて又同じ枕にふしぬべく  
誓ふ心はたゞ大君のため。
- ◇ 斃れてもく又たをれても  
ほゝゑみ誇り祖國を守らばや。
- ◇ たゞ獨逸のための一念よりなきヒットラーの  
愛國の熱血ひたぶるに好まし。
- ◇ われ又印度三億の民を愛して英政府の  
心膽を寒からしめしガンヂーの瘦軀を仰ぐ。
- ◇ エチオピヤに同情の涙はをしまざるも  
伊太利を鞭つムツソリニの姿も雄々しからずや。
- ◇ 門の外に走りいで大川博士を迎へし時ゆ  
乙女の如く躍りし心。

- ◇ 大川博士と橋立の巖に坐せし  
忘れがたなき天城の落日。
- ◇ 大川博士と伊豆海岸に佇みし時  
乃木將軍馬上の淋しき姿うかべり。
- ◇ 山深し大川博士と語りふかせし夜  
あかくと照らせし電燈の輝き。
- ◇ 除塵と別るゝに忍びざりけん立德の思かも  
熱海の驛まで我れも送りしか。
- ◇ 發車の汽笛なりし時又走りよりて  
無言の握手の力の強き。
- ◇ 大川博士の汽車が去りにしレールを眺めて  
涙にじみし女々しき男。



◇ おきてなれば詮かたもなし此の超特非常時に

大川博士をひとやに送るは悲し。

◇ 憂國の情 經綸の才 男子の意氣

押川先生をともに師と仰ぎし大川博士。

◇ 肉をそぎ骨をけづりし志士うすもれて

國すゝみしにほこるか國たみ。

◇ 殊勳甲に値する志士はとわにうづもるとも

國につくせし誇こそかがやかしき勳章。

◇ 滿洲事變もタツタ數人の捨身の力に

大勢たいせいがのりゆきしを知る人やたぞ。

◇ 國際法にわすらひせられて汗にぎる大活劇も

禮讚の辭をつらね得ぬはいともつらしや。

◇ 押川先生とはかりし極大事件に

ひとり突きすゝみしが矢張り破れし。

◇ 清く大なる經綸も押川先生ゆかれては

施すにすべなき我れぞあわれなる。

◇ 岡田首相、即死、——即死、——即死の號外を手にして

まなこを空にわれいく時か經し。

◇ れんこくのもと青年將校重臣襲撃

ア、雪ぞらわびし憂國の情。

◇ 落花紛々雪紛々皇國よ

なが往く道をあやまるなかれ。

◇ 梧桐の一葉に天下の秋を知り得ぬ者は

去れ去れ國政攝理の資格はなきぞ。



◇ 縣特高課の警部來りしかども朗らにて

友遠方よりの心地せしかな。

◇ 雪は紛々花は紛々ひとり史をひもときて

大楠公の誠忠みにしみわたる。

◇ 世を憂へ國を念ふて吾の心

燃ゆるが如し 大島の烟。

◇ 政黨の腐敗國民の無自覺この現状で

三千年の歴史はゆる日本帝國を何とする。

◇ 武士道のかたき骨と義憤の血汐とは

今わが國民より朽ち失せにしか。

◇ わが胸のとゞろくはなぞ日の本の

行く手いかにと憂ふる心。

◇ 世界地圖くりひろげつゝいたづらに

胸の高なりとゞめあへずも。

◇ 興亡の理をあきらめてジツト眺むる

世界のうごき日本の使命。

◇ 潮風にからださらして磯の岩に

小貝とりつゝ北支那を思へり。

◇ 山にありて鉞もてどわか魂は

時にはうつろバイカルを越ゆ。

◇ 潮風にけづられたらむ鋭き巖に

浪のくだくるを見てシヤム、ビルマを思ふ。

◇ しみぐとバイカル崑崙の地圖を見て

熱き血汐の胸にたぎるも。



◇支那ビルマ印度濠洲を解放して

太平洋文明に日の本起たすや。

◇北樺太沿海州を買収して

日本海のなみも皇威にしづめすやも。

◇一君のもとに萬民はたゞ一家

王道をもて世界にたゞばや。

◇國はさかえ民にさちあらばうつし身の

命すつとも名は汚すとも。

◇おほらかに常春の中心に遊ぶ吾も

何ぞや淋しき國思ふ時。

◇銀座街頭の光によるめく大學生等よ

五色の酒になが血肉はたゞれしか。

◇銀座街頭によるめく大學生等にあひし時

をぞましや我が目がしらに涙にじみし。

◇銀座街頭によひしどれたる大學生等よ

これが日本を背をはんをのこか悲し。

◇オ、青年よ楊子江のかなたにひとみを放ちて

日本男子の熱血はわかざるや。

◇立て！立て！醒めよ！！祖國のために

オレ等の肩には天の大使命があるんだぞ。

◇目醒めよ大和民族なはいつまでか

醉ひしどるゝぞ叱——叱——醒めよ。

◇活ける歴史によりてはごくまれこし日の本に

神の使命やどる尊さを知るや。



- ◇ 日の本の使命おもへば我が胸は鳴れど  
行くての道は遠くけわしく。
- ◇ 救世のけいりんはむねに秘むれども  
理想の里は遠くもあるかな。
- ◇ この君のためこの國のため捧ぐる命ぞ  
男の子のほまれ男の子のほこり。
- ◇ かくに國を思ふて涙をつ  
赤き心のたへがてぬかも。
- ◇ 陛下の御通過に消防の出勤とき  
涙わりなく湧きしは何ぞや。
- ◇ 聖上陛下御警衛のいかめしきををろがみて  
こゝは日本の都ならずやと唇をかみぬ。

- ◇ 憂國のなみだわりなくにじむかな  
歟もつをのこなすべなきも。
- ◇ エレミヤはユダヤの曠野に泣きしかど  
われも涙す民目ざめすやと。
- ◇ 國を思ふむねもゆる我れたゞひとり  
伊豆海岸の巖にたてる。
- ◇ 五十人の清き道の士くににあらば  
昭和維新はかたからずと我れ思へども。
- ◇ 五十人の志士だにあらば日の本は  
ア、……五十人の志士だにあらば。
- ◇ 日本精神を誇る東海の神國に  
タッタ五十人の義士さへなきかな。



- ◇ 浪くだくる伊豆海岸の絶壁に  
 國さかえよと祈りてたつ我れ。
- ◇ 國を思ふ胸もゆる朝な夕な  
 みにくし男の子なみだながるゝ。
- ◇ 非常時の浪は日本の岸にくだくる  
 甲斐なきわれよ山にかくるゝ。
- ◇ 治國平天下の道は此の外になしと  
 思へどもくア、思へども。
- ◇ 君ゆるせ國思ふとき我がこゝろ  
 狂へる如し二を一とよむ。
- ◇ 深憂の胸いためつゝ崖上に出づれば  
 やはり閑けし伊豆の海岸。

- ◇ 深憂の胸やるせなく較くゞりしに  
 フト出あひけり満開の梅。
- ◇ きやう紅滴る海棠のかにひたり  
 建武中興の事蹟しのぼるゝかな。
- ◇ 國の現状を憂ひて月あかきその  
 われや男の子のはらわたしぼりし。
- ◇ ア、かうすれば國家百年の計はたゞんと思へども  
 これを行ふ大英雄のなきぞかなしき。
- ◇ 身を殺しすめらみ國につくし得ば  
 我がはらわたも抉りいなます。
- ◇ 國を思へばこゝろ狂はしはらわたいたし  
 身をさかるゝのやすきにしかず。



◇この心知る人なきやこの心  
知る人ありや胸いたづらに燃ゆ。

◇氷もて胸つゝみなばこの心  
すゞしくありなむ國憂ふ我れ……。

御講演を拜聴した諏訪部臣民（赤化防止、猶太禍の講演にて全国を巡回せる人）氏は、石田大佐に向つて、歸途、自動車中にて、一紙片も手にせずして、まるで出鱈目の如く、年號月日等スラ／＼と、話されました。先生の頭の良いのには、眞に驚歎の外なく、全く度膽を抜かれたと、話されたさうであります。

聽講者 増田智万雄

### ◇講演録及び和歌に對する謝状の中より

（次第不同）

陸軍大佐 南正吾氏

拜啓、貴講演御近詠録二冊御惠贈下され難有拜受、不相變二十臺のお若き肉體美又往年（二十二年前）拜見其の儘の立派さ。而も御年五十四歳とは——、嗚呼之れ果して人乎將た神乎。中心力の御體得只々感激の外なし。御講演に於ては、高邁なる御識見、御近詠に於ては、全篇これ憂國の御至情、衝天の御意氣を以て、充たされあるを伺ひ得て、近來の欣快事、深く敬服欽仰の至りに不堪候。押川英傑の大人物、驚嘆無限に候。一冊は家弟次郎（前陸相）に送附申候。

早稲田大學教授 松平康國氏

拜啓、御講演速記並に尊味の刊本、難有拜受、万古不磨の御精神、紙上に躍如、親しく大獅子吼を承るが如き想ひ有之候。

田中武治氏

殊に正中心道の御發見に至つては、身心一如の一大事にして、山月先生の道さ、春充先生の力さは、眞に是れ乾坤の



雙壁と可申、愈道のために、御精進の程奉祈候。

御講演の印刷書、始めより、再讀三讀仕り候。小生並に稱坦万次郎氏著、近時外交史を興味を以て讀みしこころ有之候が、右は既に過去の外交史と相成り居り候。反之貴殿の御講演は、眞に近時外交史たるの觀有之候へは、好んで紙裏に徹するまで、熟讀可仕候。

醫學博士 河原水地氏

立正大學講師 守屋貫教氏

御講演録並に御近詠、言々句々多大の感激を以て拜讀仕り候。文は人なり。一讀きながら御風格を現望するの感有之候。

前靜岡縣立高等女學校校長 佐々木松藏氏

其の節は、歎き書卷をいたゞき、篤と拜讀致し、自ら感奮興起する處多きを覺へ候次第深く御禮申上候。

岐阜高等農林學校教授 鈴木榮太郎氏

此の度は極めて教訓多き御書御惠贈下され忝なく厚く御禮申上候。正中心力體得の刹那の御感想は感銘深く拜讀致

し候。歌は小妻と色々御吟しながら興味深く拜讀仕り候。

長谷川喜三郎氏

偉大なる御姿を拜する毎に、中禪寺湖畔の生活を想ふ。豆南の突角に於ける兩雄の會見、近世日本の得がたき繪巻物なり。(大川博士と著者との寫眞に對し)

陸軍歩兵中尉 三邊雅久氏

先生の御講演冊子御惠贈に預かり、早速拜讀仕り候。最近の御英姿、益々壯にして温順、鐵の如き筋骨に充滿せる力、而も顔貌の温和にして平靜なる、眞に正中心力の偉大さに、恍惚として見惚れ申候。次に四十數頁に亘る大講演こそは其透徹せる識見と、憂國の進りに、皇國日本精神の發露として感佩措く能はざる所に御座候。一言半句も洩らさずに熟讀仕り候。澤山の御近詠亦先生の御心境を伺ひ得て、正中心力の偉大さを、愈深淵妙理と感服仕り候。

北海道大學講師 西村稔氏

謹而啓上申上候。昨日は御講話と玉詠との御刊行物御惠送賜はり、正に拜受仕り候。靜かなる春夜、感激を以て拜誦眞に御禮に接し申すの感有之候。聖中心に御到達被遊候は、過ぐる年、拜聽の光榮を得申候節を想起せり、膚に粟粒を生じ申候。御講演には、幾多未聞の秘事を承はり、而も雄大なる御講想と、該博なる御資料、而もこれが、例の如く



颯河の如くに迸り出づる熾火の御熱辯を想起し、感憤興起の勃々たるを感得仕候。玉詠に至れば、最早天衣無縫にて格を破り、法を出で、而も完成一字の増減を許さず。誦誦拜誦して、御心中を恐察仕り候。既に感至つては言説無之、穢れ易く、老い易き心胸を洗ふ料と、幾久しく拜誦仕るべ候。

辯護士 山内 香氏

先日は御講演集御惠送下され拜誦仕り候。壯者を凌ぐ御活動に、今更ながら驚嘆致候、一度御拜眉を毎度候に付き御都合御知らせ下され度候

心の家主幹 後藤 謙 香氏

御惠送の印刷物、驚異の眼を以て拜見、終始一貫の御精進に敬服仕り候。

使命主幹 村田 太平氏

御惠投の冊子拜讀、親しく御講演を拜聴する心地いたし候。御近詠を拜誦しては、憂國の御至情に心うたれ申候。いよく御若々しくあらせられ、修養の効まことに驚き入り候。

不肖敢て『肥田先生歌集』に題す

日本——を負擔すべき眞の英雄、  
光を和げ、久しく寒村に俗塵を避く。  
今、絶後の非常の時に遭ふ、  
壘畝の臥龍、感懐そも幾何ぞや。  
輒ち詠歌、百餘を連ね以て之に寄す。  
憂國の熱血迸る處、肺肝に出づる句々、  
舌雷六合に轟く悲憤の雄叫びと爲り、  
或は時に警角を吹き、  
或は時に清琴を弾す。  
優婉の情趣、  
豪壯の意氣、  
これを寫すも言葉なし。  
詩聖バイロン今、あらば、—— 瞳目、嗟嘆、忽ち卷を  
覆ふて號泣せむ。  
噫、かくの如き聖雄、又何處にかある！又何處にかある！！  
欽慕に堪えたる哉、眞の聖雄。——

昭和十一年四月二十三日

横濱市日下小學校訓導

土屋 友男 拜識



# ▽八幡野遊記

伯爵 二 荒 芳 德

「八幡野つて、さんな所たらう。」と云ふのは此頃の私等の食卓の話題であつた。

「明日、行つて見ようぢやあないか。船で行けば日歸りが出来るから……」と私が主張すれば、長女の富士子は手を打つて妹の明子と離りながら「嬉しい、嬉しい、参りませう。」と云ふ。家族に一人の異議者もない。

x x x x x x x

一月六日午後七時、伊東の海岸に出れば、風は少し吹いてゐる。幸、私の家庭は航海には恵まれてゐる。妻も富士子も生來、船乗さばさう云ふ風の氣持であるか知らないさ云ふ。明子（六歳）と治子（四歳）とは未知數であるが、これもそんなに船には弱くないらしい。年のいつてゐるだけに、親爺たる私が唯一の船乗體験者であることも珍らしい。船はこの地方の優秀遊覧船、「櫻丸」であつて、四百噸と云ふ、東京灣内の大船ではあるが、もう少し船室の手入れを、行き届かせて貰ひたいものだ、と私一流の旅行施設改良論が頭をもちあける。八時出帆、手石島の沖を回つて、船は大海の白浪を左舷に受けながら南に進む。富戸の港を出てから、愈々日蓮ヶ崎にかゝる。こゝは波が荒いので、都人士が苦しむと聞いてゐるが、ウネリの幅が廣いだけで、海面は穏かであつた。

かねて肥田君から、日蓮ヶ崎と、赤澤港との間の奇勝を紹介されてゐるが、今こゝを通過してつくづくこの海岸の妙趣を賞せざるを得なかつた。

抑伊豆の東岸に於て、賞せられてゐるのは熱海では錦浦、伊東では手石島附近であるが、これは佳景でないとは云はぬが、孰れも海岸には有りがちな佳景である。伊豫の南海に生れ、多年烟霞の痼疾に委せて、かなり廣く國內を歩き回つた私の眼には、詩人墨客の所謂佳景にはあまり釣られない方である。しかるにこの日蓮ヶ崎と赤澤港との間の海岸は關東一帯の海岸としては値ある奇勝であると思ふ。

富戸の港を出てから、今まで曲浦、長江、入り亂れてゐた伊豆の海岸は、俄にその姿態を改めて、兀々として屹立する灰藍色の絶壁を形造つてゐる。しかも、この絶壁は高さ海上より數百尺を出でず。望見すればこの絶壁の上なる平原に鬱々繁茂する樹林と對照して後の山麓及び丘陵と得も云はれぬ調和をなしてゐる所に價值がある。この樹林は沖から吹きつける強風によつて自然にその梢が扁平に短められ、恰も庭師が剪り揃へたやうになつてゐる。

十時半、船は八幡野の港についた。港は云へ、灣ではなく幾々數里に亘つて打續く、この絶壁は俄にこゝに一大破裂を作つて辛うじて乗船下船の途を開いてゐるさ云ふにすぎぬ。松に彩られた切り立つ岩壁の奥に、美しい真砂の濱を見出した時、龍宮城の關門に私等は導かれつゝあるのではないのかと思つた。

舟によつて、岸に上つた一行は、靜かな漁夫の家々の間の小道を辿つて、道行く人に肥田邸の在りかを聞いたところ、それが折よく肥田邸へ出入をしてゐる青年であつたので、直に案内をして呉れた。

肥田家は、昔この地の庄屋を務めた由緒ある家柄で先代、濱五郎氏は維新の英雄江川坦庵、高島秋帆等と親交があり



源軍機關總監まで務められた。後には宮内省御料局第一代の長官となつた人である。現當主和三郎氏は近在に名高い十支腸虫驅除の醫師であり、養子の春充君は人も知る川合式強健術の創始者で、君の川合姓を名乗られてをる頃から、私は友人であるのだ。

私は春充君の行文流麗な著書を読んで以來、この八幡野の肥田邸は永らく私の想像の對象であつた。

切石に舗んだ、軒つゞきの八幡野の村道を入丁近くも迂曲折して上りつめる道は平になつて、村をはづれる。私等は左方にまんまるく、こんもりと繁つた、氣持のよい丘陵に、たらく坂の山道がある。私等はこの道を辿つて行く。向ふから春充君が急ぎ足で迎へに來られるのに會つた。周到なる先の青年は人をして間道より、逸早く、春充君に、この突然の來訪者の一行の到着を急告したのであつた。聞けば、春充君は實に明日、伊東の我々を訪ねやうとさる、等であつて我々が一日遅れて此地に向へば正に派陸で行き違ひになる所であつたと言られた。

私は春充君が妻と語つて居る間に、又黙想に沈みながらこの道を辿つた。

佛人で「日本」のことを紹介したフアルレー著のラ、バタイユ（戰闘）の中に、この書の主人公が長崎市で日本の名家を訪問した一くたりを思ひ出しながら想像を逞うした。

氏は次の様なことを書いてゐたと思ふ。

「曲折せる小徑を我は辿つた。道の兩側には竹藪が打續いてゐて、その盡きる所に柴の折戸があつて、これを入れれば小さやかな掃き清められた玄關があつた。私は靜かに門を排して訪なへは鈴を振るやうな聲で、取次に出て來たのは、ムスメであつた。彼女は慇懃に疊の上に兩手をつき、「お出で下さいませ」としとやかに私を迎へるのであつた。

現代の生活の淺薄さに不満の私、所謂文化式の横行に嫌たらぬ私はこの文句が妙に深く、頭の中に染み込んで、もう十年も前にフランスで讀んだ、この記憶とその聯想を今でも棄てなかつた。その間長崎にも行つたが、今は昔の長崎ではない。かゝる聯想にふさわしい屋敷は見出せなかつた。京都にも度々遊んだ。しかしかゝる聯想を満足せしめることは出来なかつた。

然るにこの小徑は、まさに私の十年來の聯想を満足させた。しかも、上の方から如何にも穩かな容貌の六十の坂を越えたと思はれる田舎の婆さんがさぼくさ下りて來るのに會つた。私はもう實に嬉しくてたまらなかつた。この小徑竹藪、さうして坂をのぼりつめた所に二百年も経たうと思はれる椎の老樹の下に自然木の柱が門として立つてゐるあたり、又、この門を入れば、早咲きの白梅が滿つてゐる所、純然たるごつしりした一枚の切妻屋根で蔽ふた大家は、近頃かつて見ないなつかしい建物であつた。凡てが靜かな日本そのものを偲び得る環境である。昔なつかしむ調和を備へた一廂が即ち肥田邸であつた。私は寧ろ自分が和服の上に西洋帽子を戴いてゐることの不調和をさへ感ずる程にこの小徑は古雅の味に富んでゐた。

肥田邸の建つてゐる山は八幡野の村の西方に屹立した高さ三百尺の丘陵であつて、その東南側は頗る峻嶒に聳つてゐて、脚下に漁村を距つて、噴煙の靜かに立ち登る大島が長崎のやうに横たはるのや、さては利島、新島、式根、神津、三宅、御倉等の諸島が、飛び石のやうに點綴して居るのを俯瞰するの勝地にある。丘陵の西側が斜面ゆるく、遠く、天城山の裾野に續いてゐて、こゝに小徑が設けられてゐる。

肥田家では私等大勢の突然の訪問に對して、且つ驚き且つ喜ばれ、家族を舉つて、歡待をされたことは何とも恐縮で



あつた。殊に新年外々で合妹の貞子さんは、冬休で歸つてをられ分家の精一郎さん夫妻も泊りがけで来て居られる所に押しかけたので、頗る迷惑をかけたことであつたらう。

尤も私等は春充君の厚意で昨多中より伊東温泉の肥田別荘の借用を許されてをるので、云ははその禮をかねて新年の御挨拶に致謝まで何ふさふふのが當初の目的であつた。であるから辨當を持参して海岸でも食事があり、玄關で新年の挨拶を交し、直に二時の伊東行き汽船で歸る豫定であつたのだ。然るに入幡野に入つて道を聞いたのが、肥田家に出入してある青年であつたために、辨當を食べる機会を捉へる前に、肥田家に内報されたため遂に、事は志と違ひ、纏つさへ、春充君の好意ある衝中に陥つて一日只一回の伊東行の汽船にも乗り遅れ、家族と總て、七人が一晚を御厄介になつたのは新年外々を飛んだお騒がせであつた。

肥田家の人々は心から喜んで私等を迎へてくれた。子供等が、東京で繰返出来ぬ、山の芋掘りを見せて貰つたり、美しい白鬼を小屋から連れて来て下さつたりした。中食の後に南面せる山麓に子供と稚鹿の木をあさつたり、相橋の畑に果實を求めたりした。

前にも述べた通り、春充君は川合式強健術の創始者である。君は元來甲州の産、十八歳までは身體甚だ虚弱茅床と綿名され八人の兄弟中六人までが、病弱のため早世されたといふ過去に於ける悲しむべき歴史の持主であるが、この悲しむべき事實に汲み取して、深く生理、解剖、醫學の各方面を研究し、これに座禪の妙諦を契合せしめて、心身一如、獨特の中心生命力を基礎とする強健術を創始されて以來、今日まで實に二十有八年、月を閲し年を逐うて、益々その蘊奥を究めつゝあるのである。

今日の卑近なる科學の上のみ立てる強健法に比して、我々の物足らざる諸點を的確に説明される所に私は深い心腹を捧げざるを得ない。殊に明治四十三年以來、「静座」に妙味を持ち來りし私には、君の言は深い深い味がある。

肥田邸には君の強健術を實修する道場がある。私は親しく、君の鮮かな實修を見又これを自ら經驗するを得た。夕刻には一同は臺所の爐邊に押しかけ自在釣をかけた燃えさかる椿火の小薪をくべく、春充君の母堂、夫人、合妹が我等の食事を用意される忙しき中で色々と精神修養の事を語り合つた。

明くれば一月七日、私は朝六時臥床を出で、只獨り、前山に登つた。足は自然肥田家の用水樋を傳うて、その源泉に廻つた。山の谷間のつくる所に清い岩清水を掬したいと云ふ、自然に憶がれる本能からであつたらう。喚しい、すべり勝ちの徑さも云ひ得ぬ程の所を、ひたすら登ること約三丁溪谷の窮まるころ、晝なほ暗いところに水晶のやうに凍つた岩の間から流れ出る銀のやうな水を掛け樋によつて遠く臺所の大水槽に引いてあるのであつた。

谷間をぬけ出で、裏山に登る。眼下の入幡野の漁村はまた眠りから覺めぬ。前に横たはれる紫の大島は、ゆるやかな傾斜を見せて靜かに浮んでゐる。私はこの景色を暫らく佇んで見てゐた。

程なく大島の三原山の山稜の天空を翻する一帯が、黄金の色に彩られるかと思ふと、やがて圓々たる朝暎は三原山の頂上の少しく左の方より輝々上つて來た。その朝暎の第一線は先づ肥田邸の雲をかすめて私を射つた。第二線、第三、と朝暎は徐々陰影を征服して行く。肥田邸の表座敷に高島秋帆が日新館と題した扁額を掲げてあつたが、私は寧ろこの一丘を朝日ヶ岡と名づけたいと思つた。



朝日を拜む風習は、日本人古来の美風であるが、都人士には漸く忘れられつゝある。日本を象徴する朝日の旗を意味する心持は朝日を拜む心持を離れては解されないと思はれた。

日本族、遠き神代に仰きみし、大日これぞ我拜がみぬ

日、出でんとす大島山の頂き、伊豆の東を先づてらすべく

紺青の海の廣原、金色の道鋪き大日今臨みます

今や、最後の光線は漁村を照して、やがて海面に落ちるや、その一線は溶けて海面に擴がり、金波のきらきらと輝き渡る外、もはや朝暉の輝かしさを失つて、夜は全く明け放れた。

朝食を終へてから春充君の案内で、後山の八幡社に詣でた。境内の幽邃、靜寂、清淨三つながら、整つた神社である。三抱にあまるやうな老杉は亭々と參道の石階をさし挟み、人を怖ぢぬ鳴禽は頭の上に囀つてゐる。御手洗に山清水を引いたのも嬉しいが、鮮苔の色の深いのも懼れの種である。春充君の令妹貞子さんと、令嬢の紀子さん、和子さん、令息修一郎さんが私等一家族を案内して下さつた事は何より嬉しかつた。

境内には中々珍草、奇木があるさうであるが、三抱もある程の老山櫻や、土俗ケンボ梨と云ふ、丈餘の大樹で梢に甘味の強い枝とも實ともつかぬものが生じ、これを食べると心臓病に特效があるといふ靈樹の如きは正に一見の價値がある。午後再び春充君家族と共に村の有志諸氏の案内で發動船にのつて海岸の奇勝を探つた。先に述べた、城門を思はせる瀧港を出で、赤澤の海岸に向つた。崖壁に穿たれた大瀨小瀨を望みつゝ、碁石ヶ濱、赤澤の濱を觀る。日蓮ヶ崎より八

幡野に至る間と同じやうな珍らしい岩壁が少しの間隙をも見せず打續いてゐて、數丈餘の上には松や楊梅の樹が扁平に繁茂してゐる。

引き返して八幡野の關門を扼せる、橋立の奇巖に登る。

前にも述べた通り岸壁は日蓮ヶ崎から赤澤濱に幾々と打ち續いてゐるが、その中央に只一つの隙があつてこれが八幡野に通ずる唯一の海路であるが、その北方に當つて、この關門を守衛するかの如き地位に、この橋立がある。巖は名匠が刻んだのではないかと思はれる五角形の自然石の疊まれた大岩磐で、其の上に、通ずる道は、恰も高塔に登る階段のやうに自然に鋪かれてゐる。これを登りつくすと、上は百疊を數きうる程の面積がある。この上に立てば脚下には瑠璃の玉を溶かしたやうな碧色の深淵が打ち寄る波に、或は高く、或は低く搖曳してゐて、水中の魚族の數も數へられ、海底に眞紅に咲く、天草の色も賞せられる。

仰けは蒼々たる天空が、我等の頭上を蔽ふばかり、夜ならば星の精を語られるであらう。

私はこの橋立に登つて全く、お伽の國に遊んだやうな氣になつた。絶海の孤島に惡魔のために呪はれて擒になつたあの王國の美しい姫君が、故郷を戀ふて、朝な夕な神に祈つて百ヶ日の瀧願の日に、天の一角より純白な大きな鳥が飛んで来てこの岩角にひらりとさまつたと思ふ瞬間、大鳥の姿は消えて、眉目清秀の若い王子は、その妹たる王女を抱いて、再び大鳥に身を變へて、遙、故郷の王城に向つて飛んで行くといふやうな、白日の夢を見た。

奇巖である。然も、魁偉な、恐ろしい奇巖ではなく、暖かい、夢の國に遊ぶ様な奇巖である。

三時、下田から櫻丸が來た。私等一同はこれに乗つて、二日の清遊を得た八幡野を別れ、肥田家の家族を別れを惜し



み交して、北に去つた。

此の行、肥田一家の私等に對する款待については眞に感謝する辭がない。又村の有志者諸氏の盡力についても深く謝意を表す。多くの人が伊豆の幹道沿ひの風景を説くことには到れり、盡せりであるが、この東豆の絶勝を見逃してゐることは眞に遺憾なことである。

### 附記

二荒伯の著書、「敢然頂角を行く」(實業之日本社發行)の中に掲げられた、「八幡野遊記」の名文を、此處に拜借する潛越を、敢てした機會に於て、一言附記することを許していただき度い。

貴族院議員、二荒芳徳伯は、其の圓満なる人格に於て、其の卓拔なる識見に於て、其の燃ゆるが如き、愛國の至誠に於て、私の深く敬慕する處の心友である。殊に其の、詩的情操の豊かなるを、儼然たる風貌さは、私が常に、欽慕に堪へざる處のものである。私が頂戴して居る數十通の書簡の悉くが、其のまゝ、立派な文學の書で、私は何回、繰返して讀んで居るか、分らない。伯は、日本少年團の赤みの親であり、育ての親であり、又全國青年渴仰の的となつて居る。伯の辯舌は、高雅にして流麗であり、其の文章は絢爛にして、人を魅了するの力がある。伯の御世話で、妹は、三好男爵に嫁し、最も幸福な、家庭を作つて居る。

令夫人は、北白川宮家より、御降嫁遊はされ、賢徳高く、天女の如く、神々しき方であらせらるゝことは、皆人のよく知る所である。和歌に秀で、書を能くし、又フランス語に堪能であらせられる。私は茲で、私が實際に拜見した、驚くべき事實を、御話して置かうと思ふ。

私共が頂戴して居る御書函だけでも、數十通に上り、長いには三冊に、餘るのさへもあるが、其の多い御手紙の中で、タツタ一字の消したのも無ければ、一字の挿入したのも無い。行と行との間は、正しく明いて居つて、天地も整然として居る。而も奔放自在、活きて飛ぶやうな筆蹟である。ペンで書かれた端書も、澤山頂いてあるが、その端書も、始めから終りまで、丁度ギツシリ一杯に、書かれてある。こう立派に書かれるのには、細心の注意を拂つて、筆をやるゝことゝ、私達は、思つて居つた。

然るに、伊東にある、私の別宅に御滞在の時、食後、臺所の食卓の隅、其の上には一杯、茶碗たの、皿たのが載せてあつた、其の食卓の隅へ、端書を置かれて、ペンで、細字の走り書きをせらるゝ、其の速やさ、而も何時もの通り丁度端書一杯に書かれて、一字程の餘白も残されない美事さ、正に入神の御技能、流石に私は唖驚して仕舞つた事がある。私が曾て、十二月の末つ方に、梅と櫻の花さを、御贈りしたら、早速禮状と共に、和歌を寄せられた。

伯「木がらしの叫びをよそに梅櫻

ひと時に咲く君が宿かな

令夫人「晴れわたる君が心は八幡野の

梅に櫻にのどけさを知る



肥田春充先生感想錄

郡是製絲株式會社教育課編纂



動靜一致ノ妙諦、コレヲ收ムレバ臍下丹田ニ藏レ、コレヲ啓ケバ天地宇宙ヲ包羅ス。  
コノ感想録ハ先生ノ崇高ニシテ雄大ナル人格、眼一世ヲ空シクスル程ノ大識見、該博深奥ナル智能、灼熱セル愛國ノ熱情ヨリ生レ出タ合理的産物デアリマス。  
故ニソノ衷ニハ宗教アリ、哲學アリ、體育アリ、文學アリ、藝術アリ、政治アリ、經濟アリ、恰モ百花繚亂トシテ咲キ競フ一大花園ノ如キ感ガアリマス。  
サレドコレ悉ク、先生ノ聖中心ノ妙境ヨリ進出シタル金玉ノ文字ナルヲ思ヒ、我等コノ御文章ヲ通シテ、妙境ノ一端ニデモ觸レ得テ以テ人生ノ眞面目ヲ喝破シ、進ンデコレヲ悟リ得ルニ至レバ至上ノ幸福ナリト思フ者デアリマス。

昭和十一年七月六日

編者識

◇悠々タル哉。中心世界ノ人。飄々乎トシテ浮雲ニ坐シ、平々焉トシテ草上ニ眠ル。  
神ニ逢ヘバ神ト遊ビ、鬼ニ逢ヘバ鬼ヲ侶トス。鳩雀ハ肩上ニ休ミ豺狼ハ足下ニ戯ル。  
凡ノ文凡、——自然ノ妙。立ノ又立、——悟道ノ極。

◇私は地震、天雷、暴風、大火事、大洪水などが大好だ。強雨がドツ／＼と車軸を流す様に降り注いで、暴風はゴーツ／＼と、荒れ狂ひ、ゴロム／＼ビシヤツと、近々の森に、落雷した時など、最も痛快だ。私はじつとはして居られないので、外套に身を固めて、暗夜、大木の陰の下を、歩く事も屢々であつた。軀は忽ちズブ濡れになる。けれども私の胸は嬉しさに躍る。濁流、滔々たる水の力を眺めることも愉快だ。焼かれる人々には氣の毒とは思ふけれども、大火事で、バツ／＼と焼け落ちる時など、活々とした壯快を感じる。バイロンはチャイルド、ハロルドに於て、天變地異の樂さを歌つて曰く、「天候激變したり。あゝ暴風と闇黒よ。汝の強力は驚くに堪へたるかな。されど其の愛らしさは、婦女子の瞳に宛も似たり。峰より峰に亘りて、活雷は股々と轟き、群山舌を揺かして、言葉をなし、ジュラ山は濛々たる雲霧のうちより樂しげに、アルプス山と呼び對ふ……」と。何者の卑怯ぞや。神もし愛ならば、何が故に、地震、天雷、大風の如き災を、世に下すとの、痴言を吐く。艱難、天災、疫病、死亡……交々存せすんば、我等は人世の平坦、無聊、砂漠の如きに飽き果てなん。

◇古木大樹に埋められた、八幡野の岡に初春の朝日が、射して來た。鬱陶しい連日の、雨が晴れて、暖な風はソヨ／＼と吹いて居る。空には、綿をちぎつた様な白雲が、嬉しげに、動く。私はバイロンの、一句を思ひ出した。「露けき朝よ、その呼吸は腹郁なり其の頬には花咲きつ。いと樂しげに狭霧を吹き去り、地は墓場を有せざるに似たり」と。何と閑かなことであるよ。見よ。その生ける松を、その活ける庭石を、その活ける水溜りを。而して、空氣の鮮かであることよ。雀は嬉々として梢に戯る。私は襟裳に出て、強い呼吸をしたが、如何にも自分は活きた世界の活きた機械であると感じた。

◇板の間で猛烈に、氣合の練修をやると、筋肉や皮膚に、輕微な、痺れの様な感じがする。其の快さつたらぬ。又ドカツと、瞬間に、自然と中心へ力のまとまる、愉快さつたらぬ朝鳥梁川の見神録で「偉大なる者に、ハタと出逢つたやうな感じ」と、形容された心持である。——ハタと、中心が引き緊まり、樂み裏に溢れる。

◇使はぬ鐵は錆びる。溜つた水は腐る。働かない筋肉は弱る。——平凡な事實だ。



- ◇肉體の美とは、體格と體質と體力と姿勢とさうして精神との相乗積……。
- ◇無から御光のさすやうな生氣……。しかも、シットリと落ち附いた姿……。これが達人の、體得して居る共通點……。
- ◇未練なき決死の覺悟さへすれば、——恰も世界を、踏み潰した感がある。死を辭せざる勇士の精神を拘束する鎖は宇宙間になし。黄金、何の力ぞ、動爵何の光ぞ。刀劍何の威ぞ。
- ◇「恐るゝ勿れ。我れ既に世に勝てり」。單に猶太人に勝てるのみならず。單にヒラトに勝てるのみならず。單に十字架に勝てるのみならず。人世の、凡てのものに勝てるなり。過去、現在、未來を通じて、既に勝てるなり、これ即ち 斃されたる基督の勝利なり。
- ◇死か。……本來空の我に歸するのみだ！。死は一度であるから一層楽しいものである。
- ◇大は無限なり。小も亦無限、無限の小は無限の大。
- ◇天下舉つて、これを惡む時、我れ好んでこれに加擔するの病あり。……正義の一手販賣者と。姦邪を斬るに當つて須らく、先づ自らを纏て？。
- ◇大正六年十一月十三日夜、海拔三百七十尺の裏山に建てた展望臺で徹宵、星座と親んだ。晴れ渡つた晩で、寒風がビュー／＼と吹いて居た。先づ北天三十五度の高さに、北極星(Pole star)が、轟殿な姿で、光を抛けて居るのを見出した。其れを交點として、東西南北に、天球を區切り、星座を讀んで行く樂しさ。私の魂は、忽ち億萬里の天外に飛んで、暗黒の寂寞境も、美しい光明界となつた、極星にぶら下がつた様な、小熊(Ursa minor)其のそばに、頭を上げた様な龍(Draco)富士山を倒すに似た様なケフェウス(Cepheus)W字に似たカシオペア(Cassiopeia)扱てはアンドロメダ(Andromeda)カクス(Pegasus)の壯麗な「コト」三角(Tria ulum)牡羊(Aries)鯨(Cetus)南魚(Piscis australis)鰐(Grana)水瓶(Aquarius)は、それを巡つて居る。白鳥(Cygnus)が泳いで居る銀河(Milky way)を隔つて琴座(Lyra)織 星と、鷲座(Aquila)牽牛星とは、相對して輝いて居る。牽牛、織女と云ふと、神秘的な物語を持つて居る星で、見た處では、眞珠玉のやうであるが、あれで私共の太陽(約一萬四千四百度)よりかづつと高熱で、二

- 萬一千六百度といふ恐ろしいものである。ペルセウス(Perseus)は六角錐の如く、其の近くに、駁者(Auriga)牡牛(Taurus)の一等星が輝いて居る。大鳥の東端千箇時の燈臺で、白光明滅するあたりに、希臘古代の勇士が、楯を捧げ、劍を振り上げて、立てるに似たオリオン(Orion)の雄大な星座が現れて來た。三星のそばにある一等星のわきに可愛らしい兎(Lagus)鳩(Columba nouchi)がある。反對のがわに、赤坊が連れ立つたやうな雙子(Gemini)山羊をかへた様な駁者(Auriga)の、一二等星がある。
- それから、大犬(Canis major)小犬(Canis minor)獅子(Leo)の一等星が、飛石のやうに、列んで居る。大熊(Ursa major)は大分夜が更けてから、漸く東の、地平線上に、全部の姿を現はした。時計が無かつたから、星圖と對照して見たら、ほゞ午前一時二十分であつた。アルゴ(Argo)海蛇(Hydra)の長い形は、海上、濃氣の裡に見え隠れして居る。……獨り臺上に佇んで、紺碧の空を仰ぐと、沈黙した彗星は、魅惑的な美光を投げて、此の身は恰もガイヤモンドの雲に浴するの思ひがした。
- ◇不信任案、提出の日に於ける、我が高貴なる、帝國議會の有様はごうだ！。咆哮怒號、卓を叩き、床を踏み鳴らしまるで、蜂の巢をついた様だ。其れに就て我等は何事を述ぶるの勇氣をも持たない。唯、皇帝陛下御通過の路傍に於て、無政府主義者の過激なる演説を寛假したる 英國紳士の禮度を念ふ。——澤山に鳴いて寂しき蛙かな——。
- ◇最上の寶は——健康と自由——。
- ◇智識の進歩を、妨ぐるものは智識なり。
- ◇彼の激しきが、可なるが如く、此の穩かなるも、亦可なり。
- ◇得ることが、何でもなきと等しく、失ふことも、何でもなし。
- ◇山は谿に向つて、我が如く高かれと、望むこと勿れ、谿は山に向つて、我が如く低かれと、求むること勿れ。谿深きが故に、山自ら秀で、山高きが故に谿自ら幽かなり。
- ◇黙々として、日覺め黙々として、食し、黙々として、働き、黙々として、念ふ。——獨自一個の、聖樂境——。



- ◇積極的に、捨身の覚悟あれば、天上天下、縦横自在、信歩往來皆坦道。
- ◇甕に水を、入れて呉れても、底を砕いたら、何になる。家を建て、呉れても、人語共に、焼いて仕舞つたら何になる。こう云ふ種類の親切？をやる。義人？あり。恩？と道？とを以て、常に人の子を殺す。
- ◇我が愛誦する、熟語——「赤誠 放膽」——。
- ◇日本の女達よ。先づ眼を開いて、自らの體軀を見よ。そうして恥づる所が無かつたならば、敵國獨逸婦人の御轉變を罵倒せられよ。
- ◇本氣に働く時には、腹へは、自然に力が這入る。重い物を取り扱ふと、脚には自ら力がこもる。眞面目な労働に勝る、健康法はない。それを意氣地のない怠者共が、其の仕事を疎かにして、強健術だの、静坐法だのと、迷ひ來る愚さよ。尊き農夫よ。労働者よ。汝の氣に静坐法あり。汝の體に強健術あり。
- ◇富士山麓で天幕講習をやつた時、一高學生三田村保武君と二人で白糸瀧が懸つて居る、崖下に降りて行つた。私は持前の冒險性が、簾々と、首を擡げて來たので、直ぐ様、素裸になつて瀧壺を泳ぎ越し、岩を傳ふて高さ九丈の本瀧の眞裏に這つて行つて、壯大な水の落下と、谷を動かす轟聲とをあくまでも楽しんで危険には、一種高調した趣味がある。往年桂川で瀑の上を、泳ぎ渡つた時には、グーツと水の中へ引張り込まれて、もう少しで瀧壺に落とされる處を、僅かに、岩にかちり附いて、助かつた。倉見山で絶壁を攀ち上り、途中で進退谷まつたこともあつた。富士山麓龍王の地下孔へ、獨りて這入つた時にも、岩角につかまつたまゝ、蠟燭の火が消えて、死の覺悟をした。暴風雨の後、濁水滔々たる桂川と、日川とに飛び込んだ時は兩回とも、とても駄目だと思つた。漸くにして助かると性も慫もなく又々危険を冒すのが愉快になる。リヴィングストンは、獅子に噛み殺されやうとして、僅かに從僕に救はれた時、アラアラになつた左の腕を、右手で抱きながら、We see immortal till ur work is done, 『我々は我々のすべき事を爲し遂げるまでは死なないものと見える』と、冗談を云つて居つた。私もそれを確信して居るから危険を冒すのは一の樂である。

- ◇雪が降る。私は降雪の夕が大好きだ。満目たゞ六花の繽紛たる中には、天の大暗示が含まれて居る。佐倉宗五郎が子別れの夕にも、こんなに、雪が降つた。玄徳が孔明を、草廬にたづねた時、臥龍岡には、雪が降つて居つた。ナポレオンは吹雪の中で、モスコイ退却をした。日はとつぷりと、暮れて仕舞つた。雪はシト／＼と、益々急に降りしきる。——何でこんなに、降るのだらうか！
- ◇朝まだ昧い裡に、床を叩いて跳ね起き、冷水に軀を清めて、窓を開き、暗い天空に、花を散らした、星を眺めながら、深い静かな、呼吸をして居ると、曉の微光は、だん／＼に、夜の幕を押しつけて來る。ガイナスの息のやうな冷たい風は、梢の夢を、搖る。世界は覺めた。人間の眼は何時開かれるだらう。
- ◇『我れは知られど我が心、なご悲しくはなりぬらむ。すぎし昔の物語、忘るゝ時のあらざれば。』夕べ涼しく暮れそめて、水しづかなるライン川、入る日まばゆく山々の、頂かけて照りはえつ……。何と、まあ、艶美の情趣なるよ。
- ◇大宇宙の無限界には、東西南北、上下左右、古今なし。
- ◇道徳の解放は可なり。罪惡の奴隸となる勿れ。
- ◇『曾我兄弟も、大石も、仇とられれば、たゞの人。』たゞの人では、仇はとれず。仇討の曾我大石よりも、曾我大石の全體は、尙ほ更に大なり。——
- ◇自ら立つ能はざる者は、何人もこれを立たしむること能はず。
- ◇如何なる死と雖も、如何なる幸福にも勝れり。
- ◇人を虐げし人は、虐げられし人よりも、自らを虐げし人なり。
- ◇喋らなければ、解らない人間は、喋る惡漢には、あざむかれる。
- ◇強者の無抵抗にあらざれば意義なし。
- ◇泥土にまみれたる、土百姓の手は、洗ひたるピラトの手よりも、清し。
- ◇美しき者の、眞仰よりも醜き者の、眞なるが、一層美なり。



- ◇嗚呼、欽羨敬慕するに堪へたるかな、裝束御前。年僅かに、十六歳。決然、死に就いて、夫、渡を助け盛遠を救ひ而して、又自ら鮮かに活きたり。水の如き、清操、千載のもと、凜乎として、夏猶ほ寒きを覺えしむ。憐れむべし力士稻川の妻。自らを賣りて、夫を殺し、恩主を殺し、併せて自らを愚に殺したり。
- ◇無聲の聲に聞き、無爲の行ひに、見るの明なくんば、人物の眞價は解らず。
- ◇春夜湘南の一會合、百燭の電燈は、晝の如し。軍人あり。政治家あり。官吏あり。教育家あり。實業家あり。各疵を裂き、肩を上げ、口角泡を飛ばして、激論壯語す。一寸話がト切れた時。私はザブーンと云ふ波の音が、涼しく、神々しく、響いて居るのに、氣が附いた。人間界の論議には不關焉と、……靜かに、幽かに……。
- ◇至誠を以て、一貫すれば足る。鐵棒を以て、地獄のドン底へ、叩き落とされたつて、ピクともすべきにあらず。
- ◇眞の愛國は、公明正大を、第一となす。徒らに外形的利益にのみ、汲々として眼盲するが如き、小愛國者輩は、畢竟國を誤る者なり。古來、國を亡ぼせる小愛國者、夥からず。
- ◇命は食にあり。病も亦、食にあり。禍は口より出で、病は口より入る。
- ◇誤解を忍ぶのは、愉快なものだ。祇園に酔ふて、足蹴にせられた大石も、睨者を、偽むくこと以外に、一種の樂を感じた。ゞらう。
- ◇中々に、雲より上に出でぬれば、雨降る夜も、月を見るかな。雲の下に、ウジャ／＼して居る、公侯伯子男、扱ては大博士、大教育家、大宗教育家……雲の下の議論は、いくら巧妙でも、光なし。
- ◇……バサツ！。一刀兩斷……サラリと棄て、振り向きもせず。——無執着……天空海淵——。
- ◇「これから、直ぐに。」——決斷と實行——。
- ◇平凡なる労働の中に、無限の富と、最上の喜びと、而して眞實の禮拜とを見る——。カーライル曰く「眞の勤勞は宗教なり」と。
- ◇自己の心に活きるの人は、獨り全世界に、活きるの人なり。斯の如き人を、斬るの劍は宇宙間に無し。

- ◇何?!——「醫は仁術なり」と?。何ぞ獨り醫に限らむ。慈悲の涙を以てせば、大工も左官も、家根葺も石搬も水撒も凡て仁術だ。
- ◇安逸の奴隷たる勿れ、活動の奴隷たる勿れ。
- ◇味方をして、團結せしむるの道は。——必要に迫らしめよ。死地に陥らしめよ。敵をして、分裂せしむるの法は、富ましめよ。樂ましめよ。巧智ならしめよ。
- ◇死もし生より、劣るものならば、厭ふべきものならば、悲しむべきものならば、死は生の樂と愉快とを一層明かになすものなり。死は恐るべきものにあらず。されど死は急ぐべきものにあらず。
- ◇凍風が、ビュウ／＼と吹きすさぶ冬の夜、川の中に飛び込むで、ぬれた顔だけ水の上に出し、星の世界を眺めて居ると、鋼鐵の様な體に、シリシリと冷たさが、針の如く沁み込んで来る。同時に魂までも澄み渡つて来て、人の世の汚れも、煩累も、すっかり脱落した様な心持となる。自然の死といふものは、こんなものであるとしたならば死の味は甘いものであると、私は飽かず／＼冷たい刺戟を樂しむのである。
- ◇完全なる休養姿勢に就ては、運動と同様の注意を拂ふ價値がある。
- ◇裸體になつて、充分に清風を味はひ、日光と親しむのは、非常に樂みなものである。大自然に對して自分の體格を臆氣もなく、曝らし得る人は、無上の幸福者である。
- ◇運動中の休息は、運動の一部である。休息のための休息ではなく、次の運動を、確りやるための休息である。形を換へた、運動である。運動の一部である。
- ◇朝に霜を踏んで家を出で、夕に星を戴いて歸る労働者は、尊重すべきものである。私は風雨の烈しい晩などは、電車に乗つても、運轉手や、車掌に對して「ごうも御苦勞」と心の中で、會釋する事が屢々ある。又救世軍の人々が道端で、熱心に話して居るのを見ると、通りながら、首を下げて往くこともある。更に世の中には、凡ての幸福と平安とを抛ち、果ては健康も、生命も悉く犠牲にして、只管、人類の向上、發展に、努力し奮闘する志士、仁人が



あるのに——たゞンヤリと浮世の快樂にのみ耽り、甚だしきに至ると、弱者を虐げ、同胞を憎まして、ケチな五十年ばつかの塵の命を、有害無意義に過す者もあるとは……。何事であらうぞ。

◆……金色夜叉の俠妓お静の嘆叫が、胸すく許りに小氣味がいゝ。三千何百萬とか、四千萬とか、大した人数が、居るぢや御座いませんか。そんならもう少しは、氣の利いた、嬉しい人に、揃見しさうな、ものだと思ひますのに——富山見たやうな奴がうちや／＼居て、番狂はせをして行くのですから、世の中が無事な日と云つちや、ありは致しません。——うちや／＼——番狂はせ——全くさうだ。さうして赤誠の眞士、時に遇はずして、溝壑に轉帳して居るのを見ると……。餘りの情なさに、男ながら、聲を放つて泣きたくなる。あゝあゝ、豫言者を殺して、その墓を建つるのは、昔も今も變りはないのだ……。寂々たるかな、人世の原。……。

『見渡せば花も紅葉もなかりけり。うらのとやまの秋の夕ぐれ。』

◆フツクラと軟かく、而も弾力のある筋肉は、勢のいゝ動脈血で、一層赤味を帯び、其の呼吸の、穏かなことは丁度櫻の花に眠つて居る。小蝶のやうでもあるし、又若葉を渡る、春の夕風の様でもある。天真爛漫、幸福、喜悅、無邪氣、活潑、勇健、平和の美は、全身に漲つて来る。これは堅實、輕妙な練修を終へた後の快感である。

◆人は何時でも、腰が据つて、重さがドツシリと落ち、足裏が床へベタリベタリと吸ひ付いて居るやうで、なければならぬ。剣道では切先三寸といふが、足先一寸活かして置けば、其の人の健康は破られない。古人曰く『踵を以て息す』。

◆運動ズボン一枚になつて、半身の肉體を、大氣に暴露すると、壯快勇躍の情禁じ難く、天真爛漫たる、大自然の子となつて、新しい世界に、生れて来たやうな感じがする。

◆至人只これ常、人をして豪いと感ぜさせるのは、未だ至らざる證據なり。眞の至人は只これ凡、只これ常只これ稚只これ純、圓滿なり。平面なり。空虚なり。

◆一日一善日誌に、書くは頗る可なり。一日一善をなして、これを隠すは、尙ほ更に可なり。行つてこれを忘るゝは

最も可なり。

◆美は直覺なり、生氣ある表情は、電の如くに、人の心を射る。

◆純潔にして曇りなき精神は、直に眼にあらはる。上品なり。氣高し。神々し。

◆他の缺點を責むる者程、自ら多くの缺點を有す。

◆迫害を忍びて發達したるものは、最も強き礎を残す。よし其の形骸は破壊されやうとも。

◆清き生涯に勝る、大事業なし。正しき失敗は、最も大なる成功なり。

◆——寒冷の樂しさ——私は寒冷を愛する。寒冷には無上の甘味がある。冬の朝、素裸で寒風に——肌を曝した時の心地よさよ。更に、囁く溪流へ身をひたして、木枯しのすさぶのを聞く愉快さよ。

◆私は、靜かな春の晩など、年老の話を聞くのが大好きだ。殊に信仰心の厚い、塵世の欲望を脱却した、お婆さんの話を聞いて居ると、其の中に、云ひ難い尊い、美しい閃きを感じる。君不見人生擾々一場夢。功名花上之露。富貴草頭之霜。

◆私は又、墓地が大好きだ。亂醉狂舞の宴にあつては、淺ましい寂寞を感じるが、櫻散る夕暮など、獨りて墓場を、そゞろ歩きして居ると、罪なき石碑が、不朽の物語を、囁いて居るやうに、思はれて、しんみりした嬉しさを感ぜずには居られない。『人生を冷やかなる慈の、凝結する所とすれば、死はこれあらゆる慈の、解けて流るゝ所』。下宿の老婆歎じて曰く、『闇の街に住みや習へる』。

◆冬の夜、ひとり庭の木蔭に立ち、枯枝を通して、綿を抛うつた様な白雲の間から、金色の星が目ばたきして、居るのを仰ぐと、私はいつもパースの『To Mary in Heaven』の一節を思ひ出す。そして嬉しいやうな、悲しい様な思ひが、胸一杯になる。此の時、淪落の女が、門附けの三味の音でも、聞えようか。人世遭逢の頼み難きを感じて、眞に腸九回するの痛みを覚える。『那の神聖なる時を、何時かは忘れ得べき。戀しき別れの、ひと日を過ぎむが爲めに、アイル河の繞れる邊りに、吾等の會ひ見し、那のゆかしき森影を、何時かは忘れ得べき。限りなき年は



經つとも、過ぎにし喜びの、樂しき記憶は、永く消ゆることなかるべし。別れを告げたる時の御身の面影、あれが吾等の最後なりとは、思ひがけざりき。

◆花散り果て、は、たき々に賣られ。家貧しければ人に捨てらる。心を傷ましむるかな。その散果てた花や、其の捨てられた人のみ、多い此世の中。どうかして……どうかして、嗚呼どうかしてと。半夜熱涙をしぼつて、天に祈れども、終に策なし。策あれども、遽かに行はれざるを如何にせむ。

漸進は神の全政策なり。

◆英雄たらんよりも、善人たれ。多くの善人を遣らんが爲めに、先づ英雄を要す。最後の目的はヒーローよりも、グッドマンを――。

◆眞なるものは、不變にして、而して無窮に新なり。

◆僧は叩く、月下の門。僧は叩くなり。……トン／＼／＼。叩くなり。撫でるにあらず。押すにあらず。「門を叩けよ、さらば開かれむ」

◆上に、つ者、躬行實踐、身を以て國民を卒ぬなば、どんな改革だつて、やれるものなり。反對する奴は叩き殺して泥溝へ蹴込んで仕舞ふ迄なり。

◆自然は、沈黙せる、神の詩歌なり。豪雨の中には、堪へぬ喜が、ダンスの姿を見る。勞働して、土の上に、身を横へる程、愉快なることなし。

◆無理に、食物を強ゆるは、極めて悪しきことなり。強ひられて無理に食するは、頗る愚なることなり。

◆人間は意氣地なき、動物なるかな。自由の意志を、與へられながら、我はかく思ふ、我はかく見たりと、斷言すること能はず。子曰く、古人かくなせり、大審院の判決はかくありきと、亡者の如く自己の世界を、徘徊ひ出づ。憐むべき友よ。野の花を見よ。獨り自ら、笑ひ樂むにあらずや。谿間の流に聞け。獨り自ら歌ひ囁くにあらずや。

◆フレデリック大王、一日、群衆の喧騒せるを怪しみ、近寄りて見れば、壁上に、彼を誹謗せる落書あり。其の位置

高くして、容易に讀み難かりしかば、彼は侍臣に命じ、低所に張らしめたり。而して曰く、「予は予の欲する處を行ひ、彼等は彼等の欲する處を言ふ。俱に満足なり」と。善良にして弱き友よ、衆愚の輿論にコセ／＼すること勿れすつほかして、置け。

◆慣習と、形式と、歴史と、信仰との大部分は、衆愚が一致して、事實と信する西遊記のみ。衆愚は尊ぶべし。愚論は重んずべからず。歴史よりも、人間を學べ。科學よりも自然を學べ。養生よりも、鍛錬せよ。

◆剛強、嚴の如く、明徹、鏡の如し、御世辭に動かされず。表情に、誑されず。輿論に雷同せず。形式に提はれず。信仰に惑はされず、利害に昏まされず。冷々然として歩み、冷々然として眠る。……此れを鐵人となす。我は鐵人を愛す。

◆「太初に道あり。道は即ち神なり。この道は、太初に神と偕に在りき」。道を傳へんがために、こゝに傳道起れり。傳道は宣教となり、宣教は習慣となり、習慣は形式となり、形式は神殿となり。腐蝕して、木屑となり、土灰となり、白蟻の巢窟と化せり。

◆一個人の裡に、歴史あり。哲學あり。政治あり。美術あり。印度あり。猶太あり。

◆各個人を基礎とせざる、凡ては失敗なり。各個人の衷より燃ゆる火は、何ものもこれを、消滅せしむること能はず。聖賢は、ノンモラルなり。然も、心の欲する處を行つて規を越えず。心の欲せざる處を行ふも、亦範を超えず。潤達奔放にして、自ら道に合す。彼は無道徳なり。無道徳は超道徳にして、非道徳にはあらず。

◆綠葉、鬱々たる椎の梢に、名も知らぬ一羽の大鳥が、舞ひ下りたり。バサ、バサと、飛び廻つて、小蟲を捕へ喰ふ小蟲共は、恍惚として、其の身を貪食に、委せしならむ。自然の力は微妙なり。亞弗利加の慈母リヴィングストンをして、代つて語る處あらしめよ「暴れ狂いたる獅子は、跳りかゝりて子を倒し、碎くるばかり子が肩を噛みたり危機一髪、猫に捕へられたる利那に鼠の感すべしと、想はるゝ失神は、來りぬ。予は夢中にて苦痛の感覺も、恐怖の念慮もなかりき」と。死は尙ほ、怪雲の如き乎。中に入れば、消滅して仕舞ふものなり。殊に殺さるゝことには



甘露の如き美味あるべし。——眼を放てば、樹間を通じて、白波躍る、太平洋に、平和と喜の輝きあり。鳥は猛烈に、小蟲を漁りつゝあり。バサ、バサ——バサ。

◆自らを鞭打つの鞭を持たざる者は、新に生ること能はず。——  
◆智者たることは、極めて易く、愚者たることは最も難し。

◆原因のうちに結果あり。結果のうちに、原因あり。原因と結果とは一なり。權利の半面は、義務なるが如く、刑罰の半面は犯罪なるが如し。此の表裏無差別を觀る者は、萬世に活くるの哲人なり。原因は結果を含みます。結果は原因を含みます。原因そのものと、結果そのものとは異れり。硫化水素は、硫化鐵にも、稀硫酸にもあらざるが如し。此の變化の差別を觀る人、これを現代の才子、遣り手、敏腕家と稱す。

◆同じ物質でも、火星、水星、木星、其の他、どの星の世界へ、持つて行つても、重量は、各、悉く異なる。故に重量は、大宇宙の眼から見れば、假定的のものに過ぎず。敢て重量のみと云はず。凡ての事、悉く然り。粟粒の様な、地球の上で、勳章を懸け、肩を怒らし、口角、泡を飛ばして、道徳、政治を論ずる、殊勝氣さよ。だが御氣の毒に御前達の名論卓説は、あのキラキラ、美しく瞬いて居る、金星ぢやあ、もう通じはせんよ。

◆眼大にして見張り、目瞬を少くす。額明かに眉開らけ、鼻筋を緊め、唇を結び、鋭敏にして柔和、體ゆつたりとして、而も崩れず。腹と腰とが据つて、而も無邪氣、求めず、怒らず、——之を超越の相、美に活くるの姿勢となす。——鳩の如く柔和に、……蛇の如く敏く——。

◆人は運命に左右せらる。されど運命は人を高下するものにあらず。

◆豫言者は無窮に活く。されど豫言は廢滅す。教祖の魂は萬代に亘りて昭々たり。されど説かれたる經典は教義形式の屍となつて、バリサイ、サドカイー生神様、コン／＼様、贖罪券、奸商、油蟲の巢窟と化せり。

◆豫言者は、『口重く舌重し』語るものは豫言者にあらず。豫言者は、知られざる和民の、璞玉を抱いて辱を受けんがために、其の民の中に行く。彼を待つものは、孤獨なり。鐵錐なり。牢獄なり。而してヘロデヤの盆なり。

◆個性は、神が人間に、與えられた恩恵の、最大なるものである。神は、各人の個性を、直接に、握手せらる。神は宗派と結ばず。神殿と連らず。直接個性を掴み給ふ。宗教的生命を得んと欲せば、個性の臺上に立ちて、一氣打ちの活劇を、演ぜざるべからず。……たとへ、衆と共に、修養練磨しても、向上の道は、獨り旅であらねばならぬ。

◆教會は、基督を磔殺するのゴルゴタ、寺院は、釋迦を首斬るの斷頭臺。

◆自ら救ひしは、他を救ひしなり。自らを教えしは、他を教えしなり。  
◆中世紀の頃、アルノー、異端者として、訴へられ、判官彼れに火刑を宣告す。然るに其の聲願ふ。アルノー、啞然として、失笑して曰く、『汝、火刑を宣告し、我れ火刑を受く。而して汝、我よりも、恐るゝか』と。渾身——これ贈。最も高潮せられたる、男性美の輝きにあらずや。

◆勝ちたる時は負けたるなり。眞の勝利は敗北したる時——。

◆誤解せられて、辯解するは愚なり。辯解に就て、再び誤解すべければなり。誤解を放置するは、最良の辯解なり。

◆イエスは、基督教なき基督教を、自己の衷に築かれたり。釋尊は、佛教なき佛教を、自己の衷に築かれたり。釋尊曰く、『法の本法は、無法なり。無法の法も、亦法なり』と。

◆森蔭の石地藏尊、苔むして、詣づる者なきに至りたる時、始めて、慈悲の光を放つ。山奥の廢寺、朽ち壞れて、住む人なきに至りたる時、始めて、佛の道を説く。

◆人は宇宙の表現なり。聖賢は人の代表なり。

◆天外の猛鷲、巖巖を擡んで飛ぶ。これが日蓮の姿なり。『念佛無間、禪天魔、眞言亡國律國賊』。

◆權力は、利害得失に關らず。美は、利害得失に關らず。善は、利害得失に關らず。自然は、利害得失に關らず。

◆アルはアレ、ソレはソレにてなけ。山自ら高く、水自ら流る。法門無量。乾坤無邊。

◆心身既に抛擲せば、患苦、憂悶、何れにか住せん。千代能がいたゞく桶の底ぬけて、水たまられば月も宿らず。

◆我が世界は、百年、我れ自らは無窮。



- ◇ 平和は、自由の中にあり、自由は、道の中にあり。
- ◇ 治めざるを以て治むるは、自治の眞髓なり。
- ◇ 方法を備へざるも、一の方法なり。
- ◇ 科學を離れて、宗教なし。宗教とは、徹底したる科學なり。
- ◇ 貪慾以上に、食することの害は、貪慾缺乏の害よりも、甚し。
- ◇ 濁なき智は、善なり。濁なき愚は、更に善なり。
- ◇ 身を殺したる仁者は、最も己を愛したる者なり。
- ◇ 各人の自由は、各人の自制によりて全し。
- ◇ 神の前には、善惡の外に、淨穢なし。
- ◇ 自ら満足せざる者を、満足せしむる道なし。
- ◇ 押し付けられても、叩きつぶされても、蹴飛ばされても、——道理は……矢張り道理なり。
- ◇ 進んで果す義務は、最上の樂なり。強られて爲す義務は、最上の苦痛なり。
- ◇ 得意冷然、失意冷然、人間萬事、榮根を斷つと擲ばす。
- ◇ 彼は成功して、彼自身は滅びたり。
- ◇ 自然より生れて、自己の衷に活き、歴史と慣習と、而してあらゆる、外界のものに、支配されざる者は、最も偉大なる主權者なり。
- ◇ 人間には、戰を好むの、性情がある。——各人皆な、自ら衷に戰ふに到らざれば、——口論、喧嘩、鬭争、戰亂は遂に止む時あらじ。
- ◇ 他力と自力との競合、これ即ち運命なり。
- ◇ 眞人は物の中心を見る。凡俗は、その表面を見る。眞人は過去、現在、未來に活く。凡俗は只現在にのみ蠢動す。

- ◇ 狼狽して、助かるよりも、落ち附いて、殺された方が、ましなり。落ち附くとは、のろま、ぐず、とんま、ぼんやりの意味にあらず。充實したる靜をいふ。
- ◇ 聖賢、忠臣の現在は、歴史に讀むが如く、美しからず。却つて醜なり。奸佞邪智、唾棄すべき小人の現在は、歴史に讀むが如く、醜からず。却つて美なり。
- ◇ 『天上天下、唯我獨尊』。これ即ち、個人主義の眞髓なり。神に連るの我は、土地の所有權の如く、天上に至り、地下に及ぶ。然れども各人皆な、唯我獨尊なり。而してこれ、平等主義の精華なり。……私の『唯我』尊くば、彼の『唯我』も尊きなり。平等とは、人を卑んで、自らを卑しくする、低き平面にはあらずして、自ら尊んで、人を尊ぶ高き平面ならざるべからず。
- ◇ 法門無量、而して何れも罕し。亡滅の門も亦、無限、而して何れも廣し。
- ◇ 大道は東西南北にあり。高きにあり。低きにあり。尊きにあり。卑きにあり。寺院にあり。馬小屋にあり。説教にあり。沈黙にあり。雨雪風雷、自然に發す。
- ◇ 正義は、常に少數なり。輿論は、常に多數なり。
- ◇ 親の情は、子知らず。子の心は、親知らず。
- ◇ 佛より出づるものは、凡て佛なり。
- ◇ 清貧は、濁富に勝ること萬々。清貧は、濁富に勝ること萬々。
- ◇ 興亡盛衰を、超越して、大觀すれば、天下勢窮ることなし。
- ◇ 捨つる所、愈々多ければ、興へらるゝこと、益々多し。一切を抛下すれば、萬有を得べし。
- ◇ 大道は、萬古不易。形態は、刻々變移。
- ◇ 天職は、上、王侯より、下、日傭職工に至るまで、之を有す。天職は、凡て偉大にして、尊貴なり。
- ◇ 一切を捨て、『清貧』に住する者は、最上の富と、力とを有す。



- ◇ 大宗教家の魂は、碎かれて、微小なり。これ其の大なる所以なり。
- ◇ 記憶するよりも、忘却することは、困難なり。
- ◇ 正直にして、同時に、小心ならざることは、難し。
- ◇ 鋭敏にして、無神経なるは、大事をなすの第一要素なり。
- ◇ 徹底せる無信仰は、徹底せる信仰の如く、尊し。
- ◇ 適當の勞働は、最良の休養なり。
- ◇ 腰のまわりが、ギュー／＼と云ふ程、確り、而も軟かく緊まつて居れば、全身悉く眼、全身悉く自動機（ミエル）の如く、期せずして、萬變に應酬す。
- ◇ 醒いけれども、私は私、自分の世界で活き、自分の世界で、進んで行く。寂しいと云つても私の世界——。狭いと云つても、私の世界——。We dream alone, We suffer alone, We die alone 獨り夢み、獨り難み、獨り死す。（アミエル）
- ◇ 吾々はベストを盡しながら、運命の美しい影に、微笑んで居らねばならぬ。危険の來る間際まで、無邪氣に進んで行かねばならぬ。よし、死の手が、襲ふても、樂んで、泡雪のやうに消え去らねばならぬ。高の知れた五十年や百年の命、長からうが短からうが、何の變りか、あるものか。
- ◇ 聖人は只耳目、只見るのみ、只聞くのみ。言はず。語らず。身を以て法を説く。
- ◇ 自分を傷けないで、他を倒さうなんて、そんな蟲の好い考へで、戦ひが出来るものか。
- ◇ 人類をして、精神的に、物質的に、眞の自由を得せしめよ。眞なるものは常に正し。自由と放逸とは同じからず。自由は正義なり。道理なり。仁慈なり。
- ◇ 背中を圓くするやうな動作ちや、藝術の門を相去る、頗る遠しだ。
- ◇ 『天知る。地知る。我知る』。天地知らずとも、何ぞ意とせむ。——我れよく我れを知るあらば——。

- ◇ 急激なる事變の突發も、因果關係の蓄積に外ならず。形に於ては、突發あるも實質に於ては、不可思議なる驟破なし
- ◇ 聖賢は、死後に於て、大事業を成す。基督、生時何をかなせる。道を傳ふる僅かに三年のみ。
- ◇ 自分が是なりと、確信する所に向つては、ごしく、猛進すべし。蚯蚓のやうな人間の、囁言なんて、木ッ葉同様だ。——諸君たゞ、天を仰いで、突進せよ。
- ◇ 戦の中に、進歩あり。向上あり。然れども、盲動は、無意味なり。徒勞なり。吾人は須く、明徹なる中心の生命力を以て健闘せざるべからず。
- ◇ 人と和して、自ら戦へ、人を愛して、自らを殺すべし。
- ◇ 法念の釋尊、親鸞の釋尊、日蓮の釋尊、各人の釋尊は、無数なれども、釋尊の釋尊は、唯一人なり。
- ◇ 無用の物を、廉價に買ふは、有用の物を高價に買ふよりも、更に高價なり。
- ◇ 何の成敗なんか、關ふものか。打つ突かつて、木ッ葉微塵に、碎けるまでだ。天に對する信念を以て、猛進したら槍が降らうが、火が落ちやうと——ピクともするな。此の覺悟は、萬事を解決する。……他力の宗教も、此所から入らない人は、進んだ所が、高が知れてる。
- ◇ 『恩を仇で、返しやがつて、今に見ろ、罰が當るから』と。他を怨む人あり。あなたも罰が當る御方なり。
- ◇ 身に溢れる恩寵は、當り前だと思つて、忘却し、偶、與えられた苦に就ては、盡くるなきの、不平を洩らす。横着な動物ですれ私共は——。人間なる動物、更に進歩すれば、自ら行はざる道を、人に強ゆる修養家となる。
- ◇ 打撃を受くる毎に向上す。
- ◇ 一面から見たら、人間なんて、蛆蟲同様のものだ。そんな者の毀譽褒貶に、ケチ／＼する程、馬鹿げた事があるものか——世の中を、何のヘチマと思へども……。
- ◇ 事皆な失敗すると覺悟して懸るべし。
- ◇ 過去に執着すること勿れ。目的に執着すること勿れ。



- ◇自分が責いた忘想の影で自分の心を苦めるのは、愚の極なり。かゝる人を救済する綱は、地上になし。
- ◇自らを殺し、自らを犠牲とすれば、解決し得ざるものなし。
- ◇萬事抛擲、大死一番、其處に花あり。光あり。天國あり。
- ◇野に出て見よ。雜草、軟風に戦くところ、其處に基督の姿あり。山に登りて見よ、老杉古松、鬱々たる所、其處に釋尊の面影あり。
- ◇只賢なるは、完全の賢にあらず。愚の一面を欠けばなり。
- ◇動かぬものが一つある。初めにして終なり。それを土臺とし、それに向つて、變化し、向上する。これを『不變の發達』と云ふ。矛盾の妙は其處にあり。撞着の調和も其處にあり。
- ◇吐く息は力なり。生命の發現なり。切腹の秘訣は、ハツと息を吐きながら刀を突き差すのだ。
- ◇我等は苦しまんが爲めに、強きを要する。苦しんで、打つ突つかつて、岩と鐵とが、ガチ／＼と、こすり合つた處から、バツと光りが迸つて来るのだ。
- ◇數學の出来る人間には、破天荒の大人物は、少きが如し、二二が四、二三が六と、平々凡々に墮すればなり。
- ◇予は予が良智に訴へて、可しと確信する處を、行ふ事を知るのみ。他に如何なる優れたる方法あるも、そは予が關知する所にあらず。
- ◇『心だに、誠の道にかなひなば、祈らずとも、神や護らむ』祈りとは、神と人との合致なり。交通なり。談話なり。自己の幸福を祈るは、醜惡なる、我慾の聲なり。否、心、誠の道にかなふは、即ち眞の祈なり。
- ◇『來て見れば聞くより低し、富士の山、釋迦も孔子もかくやあらなむ』と、誰やらの歌。『登り行けば、見しより高し富士の山、釋迦も、孔子もかくやあらなむ』と、誰やらの歌。
- ◇『生きて侯に封ぜられずんば、死して、閻魔王たらん』とは、餘りに厭はしからずや。人を凌ぎ、人の上に立たんとする者程、小なる人なり。夫れ人の子の來るは、人に使はれ、罪ある者の贖にならむが爲なり。

- ◇米國の社會黨、首領等、楫を飛ばして曰く、『戦争は、カイセル主義の絶滅を見るまで、繼續せざるべからず』と。かくの如くにして軍備擴張熱を煽り、新カイセル主義を、布かんとす。好都合に徹底したる、米國の社會主義者輩、何を寢戸惚け居るか。
- ◇汝が口にし易き、修養を力説するの前、汝が高遠なる宗教を、高唱するの前、汝が豪さうに社會改良を鼓吹するの前、汝が鹿爪らしく、倫理道德を、喋々するの前、敬神の人よ。嚴正なる君子よ。横着なる修養家よ。——先づ汝の、下駄を揃へよ——
- ◇生滅、損益、消長、利害、凡て一。
- ◇宗教は、宗派と、經典と、寺院と、教會と、神社と、禮拜と、祈禱と、讚美歌と、慈善とを造りたり——。されど其等のものは、凡て宗教を殺したり。
- ◇人は哲學よりも、大なり。禮拜よりも、大なり。ニコライの教會の教會堂よりも、大なり。東西本願寺よりも、大なり。否、人は宗教よりも、大なり。『宮殿よりも大なる者、此所にあり』。これ豈に獨り、クリストイエスに於てのみ、發し得べき語ならむや。人なるが故に、何物よりも大にして、且つ何物よりも、尊貴なる事を自覺せざる人間は、何物よりも小にして、賤しむべき者なり。
- ◇これを希臘の諺に聞く、服従する者は、美貌なりと。我は信ず。順ふ者は、其の心も亦美なりと。……基督、弟子の足を洗はる。
- ◇窓を明け放して、入浴しながら、吹雪の荒れ狂ふのを、眺めるのは、私共の得易き贅澤の一なり。首丈け湯から出して、ほざいて曰く、『寒風よ。いくらでも吹いて見ろ』と。
- ◇最も美しく、最も大なる人とは、最も深く、此の世界を愛した人——最も強く、此の人類を愛した人——。ナポレオンや伊藤公や天下の系平の輩は關らず。
- ◇紀念のために、ナヨボリンと、庭の真中に樹を植へたり紀念のために、『一金壹千圓也、某』と、寄附したりする。



……私共は、善事の凡てを、消滅させて、逝きたい。消滅に優る、美しい紀念は無し。天を摩するの記念碑も、神の前には、瓦礫のみ。

◆我が樂は此所にあり。——我が肉——我が心——而して我が世界……到る所、麗かに微笑める此の大自然——山、水、森、草、岩、鳥、蟲……。

◆ピスマーク曰く、「骨を戰場に曝らすも、路上兇漢の手に墮るゝも、予に於ては同じきなり」と。——死は下駄を履いて、一寸裏庭に出づるが如し。

◆あゝ感謝に、堪へざるかな。掬めども盡きざる泉——沸、々、々、中心に噴湧す。

◆私共は今、曾て味はない、強烈、深酷な、世界的大潜勢力の、前に佇んで居る。精神的覺醒の嶄巖に、物質的窮乏の濁浪は、磅礴として、荒れ狂ふて居る。……アムールの豁谷、よし堅氷の解くるとも、荊蕀深くして峭峻なり。

東海の波浪、よし輝かなりとも——熱帯冷雲交々來去……。

◆決断とは——、事の輕重、本末、緩急を比較して、適切の道を、撰ぶことなり。盲斷と等しからず。

◆醫者は、病者のための、醫者なり、病氣には、貴賤なし。

◆柔を説けば、道は柔、剛を説けば、道は剛、上を説けば、道は上、下を説けば、道は下なりと思ふ。柔剛上下併せ説けば、道の本體は曖昧、矛盾、茫漠、據る處なしと惑ふ。いづくぞ然らむ。道は光明赫々たり。而して變化自在なり。——道は通ず、天地有形の外……。

◆艱難と戦ふこと、それ自身、尊きことなり。成敗は、何の意義もなし。

◆危険に處して、心配すべきは、傷か、傷つかないか、二つである。傷つかないなら、心配するには及ばない。傷ついたならば、死ぬか、死なないか、心配である。死なないならば、心配するには及ばない、死んだならば、心配することは出来ない。何れにしても、心配無用、ドシ、危険に突入すべし。

◆屈辱的平和に、安んずるよりも、力盡くるまで、健闘して須らく慘虐の刃を、甘受すべし。其處に、人類精神的向

上の道徑あり。暴虐に對して、反拒するの、意氣と實力とを有して、寛恕全赦するは、最も尊し。

◆萬物の動靜は——凝集力と擴散力との競合なり。

◆達摩大師武帝に見ゆ。帝自ら弟子の禮を執りて迎え、問ふて曰く、「朕、寺を建て、僧を養ふ。何の、功德かある」と大師、嚴然として答へて曰く、「無功德」と武帝は失望したり。達摩は、飄然として去れり。——天地萬有は黙々として、功德を云はず。如何ぞ、人間のみ、これを求むる事の切なる?!

◆勤勉労働は、其れ自身、大なる幸福なり。悅樂なり。

◆求むる處なければ、ロツクフェラーでも、モルガンでも、ヘチマ同然。

◆只働くべし。働の爲めに働け。

◆如何なる豫言者かよく、大清帝國が忽知として、覆滅せむことを、透視し得たる?。如何なる政治家がよく、セルガイヤー一青年のピストルによつて、渾圓球上を、戦亂の大修羅場と化せしめむと、推測し得たる而して、如何なる哲學者がよく、三百年間、歐洲の一角に讒々たりし、ロマノフ皇朝が、俄然崩壊せむことを、豫想し得たるものぞ。歐洲の崑山血河の中にも、進化の快潮流は、矢の如く走つた。見よ。汽艇も。ツエツペリンも、四十二番の巨砲も、毒瓦斯も、將たまた、生民饑と暴虐とに、泣くの慘劇も、悉くこれ、「眞自由主義」に、覺醒せしめんとする天來の一大鐵槌に、外ならなかつたのだ。其の強猛な打撃に依つて、粉碎せらるべきは、獨逸皇帝、彼れ自身の、ミリタリズムであらばならぬ。ロマノフ皇朝覆没の大悲劇を、恐怖する前に當つて、千八百七十五年より今日に至る、僅々五十年間あらゆる階級より成る、老幼男女四十三萬の國事犯人が、日影薄く、凍風すさぶ、西比利亞五千哩の大荒原を、續々と、東に押送せられる慘況を、須らく眼を閉ぢて、汝の胸に畫け。——我れ今、伊豆の海岸、橋立の巖頭に立てり。激瀉は、寂寞、雄大、神祕、そのもの、響をなして。ザン、と、岸を打つて、奔躍せり。あゝ此の一波にも、世界思潮變遷の姿を宿せり。(大正七年一月)

◆歸納すれば一の力となり、演繹すれば、宇宙の萬象となる。



◇「天生德於予。桓魋其如予何」。この驚くべき確信と眞勇、何處より來れるか。曰く「仁」。  
◇イエスは、己を殺さんが爲めに、近寄り來れる多くの捕手に面し、たづねて曰く、「汝等、誰を求むるや」と。彼等答えて曰く「ナザレのイエスなり」と。イエス從容として曰く、「我はそれなり」と。彼等其の威に撲たれ、退いて地に倒れたりき。悠々として追らず。堂々として動かす。あゝ欽慕するに堪へたるかな。現代、擾々たる、女性的クリスチヤン、徒らに十字架を仰いで、一身の救ひを求むることを止めよ。怡然として、深く鋭るゝの大と勇とを學ぶべし。

◇今日一日が、おれの人生だ、一日の苦勞は、一日にて足れり。明日は、明日のことを、思ひわづらへ。空の鳥を見よ。野の百合を見よ。

◇大正五年八月、富士山麓、白糸の淵で、天幕講習をやつた節、辱なくも、華頂宮博忠王殿下、伏見宮博信王殿下には御見學のため、十四日の烈風（陸軍から借りた、二十四箇の天幕の中八箇はつぶされ、十箇ばかりは裂かれた。）吹き荒れる中を、態々、御臨幸になられた。そして特に、私の強健術を御台覽になるやう。御命があつた。私は感激の熱涙を振つて立ち、忽ち衣服を脱ぎ捨て、裸體となり、兩殿下の御前に進んで一禮し、直ちに演習にかゝつた。純潔無垢、胸底一點の塵もなく、精氣渾身に充ち溢れて、眼睛澄み渡つた。そして中心から統一した力は、自分ながら、キビキビした様な、鮮かさを感じた。最も猛烈に、氣合を込めて、板の間も砕けんばかり、全身からは霧を吐くやうな勢で、動作した時には、折柄の烈風をも、壓倒したかの、概があつた。満場肅然、デット視詰めたま、眼球を動かす者すら、無かつた。静岡縣教育雜論には、下の如くに誌されてあつた。「川合講師は恭しく御前に伺候して、強健術を御覽に入れしに、瞬もせて見詰めさせ給ふ。健氣なる有様を拜せし吾々は、唯々神々しさと凛々しさとに、心いる外なかりき。」云々と。數分間にして、全練修を了り、恭しく拜して、退座すると、田澤内務書記官は、非常に喜んで、「空前の出來だ」と云つて呉れた。牧師宇津木勢八氏は、私の著書の人々と、輪讀までなると聞いたが、此の時、ツカツカと、私の傍へ寄られ、「川合さんが、殿下の御前で、御やりになつてゐるのを見たら、ご

うしたことか無性に涙が浮んで來て、とめられなかつた」と、云はれた。先生は、何を御感じになつたらうか。——知らぬ。只私は、勇壯な、名須の與市の琵琶を聞いて、人々は拳を握り、眉を上げて、痛快を叫んで居つた座上、ひとり落涙滂沱たりし、天徳寺を想ふた。

◇成功そのものよりか、成功に達するまでの、努力が尊い。

◇物質の力は、物質で倒れる。

◇堂奥に達した者には、共通した流れがある——生氣——。

◇私はニイチエの説が痛快である。殊に軀の弱かつた彼にして、あんな猛烈な、強者の道徳を叫んだのが愉快だ。ゾラや、ズーアルマンや、トルストイや、イブセンや、ハウプトマンや、ゴルキーや、扱ては彼のクロボトキンなどの筆には、悽慘深刻な人生の真相を、有りのまゝ、グン／＼と、爬羅剔抉して、新戦場の深夜、風なまぐさき趣きがあるのが、私には引き入れられる程好きなんだ。微温く、幽痒く、理想化した虚偽の製作に、何の力があるか。何の生命があるか。

◇或る武人が、ごうしても、劍道が上達しないので、殆ど師範からも、見放されて仕舞つた。そこで發憤して冬の朝まだ真暗な時、村の神社へ行つて、井戸の水を、數十桶被ぶり、技術の上達を神明に祈つた。かくする事三箇年間に終に奥義を極めたこと云ふことが、中學の漢文讀本にあつた。私はこれを讀んだ時、兩眼が、サツト濕つた。其の眞劍本氣の熱誠に撲たれて、感奮せず。私も亦、嚴冬、氷のやうな石の上に坐つて、全身を洗ひ清め、更に溪川に飛び込んで、双の如き刺戟を樂むやうに、なつた。暗夜神前に、氷を碎いて祈るの、赤誠あれば、出來ないことは無い。

◇心身弱ければ、萬物皆な、我を脅かすの敵となり、心身強くなれば、萬物悉くが我が糧となる。「それ持てる者には益々興へられ、持たぬ者は、その持てる者をも奪ひ去らる」。

◇何事にも徹底的なれ。深酷なれ。——。即ち有るなら有る。無いなら無い。やるならやる。やらぬならやらぬと「只



然り然り。否否と云へ。『ノラが、家を捨て、出て行く時に、『何よりも先づ、私は人間に』と、子供のこともなんか一言も云はず。夫ヘルマーが、『明朝まで待つて呉れ』と、懇願するのを、振り向きもせず、サツサと外套を着ながら、ノラ『他人の家に泊ることは出来ません。あなたの指輪を、お返しします。私のを下さい』ヘルマー『それまでも？』と、泣聲になるのを、『それでもです』と、受け取るや、『さよなら』と出て往つて仕舞ふ。其の態度は胸がすく程、キビくして居るではないか。日本の外交家某々氏等よ。暇があつたら……イブセンでも讀み給へ。

◇肉體はドツカリとして泰山の如く、精神は虚々然として秋空の如く……

◇獄裡に呻吟する所謂悪漢と、厚顔にも風教改善を説く、我等所謂善人と何の異なる所がある？……無し——無し——彼等一道の光に撲たるれば、ダマスコ郊外のパウロとなり、我等一步を轉すれば主を渡したるユダとなる。否。否。彼等の赤裸々に對して、我等高德なる偽善者ごもは、慚する處なかるべからず。

◇獨自一箇の世界を持つ——如何なる情實にも、如何なる利害にも、掣肘せらるゝ事を好まず。衷心の世界を傷つけられて、大臣たり、富豪たり、大將軍たり、大事業家たらしむるよりも、眞自由に生きて、土ン百姓たり、車挽きたり、渠士凌たり、石擲たらんことを——我は撰ぶ。

◇同一の目的のために、同一の働きをなすつゝ、ある者が、一方の榮ゆるのに對して、寸毫も嫉妬の情を起さぬ者ありとすれば、これ實に驚くべき——然り、何事よりも驚くべき事なり。茲に於てか、『我が後に來るものは、我よりも大なる者なり。我れは、其人の靴の紐を解くにも足らず』と、公言したるパプアスマのヨハネの、驚くべき大精神を念ふ……

◇人を咎むること勿れ——只この一語……自分の道を、確り踏め——

◇『夏の夕に只ひとり、夜を我が身の友として、濱邊傳ひに嘯けば、なきさに寄する沙さきの、さゝらさゝらと静やかに、いさごを洗ふ音ゆかし』何と云ふ幽黯な情趣だらう。しみじみなつかしい感じが湧いて來て自ら涙ぐまれる。

◇理窟は厭だ、たゞいやだ。風は颯々たり。水は滔々たり。凡てのものをして、自然のまゝに迫ましめよ、哲學と數

學と、政治學と修養學とを、取つて爐に投げ込み、一握の灰燼と化せしめよ。

◇誤謬も亦、誤謬と云ふ眞理なり。

◇如何なる場合と雖も、殺生成を犯さぬること、必ずしも眞の道にあらず。——百人を救ふがために、五人を殺すも亦道なり。殺す、活すは、必ずしも、形の上の事ではない。

◇カイゼル曰く『神の外。恐るゝもの無し』と。バイロンは其のカイン篇に於て云ふ。カイン『我れ神に、求むる處あらざればなり』アダム『感謝する處もあらざるか』カイン『無し——』と。痛快なり。男子この意氣なかるべからず。徒らに『他力』を叫ぶ、腰抜け共に、『他力』の眞意義は決して分らぬ。

◇誹られるのが、恐い人には、褒められたい慾望あり、——拍手喝采なんか、風に飛ぶ、糞殺見たやうなものだ。——大正五年十月十七日、紀州勝浦から、和歌の浦に歸る海上、獨り舷頭に立つて、綺麗な空気を、一杯吸ひながら、腹胸式の練修をした。風は嘯々たり。波は溶々たり。船は、雪を碎き、花を散らして進んで行く。私は Error の The Corrair を想ひ出して、勇躍の情を禁ずることが、出来なかつた。『渺々たる碧海の上、我思想は無涯にして、我精神は自由なり。軟風遠く吹きて、見渡す限り、波浪沫立てり。……に我等の帝國を眺め、我等の家を望む。』

◇恐れたり、憂へたりするのは、男子の恥だ。荒れ狂ふ大自然の前に、……首を上げ、……肩を聳かし、スツクと立て！

◇自然は凡て偽らず。其の儘なり。——草も——木も——石も——星も——只人間のみ、紛飾疑問自在なり。靈妙なるかな！

◇私共をして萬人共通の根本——中心——を養はしめよ。其の他は、各人、自然をして、自然に従はしめよ。

◇驚るゝの覺悟あれば、天下無敵だ。死にし者をして、死にし者を葬らしめよ。汝は堂々として邁歩して行け。

◇楚人冠の、大英遊記に——『私に御禮を、云ふには及びませぬ。そのかはり英國人が貴國に参りまして、道不案内のため、困つて居るのに、逢ひましたら、どうぞ私だと思つて教へて上げて下さい』何と云ふ美しい心でせう！



極東の一青年は、これを讀んで、ホロリとした。

◆ エシヤスパンチの戦ひに於て、ヅエロ傷き、將に戦死せんとす。ナポレオン彼れの耳元に、口を寄せて曰く「ソエーロよ其處に、他の世界あり。我等は再び、彼所に於て、會すべきなり」と。其處に他の世界がある。其處に死の世界がある。何でも無い直ぐ其處だ。靈魂の滅不滅の如きは、關する所にあらず。消えずして存在するも可なり消えて滅失するも亦、頗る可なり。我れは只、我が道を踏んで斃れんのみ。

◆ 眞の他力には、先づ大自力を要する。すつかり任せるのには、先づ自分を碎き、自分を捨なければならぬ。これは大修業だ。古の兼言者、名僧或は、高德の士を見よ。彼等は皆、鮮血滴るが如き大苦闘の程より、始めて他力の大明を見出したのである。似非宗教家共が渴仰するバラダイス、極樂の如き、我等無神經漢にとりては、泥土に等し

◆ 天地萬有の原動力とは？。擴散力と、凝集力との、争ひに外ならず。

◆ 誤りたり自由は、一の束縛なり。

◆ 成否を眼中に、置くこと勿れ。只努めよ。『努むれば——自ら——道あり』。……千峰行き盡きて大湖開く。

◆ 國民の膏血を私した、某大臣の椅子よりか、正直な土ン百姓の鉄の方が餘程尊い。

◆ 仁者に敵なしと云ふが嘘だ。孔子を見よ。釋迦を見よ。ソクラテスマ見よ。基督を見よ。須らく、天下を敵とすべし。通んで滿天下を敵とすべし。

◆ 矢張り、一番なつかしい——富士北麓の雪の夕暮、急用を辨じて三里の山道を歸り、入浴して炬燵を擁し、父と友と、牛肉をつまみながら、マールコポロの遠征談に、花を咲かせた、十數年前の、あの晩がなつかしい——いくら掃いても、散る木の葉。いくら拭いても、又出る涙！

◆ 中心の満足を得れば、宇宙の王たり。我が家には山あり。原あり。空あり。海あり。百萬長者の庭園も、玩具同然そんな小げな物に、隨喜の涎を垂らしてゐる——愚さよ。憐さよ。……。

◆ 人情と涙とは、古今なく、同境なし。

◆ 自然の法則は、太古より永恒に至る迄、不變の鐵鎖もて一貫せり。宇宙萬物は、法則の實現に過ぎず。

◆ 何時でも、自分は確り保たなければならぬ。確り保つには、自分、空でなければならぬ。

◆ 用意したからいけない。用意する心が、既に感して、居つたからいけないのだ。最上の用意は、無用意なり。

◆ 無一物は、最上の武器なり。至人無己、神人無効、聖人無名。

◆ 人間には、習慣を破らんとする、習慣がある。武装せる者は、其の武装の爲めに斃れ、平和を樂む者は、其の平和の爲めに斃る。

◆ 愚なる成功は花である。しばみ易し、正しき失敗は、星なり。永久に輝く。

◆ 數百の群衆に、教は説くも、ゲッセマネの園には獨り跪かざるべからず。十二の使徒を有するも、十字架は、獨り負はざるべからず。

◆ 春の夜は、しん／＼として更渡りぬ。幾歳をや經たりけむ、鎮守の森の奥、嵐眠り水眠り、楢にはそよとの音も聞えず。只語る、緘黙の語を以て、夜の靈と森の精と、樹梢を洩れて、それよ一つ、三つ四つ、星は燦として輝けり——。扱ても……静けきよ。

◆ 昔を拂ふて、我は老松の幹に身を寄せぬ。ア、夜よ、森よ、惡闘と、努力とに、疲れ果てにし我心は、いま隠れ家を求む。夜の寂寥と森の懐に、人思遠かなる此の幽寂の境、權勢なく、野心なく、競争なし。只あり、世界の問々と、碎けたる魂と。『前に古人を見ず、後に來者を見ず。天地の悠々たるを想ふて、獨り愴然として涙下る』。然苦は涕涙によつて慰められ、涕涙は暗黒によりて、癒やさる。此處ぞ、我が安息場は。此の薄明——此の無聲——此の陰鬱——。

◆ 我は夜を愛す。我は森を愛す。神祕なればなり。杳冥として閑寂なればなり。嵐と吹き過ぎぬ。一陣の風、星の掣が。頬を撲ちたる露は冷たし。

◆ 我れは行くよ！。我れ獨り行くよ——よべも——こよいも！。



迷ひ入る、我れ只ひとり森の奥。茂梢天を包んで、葉越に香る。星光兩三點、月影婆娑として地に感ふ。三五の茅屋、疎竹の彼方に隠現し、枯草を纏ふて一水の溶々たるほとり。聞き得たり、機杼の微響啞たるを、露を含める青苔を踏むに、履を没して音をなさず。老幹萬樹矢の如き間、檜杉の垂枝をくゞりて、恍然として、我れは行くよ知るか人。此處これ太古岑寂の姿、木樵の跡も微なりけり。下界には只我あり。上には只茂梢あり。何の虚榮なく何の競争なく、世界なく、人類なく、歴史なく、哲學なし。森は只岑寂として、寂然として——只眠に耽りたり。我もなく、夜もなく、タイムなく、スペースなく、有もなく、虚もなく、善もなく、悪もなし。流れざる永恒の涯にて……此處はあるか。——お、モーアスト、フォレスト！

一聲の迷禽に驚き、幻想を破られて刮目すれば、深夜の大自然、何ぞ沈靜なるぞや。一抹の頑嵐に、森樹は微にぞよみの。落葉サと降り注ぎて、秋の香り衣袂に薫す。一鉤の月は雲間を洩れて、朧に森を鎖し、天も地も杳冥として、妙なる思ひに沈むに似たり。

あ、我れは行くよ。たゞ獨り、我は行くよ。咲き残りたる野菊、女郎花を踏み分けて、我れ獨り行くよ——森の奥！

◇「紛囂を厭ふて、山に入れども、山に安んぜず。山に入ればまた、紛囂を思ふ」。世は狼の如く、利慾に狂ひ、豚の如く、煩惱に濁る。月々に生まれ來たる幾萬の人の子、相ひきみて、下界に俗殺せられ行くを見る。たま／＼身を挺して、これが救済に赴くことあるも、弱き者は陥りて、再び歸らず。強き者は、往て冷腸の土木と化す。古の大賢喟然として嘆じて曰く、「道行はれず。解に乗りて海に浮ばむ」と。偉人の衷心、皆この、無限無涯の寂寞あり。

◇秀麗の山水にはごくまれ、あるは、無邪氣なる校庭で理想の光に酔ひ、もしくは、單純なる兵營のアザリ、サアクルに呼吸し、かくして三十年の齢は、胡蝶の夢の様に、過ぎ去つて仕舞つた。而して、初めて、歩を社會の實生活に踏み入れ、その生きんとし、喰はんとする戦ひの激甚なるに驚かされ、その擾々囂々として、狂ひ叫び、泣けるのに「同胞相愛」を畫いた私の世界は、先づ傷つけられた。私は講堂で學んだ外に、尙別箇の「社會學」あり。「世渡

りの道」あることを知つた。面倒臭きかな。もし夫れ、斷々乎として、道を行ひ、直きによりて立たんとする、扱ては——知己、——扱ては同志、扱ては——眞友、何處にか在るや。或は猛然として敢て、學生の能力を奮はんか、智の志に、従はず、才の思に、伴はざるを奈何せん！。噫孤情寂々たり。ザ、エントランス、オア、ツイローツに立ち、私の執るべきものは、只一つ、誠を盡して、天命を俟つのみ。

◇ア、主よ、ア、神よ、我れ今、伊豆の山中にあり。泥土にまみれたる身を、荆棘狼藉の間に休め、瞑目して、主クリストが、カルバリーの丘上に、釘づけられ給ひし、御苦難の惨狀を拜し、賤陋見る影もなき西夫を救ひ給はんとの大愛を念ひぬ。——あ、彼の時……辱なきかな。辱なきかな。世の罪を負へる、神の小羊は、狂亂、眼眩める豺狼の兇牙に、碎かれ給ひ、「彼等を殺し給へ、其のなす處を知らざればなり」と……寂然として、死せるが如き山中、鎌を掘みて、獨り坐したる、卑しき農夫の頬に、感激の熱涙は、滴々として溢るゝのみ。

◇大西郷が「人を相手とせず天を相手とせよ」との一語は、「舜何人ぞや。我れ何人ぞや」の言葉よりも大なり。舜偉なりと雖も向人なればなり。彼れは「これを處する純潔無私なりしのみならず。國家に處する、またかくの如くならむ」とを期したり。曰く「國を以て處るゝの覺悟無くんば、外交の實は擧がるべからず」と。これ誠に驚くべきの言なり

妥協祈合、従らに外形上、一時の寧靜平和を食らむとする徒輩、これを聞いて慚愧する處なきか。

◇峻平たる巖巖に身を寄せて、我れ心寂しく一聲呼はれば、山靈の遠く答へて、淡靄斜の松をばかす。阿那の方——日落つ。さすらひの此身。埋めて棄てんも、今宵となりしか。あはれ夢裡の迷兒よ。碌々無爲にして、半生は夢と過ぎけれ。夢を葬りて、又更に夢に入らむ哉。我は袂をさぐりて、潜かに小さき包を取り出しぬ。之れぞ——猛毒モルヒネ！。我は嘲りて「ひつ／＼捨てし此の身」と。吹き下す風のみ身に沁みて、扱ても凄きよ山の奥！。君の此の書を手にし給ふ時は我は世界の彼方にあり。落魄の身の果て幸か。不幸か、神ならずして、誰か知るべき！——音信を絶つ——。夢平呼是夢。夢裏何尋夢。玲々陌上聲。覺殺夢中夢。

◇時は維昨庚戌陽春四月曉旦五時、幽溪に流れ落つるの、頑嵐を身に浴びつ、我は只獨り、甲州天目山の榎材たる樫



路を、辿りつゝあるなり。

攀援たる硯角を攀援して屢足痿痺し、屢々休息す。峰側盡に殺げて斷崖千尋、瘦松斜に欹ちて老翠參差たり。間々疎竹を交へ、悉く紫鶯を帯ぶ。樹梢の間、遙かに日川の、清瀾縹碧の紆曲、惑滅するを俯瞰る。滿山に聲を聞かず、迷禽時に溪を隔て、縋に岑寂を破るのみ。

我れ微吟しつゝ、行くこと半响、縋の如く迂截せる、崖稜の路を徇僕し、盤曲して山の一角に出ず。時に陰森たる山嵐、サと吹起りて、轉た衣袂に急なり。玄氣蹙顔して、千尋の谷底妖響あり。

ふと、仰ぎ見れば……土屋總藏片手斬遺跡……岩を刻みて墨痕淋漓たり。あゝ、これ嘗て讀史の際、無量の感慨を惹起せしめたる。片手斬の遺跡か。一大巖巖磊磊として、萬古の沈黙を續し、途に當つて欹つ。何人の落款ぞ。和歌一首あり。「此の石を力に土屋もの、ふが、敵千人を斬捨てし跡」と。拙にして調をなさずと雖も此の石の文字、何ぞ人の情をそゝることの多きや。

而も、英雄逝いて今何れぞ。嶮兀たる一寒巖は三百年來。風雨鏘鏘し、冷苔蝕蝕し、萋々たる羅葛徒らに武夫の夢を封ず。嗚呼此の岩、如何なる思ひを以て當年の活劇を目睹せる……？此の岩のほとり此の岩……奇草依稀たり。何の情ぞ。谷を隔て、波濤の如き山容は、寂として我れを凝視し、我が心を魅す。國は破るも、自然は長へに老いず春や昔の春ながら……。

我は、此處に奮闘せる勇士を、此岩は忘れざること、思ふ。終に無量の慨感に堪得ず。堆き去年の落葉を拂つて、苦むす巖に唇を汚し、天正の澁き歴史の、切端を味ふに至りては、我が心まさしく狂へるにあらすや。日川の瀨聲は、鬱々と操琴の如く、獨り當年の怨恨を吐くもの、如し。

◆富士山嶺の落日、暮雲下界に搖曳して、慘澹たる火山の殘骸は、怪巖に枕して今や眠に落ちなむとす。西天紅を潑し、峰岩紫石に染まり、赤百合の如き太陽は、虞淵の底に没せむとす。殘照露けく砂に迷ふて、岩影斜に地に落つ遠寺の鐘聲黄昏を報じ、鳴鳩月に嘯くの趣きあり。東の方、伊豆の海、駿河灣、渺漫微茫の裡、富士の影直角形に

映じ、紫赤黄青を採せる暮靄を以て縁をとる。古歌あり……夕日さす田子の浦邊に寄る船は、恰ら富士に登るかと思ふと。あゝ、是れ、永恒の靈の、標識にはあらざるか……日落ちて忽として消えたり。消えて跡なし。世界に無し矣。只モイメンタル刹那の絶美、まさに造りの誇なるべし。天地の謎と云はんは當らず。忘却の夢と云はんも無し。幻の淨土樂園、この一語、臆に其の境を髣髴せしむべむか。靜穩なり。平和なり。深沈なり。幽寂なり。無聲なり。神秘なり。眼を擧ぐれば雲海は渺漫として限りもあらず。宇宙の涯は、遙けくもあるかな。嶮巖の峻平たるものに依つて、我れ心淋しく一聲呼はれば、噴火口底、山靈微に言葉を添ふ。我れも詩人となり得べむ。這個の景情を直寫する筆あらば。漂浪の萎えし衣を拂ふて、扱ても冷たし此の夕風！

◆富士山上の朝日、靄霧降り注ぐ宇宙の涯、鑽坑たる雲嶂、城樓の如く競ひ立てり。其色、濃紫の極、黝黒と見ゆるもの、縁を金粉と銀線とに染め浸す。左方は横に搖曳して、中途三列に開裂し、混結して又一となり、細縋の如く遠く走りて究極する所を分す。右方は散りもつれて、續きつ斷れつ、激爾として浮々焉、據所なくして、盤桓紛絮し、縋となり、縋となり、柿となり、幡となり、亂煤の如く、藕絮の如し。後には、一刷したらんが如き、深紅の雲低く垂れ、次に青綠赤黄の雲あり。たゞ是れ狼藉たる薔薇の花、間々金紅青紫の彩線を三條、二條と斜に曳く。颯忽一塊の紅燭雲隙に現る薄明の中白衣の道者、佇立して禮拜する。三々四五、曰く御來光なりと。西の世界には、向うら淋しき夜色蠟燭し、星光輝々として睡夢を封ず。まさに是れ夜と晝とは、我れを標境として立てりとぞ見ゆる。朝暾既にして半ば現れ、涯なき太平洋動濤千萬里、若紅を漂はして、蘭麝の香は空にも泌みつべし。白雲、巖谷に遷れ沈みて、丘嶽浮動し、三州の裾野は、青藍低迷して、芳芬を吐く。

◆筆を抛つて庭前に出づれば、悶然として、天地は死せるが如し。時々閃光螢の如きは、大鳥、千箇崎の燈臺なり。圓き大室山は、霧の薄衣を纏ふて、恰も聖地タホル山に似たり。……仰げば——億万年を隔てたる、永遠の世界を忍ばせて、銀河は白く、大沈黙の流れを滾したり。彼處に、壯嚴なるは、カシオペアの星座よ。此方に雄大なるは、ベガス、の姿——我が心、躍然として輝けり。「陰雲斷續月弓の如し。蕭寂たる孤村、未だ眠らざるの中。後山近く狼の子を乳ふ有り。一聲地に震ふ五更の風。」



願はくば我をして、スニウムの絶壁上に、坐せしめよ。  
 其處に——波と我とは、只ふたり。  
 他界の物語を、囁くべし。  
 白鳥の如く歌ふて、其處に我は、死を得たしと思ふ。  
 奴隸の土地に、我は留まらず。  
 サモスの杯は、投げて碎かん。 (Byron)

斯くして、チャイルド・ハロルドが、最後の旅は、終りを告げぬ。  
 グレンシアの海岸に立ちて、彼れは呼ばりたり。  
 ——自由よ——。  
 麗しき其の海岸、莊嚴なるスバルタの森。  
 峨々たる山は、皆な答へたり。  
 ——自由よ。 (Byron)

▽如かず『聖中心』の「を守らんには

昭和十一年七月二十六日夜、上野精養軒の樓上にて、會食前、獨り欄に倚つて、俯瞰す。時々、滿員の電車が、軋る音も重たけに通る。薄墨色の空に畫かれた、木々の梢の間から、ネオンの光、波に碎くる不忍池のアチコチで、ボートが靜かに滑つて行くのを眺めて、「ヴェニス之歌姫」が年る、詩の舟ゴンドラのやうにも思はれた。  
 伊豆八幡野松尾の山上から、夜毎に眺めた漁火のやうすを、彷彿させては居るが、遙に聞ゆる弦歌の際に、此處には矢ッ張り、都の香りが、濃厚に流れて居る。

だが、椅子に腰かけて姿勢を正し、中心本我の世界に歸つた時、其處には、都も鄙もなく、渾然として、一律、純眞の聖境と化し、總持の園苑、無漏法の林樹、覺意淨妙の華、解脱智慧の果、八解の浴地には、定水湛然として滿てり。正身端坐して、迹滅し、一道の虚寂は、万物齊平なり。何れか勝、何れか重、何れか劣、何れか輕、何れか賤、何れか辱、何れか貴、何れか榮なる。澄天も淨きを愧ぢ、皎日も明を慚づ。夫の倚嶺を安んじ、彼の金城を固ふす。

ア、皇天、何ぞかくも、我れを愚ませ給ふぞ。神かくも深く、我を愛させ給ふ、塵世の現象は、刻々に消滅し去るのに、自分は此の不磨の眞理の聖境に活き、獨り寂然として、而も、炎々として不滅の大歡喜に燃えむとは、……當にもならん塵世の榮華、變轉難き人情の葡に、遠々惑々として、浮動する同胞なしや。

我は、只我が「聖中心」の一道を進まんのみ。爾の七竅を關さし、爾の六情を埋めよ。色に窺ふこと勿れ。聲に聞くこと勿れ。色に見る者は盲し、聲に聞くものは聾す。衆學萬藝は、空中の小舢、衆技萬能は、日下の孤燈なり。英才賢



能は、是れ憚りなり。濠接を棄捨して、華に耽り、麗に溺す。神既に勞役すれば、形必ず損弊す。多知なること勿れ。多知なれば、事多し。多慮なること勿れ。多慮なれば、失多し。知多きときは、心亂れ、聞多きときは、志散す。心亂るれば、憚りを生じ、志散すれば、道を妨ぐ。(以上息心銘及維摩經に依る)。如かず。我が「聖中心」の一を守らんに――。滴水停めざれば、四海將に盈たん。纖塵拂はざれば、五嶽將に成らん矣。頭を上ぐれば、既の空、一面に、愛の光、生命の輝きが、霧の如くに燃え上り、其の中に瞬く諸星の美しき。いじらしき。私はここに、自然の中に、活ける真理の微笑を直感することが出来た。

ア――、會場では、もはや、シャンパン、ウイスキー、ベルモットの杯が飛ぶ。酒は飲まぬが、さりや、俺も、席に出て行かっかな。我が務めを果すべき重要談は會食の後にこそせめ……。

# 肥田式(舊姓川合)強健術に

## 對する熱讚激賞

(次第不同)

壯麗なる體格、入神の妙技に、恍惚たりし、諸名士の批評、及び新聞雜誌、書籍等、筆を極めて、感嘆激賞の辭を、連ねざるは無し。如何に江湖の、熱狂的大歡迎を受けたるかを、窺ふに足らむ。

編輯部



御嘉納遊ばさる 谷林第十五師管主計分團長。一、強い身體を造る法。右久通宮殿下へ捧献方其の筋へ願出置候處今般御嘉納之恩命に接し候條及傳言候也。

體格雄偉痛快禁せず 大隈侯爵。吾輩は、君の體格の雄偉なるに、驚いて仕舞つた。氣力の籠つた練修を見た時には、痛快禁ずることが出来なかつた。國運發展の第一要件は、國民の體力にある。極力獎勵せられねばならぬ。

立派な體格ぢや 東郷元帥。君のことは、石橋(商船學校長)から、聞いて居る。仲々立派な體格ぢや。どうか國家の爲めに、奮闘して呉れ。帝國のため、最も必要なことを、發明してくれたのは、何よりも有り難い。

國寶なり 床次内務大臣。川合式強健術は、日本の國寶なり。七氣これによつて、振はるべく、體格これによつて改造せらるべし。

最も推奨すべき理想的強健術

商船學校長石橋海軍中將。近頃端なくも川合式の心身強健術を讀んで、大いに自分の日頃の要求に近いものが現はれたのを喜んで、直ちに經驗者の意見を徴したが、體操に造詣深い砲術學校教官杉本少佐は、最も合理的であるから充分實行の價値があると賞讃するし、又前の海軍兵學校長で體操は特に熱心に研究せらるゝ山下大將も、川合式の強健術は期せずして瑞典體操の眞髓に合致して居る。のみならず夫れに日本武術の氣合が入るので西洋式を脱化した全く日本男兒の心身鍛練に適合したものであるといふ意見であつたので今年の五月頃特に川合氏を聘して、五六名の本校教員に教授を乞ひ、次に生徒に傳習せしむるに至つたのである。

川合氏の強健術は、僅かに四分間で充分目的が達せらるゝのである。だから、よし最初妙味を感じないものでも、ほんの四分やれば良いのだからといふ至つて氣輕な觀念のもとに、さのみ負擔を感じないので雑作なく實行が出来る。在來の諸種の強健法に比較し、又斯道の經驗家の言に徴し、川合式強健術は最も自分の要求に近いものであることは斷言するに憚らないのである。従つて海員のみならず、陸上でも日常煩雜なる事務に従事する人々の爲には最も良い運動法と自分は信するのである。

老生大に御賛成

竹内陸軍中將。貴下の強健術は誠に有益なる御著述にて老生大に御賛成申候將來國家の中堅たるべき青年には一日も早く實行被爲度存候老生は已に六十六の高齡に候得共尙自己を重んじて身體の強健に注意し日々夜々實行して敢て惰り申さず御體の通りの強壯にて昨年は北米の炎暑も更にへこみ不申今年亦北支滿鮮に漫遊して屢々壯者を驚かせ申候體力強健にさへ致し候へば貴説の通り氣力隨つて盛なるは自然の道理にて通常老人の爲し能はざる所も老生は格別の苦勞も無く平氣にやり通し申候心身盛なれば大抵の事は思ふが儘に成し遂ぐるもので此の老境も他人の知らぬ愉快に國家的の樂みを致し居り候身體だに強健を得ば自然氣力の強く相成るは現に貴下の御實驗によりて證明せられ居り申候得ば國家の爲に益々御奮勵強健術御廣被下様致度亂筆缺禮御海恕被下度候、實に貴下の御著述の餘りに面白く御賛成に堪へず候爲め、遂に右様相認むる事と致し、御高見被下度候 敬具

大に吾が求むる所に一致し醫道に貢獻する所多し

二木醫學博士、吾々は先きに、文明人士の呼吸が餘りに胸式に流るゝのを警告して、其の腹式の長所を擧げ、且つ血液循環を平等ならしめん事を説いた。次ぎに吾々の要求は筋肉の練習法であつた。此の筋肉の練習法は野外の遠足、高山の攀登、擊劍、柔道、ボート、體操等種々あれども、未だ金もかゝらぬ、時間もかゝらぬ、獨りて何時でも出来る完全なる運動法の無きに窮して居つた。一夜、川合君余を訪問せられ、其の語る所の筋肉療法、即ち此書に載するところのものは大に吾々が求むる所の運動法に一致してゐた。而も君の方法は、單に筋肉の鍛練に止まらずして、氣合と、呼吸と、腹力と敏活とを兼ね、一々君が獨特の研究と實驗とに成り、而のみならず、虚弱なりし君の健康が、之れによつて、回復せられたる實證を擧ぐるに於ては、誰人も之れに非難を容るゝことは出来ない。更に本書を一讀して君が誠意と熱心とに敬服せざるを得ない。此の書實に吾が醫道に貢獻する所多し。且つ之も吾々の呼吸法と同じく、病を治するよりは寧ろ大に病を防ぐの方であることに、讀者諸君の注意を乞はねばならぬこと、信する。余は又省みて斯の如き良著が、醫の方面より出でずして、却つて俗の方面より出でたるを異とするのである。嗚呼天地限りなく、學道極まりなし。君乞ふ。讀者と共に、國家の爲めに自愛せよ。



**血肉躍如、天來の言** 基督教界の元老、押川方義師。吾が輩曾つて川合君の強健術練修法の實績を見たことがあるが、血肉躍如として天來の言葉を放ち純眞にして強大なる生命力の進り、傑然として、人の肺腑を照らすの感があつた。

又其の折簡單な演説をされたのを聞いたが、火の如き大雄辯、手足悉く聲をなし、文武の兩道が、遺憾なく發露して居つた。これ即ち眞教育の根源であつて、かくの如くせざれば、體育心育の實は擧らず。誠に體育術化して、體育道心育道となるものである。かくして、文武兩道の體現を期することは、國歩艱難の今日特に、最も緊要のことなりと吾輩は確信するものである。

**日本男子の鍛錬に適す** 聯合艦隊司令官山下海軍大將。川合氏の強健術は、期せずして、スウェーデン式の精髄と合致し、これに武道の、根柢を獲得して、眞に日本男子の。心身鍛錬に適合せり。

**體育上の疑義を解く** 教育本部長。有馬海軍大將。強健術の實驗を見、説明を聞き、多年抱懐せる體育上の疑義を解き得たり。

**勇壯なり** 尾野陸軍大將。自由自在の動作勇壯極まり無し。

**至妙なる中心力** 鈴木海軍大將。至妙なる中心力の發動に、魅了せられたり。痛快なり。

**偉大なる體格** 栗田陸軍中將。偉大なる體格。緻密なる研究、敬服の至りに堪へず。

**強烈無比** 比志島陸軍中將。強烈無比、國民體軀の改善は、これによりて、其の目的を達するを得ん。

**文武入神** 押川方義師。文武神に入り、心身一の如し。斯界の大自然なり。

**最上のもの** 新井典選師。曾て公にされたる、此の種の中で、最上のものなり。其の研究は、飽くまでも、眞面目なり。

### 結構なる御著書

二荒伯夫人。北白川宮擴子女王殿下——今日は、御著書二部、御贈與下され有がたく御禮申

上候。早速一部兄……北白川宮成久王殿下……の方へ、差し使はし置き候。結構なる御著書にて、定めし、有りがたく、存じ候事と御禮申上候。私も早速拜讀致すべくと、樂み居り、又芳徳歸朝後は、早速と、拜見致さすべく候。

**健康の極致** 竹内工學博士。愉快なる、合理的練修法、武術の精華、健康の極致なり。此の種のものにありては、最上最善のものなり。

**驚嘆の外なし** 三宅雪嶺博士。これ悉く、獨創なるか驚嘆の外なし。

**類に肉が附いた** 三村林學博士。不思議にも長男は、川合式強健術の傳修を行つて、一週間た、ものに、今迄どうしても、駄目だつた類に、肉が附いて來た。

**妙術に驚く** 福岡樞密顧問官。想像以上の妙術、驚愕したり。方法は中々六づかし。

**身體によき筈** 住友男爵。これ程のことをなさば、身體によき筈なり。兒が身體改善を托せん。

**腹力強大** 本多男爵。川合氏の、腹力の強大なるは、驚くの外なし。

**時代の要求に適切** 京都大學理學部長、松井理學博士。人口増加に伴ひ、虛弱なるもの、數も、亦加はり、日々激甚を加ふる世務に堪ゆる身體の持主は、却つて少からむとする現狀に際し、御高著の何れも、時代の要求に對し、適切なるものと存じ候學生輩にも熱讀致させ度存じ候。

**教育界に及ぼす効果洪大** 帝國教育會長辻男爵。聽講者は、全國は勿論、支那居留地、滿洲、朝鮮臺灣等より來會せられし、小學校教員、中等教員等に有之候。是非とも御講演願上候。

**最も完全有効なる健康法と確信す** ドクトル加藤平民病院長。醫者の本當の職務は、社會に多くの病人が出來ないやうに努めるにある。されば醫藥によらずして健康を得る法があるとしたならば、精密にこれを吟味し、こ



れを批評して、世に紹介するの、責任があると信ずる、自分は、斯かる觀念のもとに立つて、大に『川合式強健術』を鼓吹して居るものである。自分が、初めて川合氏の『強健術』を實際に見たのは、茅ヶ崎の私宅に於てであるが、其方法の簡單であつて、併も科學的なる點は、確かに社會一般に推薦する、價値あるものと確信した。そこで直ちに道場を、病院内に設けて、短時間に其術を、成るべく廣く世人に教授せしむることにしたのである。

たゞ近頃、健康法なるものが、殆ど一種の流行物となつて、子供だましのやうな無意味の體操や、怪しげな治療法などまでが、殊更に神秘的扮飾を施されて、民間に持て囃されて居ることは、喜ぶべきであらうか。將た憂ふべきであらうか。然るに『川合式強健術』の世に薦むべきは、其徹頭徹尾、理學的なる點にある。歐洲最近の醫界を見るに、今や既に科學的強健術、理學的療法に傾きつゝある。自分は不完全な不徹底な、所謂強健法を喜ばないと共に、又何でもかんでも、藥で癒すといふ、今日の醫藥萬能主義にも反對するのである。川合氏の『強健術』は、源を武士道に發して武術の根本を握み、古今世界各國に於ける、あらゆる運動法、體育法の粹を採り、これを生理解剖に照して、自己の啓發した所を加へ、多年の實驗によつて、結晶したものであつて、大綱を捉へたと同時に、其研究は驚くべき程、細微を穿つて居る。よく科學的なると共に、又よく神祕的である。

殊に最も自分が、愉快に感じたのは、川合氏が、病弱な家庭に生れ、屢々死の、手の襲ふ處となり、『茅棒』と云ふやうな、綽名を受けた程虚弱であつたにも拘はらず、敢然として、體軀の改造に志し、終に今日の精美なる體格を、獲得するに至つたことである。川合式強健術では、解剖學に基いて、各種の形式を組織し、之を實行するのには、中心力を基礎とし、又同時に精神を、統一するがためには、『曙光の不起』を説いて居る。其れ等は一として空論のものではなく、悉く川合氏自身が、獲得して居るのであるから、價値ある事と思ふ。而も此れ等は、東都の各大學に於て、法、文、政、商の諸科を修了しながら、又軍隊に於て、豫備役將校となるまで、常に優良の成績を獲得しながら、やつたものであつて、それも時間が僅々、數分間で足りたからであらうが、克く其繁忙裡を一貫して、深酷なる研究と、實驗とを續けた熱誠と、努力とに對しては、充分に察して、やらねばならぬと思ふ。

此強健術を、實際に行つて、細かに調べて、見れば見る程、益々妙味を、感するのであるが、先づ大體『川合式強健術』の、特長とも思はれるものを、擧げて見ると——略……

なほ『川合式』には、硬軟二種の方法があつて、前者は四十五歳まで位の、男子の體軀を鍛へるのに、最も妙であるが、後者は餘程の老人でも、實行する事が出来る。この外にまた各種の呼吸法と、椅子運動法と云ふのがある。それ等は慢性病者、輕症の患者等が行つて、其回復を、速かにすることが出来、老人婦女子等には、殊に適切な方法である。一體、日本人は、少しく年をとると、運動等には、全く遠ざかつて仕舞ふが、それは大なる間違ひで、方法こそ多少の參酌をせればならぬにせよ。老ゆるに従ひ、益々運動によつてその枯渴せんとする軀を鍛へ、筋骨を柔軟にする必要があるのである。要するに自分は、最も完全有効なる、理學的、強健術として、責任を以て、『川合式』を世に推薦するものである。

**卓然群を抜ける川合式強健術** 松平早大教授。苟も強健に資すべくんば武技可なり。遊戲可なり。體操亦可なり。然れども對手を要するものは時慮意の如くならず。勝負を分つものは、争氣心を亂し、器械を用ふるものは、入り易からず、趣味あるものは、活氣に乏しく、優美なるものは、敏速を缺く。其比較的弊なきものに至つても、亦或は時間努力の、不經濟を免れず、是に於てか、川合君の強健術が、卓然として群を抜くを見る。川合君の術にあつては、唯だ此の子然たる、五尺の赤裸々の外、何人をも須たす、何物をも要せず、時として處として不可なるはなく、武技の勇氣を具へて、而も激ならず、遊戲の興味を帯びて、而も俗ならず。一舉手、一投足、皆其意義あるが故に、徒勞ならざるなり。僅かに、四分間にして足るが故に時費えざるなり。夫れ此の如くにして始めて吾人の、要求を充たすを得べし。蓋し其術となつて、現はれたるものを見れば、甚だ簡易なり。然れども、何ぞ圖らん。之を古今の學理に考へ、之を東西の經驗に徴し、研究を積み、練磨を累れ、意匠慘憺、十有餘年の工夫より、得たる結果ならんとは。予は客月始めて、木挽町の練修所に至り、君の強健術を、演ずるを見る。其自然體を操るや、靜かなること、林の如く、動かざること、山の如し。其れ未發の中なるか。既にして坐作進退、交々變じ、胸腹手足、弛張屈伸の妙を極



め、踴躍頓坐の勢、或は虎の嶋を負ふが如く、或は鷲鳥の搏つが如く、神氣精力、盎然として四體に溢れ、一聲の氣合は、春雷動いて、蟄蟲啓くが如く、而して氣息の吐納、體軀の俯仰に至るまで、一として律に合ひ、節に中らざるはなし。其れ既發の中なるか。予嘗て、君の著書を讀み、其根底の深きに服す。乃ち實際を目睹するに及び、覺えず心醉の餘り、伎療の念を生じ、直ちに籍を會員に置き、之が演修を怠らす。蓋し強健は、何人も欲する所、況んや將に爲すあらんと、欲するものに於てをや。予や今年五十五歳、而して生來幸にして弱質にあらず。然れども、尙ほ且つ進んで強健を求めんとす。青年の士、蒲柳の質を憂ふるものは勿論、從令然らざるものも亦安んぞ、此に思を致さざるを得んや。

川合君は、敢て強健術を以て、精神の鍛錬と混同せずと雖も、其腹力と云ひ氣合と云ひ、無我の境と云ひ、外より内に及び、形によつて神を整ふるものにして天機神秘、寓して其中に在り。精神修養と相須つことの切なる、孟子の志氣交養と、互に發明すべきものあり。是れ其名づけて、心身強健術と云ふ、所以ならんか。願ふに、君の此術の大成せる、亦精神修養の致す所にして、親を慕ひ、物を愛し、君國に報する、一片の至誠に外ならず。中庸に曰く、誠者非自成己而也所以成物也と、君自ら其術により、冠弱を變じて、強健となし、更に廣く、之を人に及ぼし、天下の人をして、皆強健ならしめんと欲す。吾人至誠の、賜を享くるや多し。至誠を以て之を迎へ、至誠を以て行ふあるのみ然りと雖も、強健は最終の目的にあらずとは、君の喝破せし所なり。如何に強健にして、壽域に躋るとも、徒らに酒囊飲袋となり、醉生夢死して、國家社會と没交渉なるが如きは、君の意と相距る遠し。予を以て君を觀るに、行ひに必ず將に、其道義の精神と、鐵石の體軀とを以て、大に國家の爲めに盡瘁し、世の青年をして、矜式する所あらしめんとす。予老いたりと雖も、願はくは、響を聆べて馳聘せん。

**恭讀川合式體格改造法** 三保學院長 池田忠一氏。著書綿密悉丹誠。却怪今傳茅棒名。究得天機神秘妙。渾身如鐵使。人驚。貴著一讀。不堪感慨。即賦此以表謝意。

**内外兼備の強健法、感謝する者無數ならん** 松村介石氏。著者川合春充君は予が二十年來の心友川合信

水兄の令弟であり、且つしばしば日本教會へ來らるゝより、予が數年來の知人である。然しながら、君が柔道の達人であつて、兼れて人體の強健法を研究せられつゝあると云ふことは、予の更に知らなかつたところである。一日君、予の不在に際し、一原稿を携へ來つて家人に告げ「是に先生の序文を願ひたし」と言ひ殘して去つた。予歸來、先づ其の書名を見て「ア、又こんなものを書いて來たか」と思ひ、讀む心地もせず。書棚に載せて願ひなかつた。理由は近來、予が藤田先生の息心調和法を初め、二木博士の腹式呼吸法などを世に紹介して、大に人體の強健法を鼓吹して居る處から、これに因む、色々の翻譯物や、諸書より拔書した怪しげなる原稿を携へ來りて、或はこれに序文を讀ひもしくはこれを書肆へ周旋して呉れと頼む者多きにより、失禮ながら「是も亦其の類では無いか」と、思ふたからである。

然る處、其の後二三日を経て、一寸閑を得たから「其れにしても、少しも目を通さずして、返すのは氣の毒でもあり失敬でもある」と思つたから、一寸一瞥を是れに加へた所が、最初より、全く氣を取られて仕舞つた。其の文章の簡潔にして、要領を得たる、其の誠實の文面にあらはれて、人の心を動かすものあるに驚いて、これは、如何にもと肯き、此の筆、此の精神、此の記事ならば、人も屹度喜んで讀むし、もとより實際、吾輩の鼓吹する強健法の裨益にもなるし、又書物屋で出版しても、必ず賣れるであらう、と思つたから、つひ／＼面白く讀み始めて、暫らくの間に全原稿を、讀了して仕舞つた。

處が讀了し去つて、更に驚いたのは、これは書物の拔書や、翻譯物や、人の説を並べたものではなく、川合君が自ら實驗し、研究し、茲に其の實を擧げた確證を持つて居て、世に是れを發表し、「我れ是れに依つて、此の如き體軀を養ひ得たから」君も亦是を爲せ、我を見ずや」と云ふ、實際止の著書であつたから、何とも云へぬ愉快を感じた。

元來予は數年來、川合君を知つて居るが、身體の小さい、瘦せた、弱さうな男と思つて居たのに、そんな身體となつて居るのか、それならば實に嬉しいことである、令兄信水君は、あれ程の修養と、あれ程の思想と、あれ程の文才と、あれ程の志しとを抱きながら、身體が弱いので、ごうも氣の毒の思ひに堪へない、そこで春充君が發奮して、其



の「茅棒」より天晴れ剛強の體軀を練り上げたこと云ふことは、如何にも凜平たる志氣があらはれて居て、豪快云はむ方なしである。

とは云ふものゝ、眞に其の身體を検査しなければ、まだノ、ホラかも知れぬと、其の後一日来て貰つて、實地ためして、今度は三度驚かされたのである。成程見た所では、婦女子の如き容顔で、細い、小さい様な身體には何等體育の習練が、施されてあるとは思はれないが、一度衣を脱すれば、其の發達したる筋肉は山脈の如くにあらはれ、これを緊張せしむれば、恰も岩石に觸るゝの感がある。さうして、丸く肥えたる雙腕が、肩から次第に細くなつて手首に及び、兩脚を着けて直立すれば、ヒツタリとして水も洩らさぬ程に、肉附が良い。此の體格美に氣を奪はれて、ヂツと見詰めたまゝ、云ふ所を知らなかつた。予は更に、川合君から、其の運動法の十箇條を示されたが、一々納得することが出来た、往日、サンダウ體操法をやつた事も有つたが、中途にして過激なるがため止めた。友人の壯健なる者が、此れをやつて肺病を惹き起した事を見て、薩張り厭になつたが、今度、川合君の運動法を聞いて如何にもと感心した。所謂、筋肉の發達、内臓の壯健、體格の均整、動作の敏活は、此の方法によりて十分達し得らるゝ事と確信する。

此の書を讀んで最後に喜ぶのは、此頃は内臓の修養法を説くものが多くなつて結構であるが、川合君は前記四大要件を基礎として、これに武術の氣合を加へ、更に運動法を掲げて其の目的を貫徹せむとして居ることで、實に内外相待つて、完全なる人體の強健法を示したものと云ふべきである。

此の書、徴々たる小冊子に過ぎざるも、實に大なる獲物を有して居ることを、予は茲に斷言して憚らない。世上此の書を讀んで、後日川合君に感謝する者、無數であらう。

**荒木、宮本の武技に比すべき川合式強健術** 村井弦齋氏。荒木又右衛門、宮本武藏と云へば何人も武術の名人たるを知つてゐる。是れ當時の社會が武術の發達を必要とする爲めにその道の名人を産み出したのである。今日の我邦は何を最も必要とするであらう。他無し心身の強健を最も必要とするのである。人の精神肉體を堅實にして世界に雄飛せしむる方法を講ずるのが我邦目下の急ではあるまいか。此に於て強健術の名人出でざるべからず。

余は先年川合春充君の心身強健術なる一書を讀んで、その術の最も我邦人に適するを思ひ、青年子弟と共に其書に就て川合式の運動法を研究した。後數月始めて親しく川合君に接し、その技、その法を目視して、君が實に斯道の名人たるを感じた。

川合君の強健術は西洋風の體育と東洋風の武術とを融和せしめて、之に自家の考案を加味したものである。その方式に於ては殆どあらゆる運動法の粹を蒐め、しかも短時間に之を實施し得る點が最も世人の練修に適してゐる。

時世は傑士を作り、傑士は復た時世を作る。我邦の武術が荒木宮本の輩出に因つて、一層の隆盛に赴きたる事を思へば、將來の我邦は川合君の力に因つて、最善最良なる強健術の發達せん事、期して待つべきである。

**眞人修養の第一歩** 村井外語教授。眞人修養の第一歩は、先づ體軀の強健より始めなければならぬ。然るに修養に志す者が動もすれば、精神の一路に走りて、肉の方面を閑却し、精神に於て得る處も亦、病的のものたるをまねがれざる者多きは、遺憾のことである。

川合君の強健術が心身相關の原理を完全に表現して居つて、且つ其の方法が、徹頭徹尾科學的なるは私が極力、推奨するに憚らざる所である。けれども私が最も感動したのは、川合君が、こゝに到達されるまでの途中に於ける刻苦と努力とである。即ち、君が、最も虚弱の軀から、かくの如く、驚くべき精力家となられた其の徑路である。曾て強健術の著書を手にして、殆ど小説を讀むが如く、感興津々、巻を掩ふに忍びなかつたことがある。そして、『道會』に於ける日曜講壇を其の紹介に費して、恰も聽衆中に居られた川合君を強ひて、其の完全なる裸體美、を壇上に曝らされた事もあつた。

**活社會の多數人より歓迎せらるべき強健術** 臺灣民政長官 下村法學博士。近頃身體強健の方法として

數ある中に、流行ものとなつたのは二木式の腹式呼吸である。岡田式の靜坐法である。川合式の強健術である。

自分は二木式も川合式も、それ〴〵其門丈けは覗いて見た。事實は隨に各特色ある事を確認せられる。而して川合式の特徴は其練修が短時間を以て足れりとする事。身體の各部に亘りてそれぞれ筋肉の緊張を計ること。全力を籠め



て積極的に運動すると云ふ點である。然も是等の特色は活社會に居る多數の人によりて、必然として歓迎せられる點であらうと思はれる。

### 運動法の原理で法政の説明

二荒伯爵。謹啓打ち絶えて御無沙汰致し候先日は御多用中を小生のためわざわざ御枉駕被下洵に難有く厚く御禮申上げ候實に久々に清き會合意義ある御會食を致し候師範學校に於ける御講話は師範生に多大なる感動を興へ渡邊法學士は貴兄が腹部とその他筋肉練修を對象的に鍛錬せらる、理を活用して天皇と臣民との關係を架説致し候貴兄の原理が法制の説明の材料と相成りし事は最も面白く存じ居り候。

### 有識者間に傳唱

中村西部逋信局長。小生貯金局在勤之節貴下の強健術は將來必ずや廣く流布可致と申上おきしに果せる哉三年後の今日各地の有識者間に傳唱され多數の實修者を出せること小生亦深く御喜び申上候。

### 文部大臣たらしめは

村井外語教授。其の實驗や、血あり、涙あり。我れをして、文部大臣たらしめば川合氏を擧げて、體育の方面を、擔任せしめん。

### 生理解剖力學を基礎とせる強健術

高松海軍造兵大監。凡そ生物の身體は、練磨により益々改善進歩せしむるを得べきものなれども、此の反對に之を放置するときは、愈々萎微衰退し、歲月の經過と共に、漸次其活動を消耗するに至らん。此時に方り、生理解剖力學を基礎とせる川合式強健術を練修するは、實に人生至大の幸福にして強壯なる人物を養成するは我國家の一大利益たり。

### 身體強健上に有益なる書

乃木大將副官塚田陸軍歩兵大佐。今日は、貴著御惠贈下され、正に拜受取りあへず拜見仕り候處、誠に身體強健上に、有益なる書に御座候、尙ほ篤と拜見仕り、友人其他知己と共に、實行を勵み申すべく候。茲に深く、御厚意を拜謝仕り候。

### 軍人の欣幸とする處

海軍大學教官杉本海軍少佐。先般は御榮宴を賜はり有難く存じ候早速御返事可申上の處小官も今回の事變により近く征戰の途につく事と相成り其準備に忙殺被致候ものから遂に延引いたし恐縮の至りに御

座候口こそ體育體育とやかましく騒ぎながら、其實眞によく、體育の高尙なる、精神のもとに、行はるべき高等なる、一の學問なるを知るもの少きは頗る遺憾千萬と、するところに有之候と共に、貴殿が御努力によりて、我國民の體育に、關する智識を増進せしめ、併せて逐日不夏の域に踏みつゝある、その體質を改善せしめ得るは、軍人の特に欣幸とするところに御座候。

### 我が心を刺衝せり

落合會津中學校長。曙光不眠の實見、貴下筋肉の活動を、まのあたりに見し事、氣合の直感など頗る我心を刺衝し、向上せしむる心地仕り候。拜具

### 仁王の如き體格(婦人世界)

村井愷齋氏。よく世間には、衣服を着て居ると、奪せた人の、様に見えて、裸體になると、大層肉附の良い、肥つた人があるものです。川合式強健術を、創められた川合春充氏、即ち今の肥田春充氏などは、衣服を着て、居る時見ると、普通の人多く、異りませんが、裸體になると、仁王尊の如き、體格なので何人も、其の筋肉の、發達に驚きます。

### 白髮の青年寒中てもセルの裕

松平早大教授。大正三年の何時頃であつたか、新聞紙に、青年會館で、川合春充氏の強健術の實演があると云ふ事が記してあつたので、其の日出懸けて行つた。初め衣服を着て居る川合君の姿を見ると、瘦形で、身長も高くなく、眉は織く、目は優しく、丸で女のやうな、容貌であつたから、強健の標本として餘り、厚弱では無いかと、心竊に、疑を披かざるを得なかつた。然るに、姑くして、衣服を脱ぎ棄て、赤裸々となつて、壇上に立つたのを見れば、體格が堂々として、筋肉は丸で、廠かと思はれる程に發達し、理想の體格美を具へて居るには、一驚を喫した。其れから、實演を見て、更に感服した。

吾輩は、是は壯快だ。愉快だ。さうして氏が茅棒と嘲られた程、虚弱であつたのに、斯んな立派の、身體になつたとすれば、屹度善いものに違ひないと思つて、甚だ氣に入つたのである。そこで、著書を讀んで見た所、流石に加藤ドクトルが、「科學的心身一致の、練修法」と評しただけあつて、生理解剖に基づき、武術の氣合を加味した點に於て



確に獨得である。

吾輩は之れを、練修しやうと、思つたが、道場の所在が分らなかつたから、川合君へ、手紙で問合せた處、或る日川合君は、態々吾輩の家へ、尋ねて來られた。此の時始めて、親しく其の風貌に接したが、無邪氣で、眞摯で、何となく、引きつけられるやうな、懐しい様な心持がした。それから、四方山の話をして居る中に、君が血あり涙あり。慨世憂國の、人物であることを知つて、深く傾倒せざるを得なかつた。

此の強健漸を。缺かさず、實行した結果は、どうであつたかと云ふに、胃が大分、善くなつて、ピットルや、胃活の厄介になることが、少くなつた事が、何よりの効驗であつた。殊に感謝すべきは、之れが爲め、元から威勢の宜い人間であつたのが、一層活潑となり、大隈侯から、『白髮の青年』と云はるゝまでに、若やいたことで、尙ほ、副産物と申して、宜しいのは、四十年間も着て居た處のシャツを、止めて仕舞ひ、同時に綿入を廢して、寒中も、襦袢とセールの袴、セルの羽織で、通すことゝなつた。これは五十三歳の時の事であるが、今でも、其の通りである。

此る數年間、不肖ながら、國事に奔走して、鹽分身體に、無理もして居る。對支問題の爲めには、前後三回も、全國遊説を試み、睡眠不足の場合も、數へ切れぬ程、あつたにも關らず、日に何回も講演する、入れ替り、立ち替はる地方の有志に應接する。九州の炎風虐日も、北越の氷天雪害も、踏み破り蹴散らして、押し通したのは、一に強健術の賜だと、有りがたく思つて居る。

**一同驚嘆反省** 吉野夕陽丘高女校長。拜啓先般御來校之際は御高話並に實驗御示し被下一同驚嘆反省多大の賜を拜受いたし候。過日常校にて食卓上の小話今に御記憶候哉老生の經驗のまゝ平生の生活法信仰、運動要領等貴問のまゝ(恰も久しぶりにて小學生徒が先生の質問に答ふるが如き心地を味ひつゝ)御答申候折先生にはウンハ、その通り、私の本にかいてあると申され候御記憶に候哉、貴著拜見、要領悉く腑に落ち申候につけ先日の禪的問答の光景想起感不紗候、當地子女は殊に體質羸弱氣象輕浮の弊有之候、將來練身練魂に於て一段の工夫努力を要す次第今回御高著と御高話による感激不紗ざりしを喜居候。

### 世界的の大發明

野村和歌山中學校長。體育上、世界的の大發明なり。雄大の研究なり。

#### 爲して佳ならざる無きの天才

修養團主幹蓮沼門三氏。川合君と相知ること新しく、寢食を共にすること

は今回が初めてです。僅々一週間の同居、竹馬の友よりも相慕ひ相敬する様になつたのです。川合君の眞情濃かなる。信仰厚き、謙徳高き、骨力飽くまでも強く、頭腦極めて明晰、爲して佳ならざるなきの天才、實に現代得難き人物であります。一見處女の如く柔和に義に勇む時は斷々乎として鬼神の態度、只々敬服の外ありません。天の恩寵により此至人と相見え相結ぶを得たるを感謝します。

#### 苦辛研究體育の一派を開く

松平早大教授。氣海丹田と云つても、昔から、只臍の下一寸、或は一寸五分位

の處だと云ふだけで、甚だ麗氣である、平田篤胤の説には、『腎の臟は、左右に上焦中焦下焦と、三つあつて、丁度氣海の穴は、その左右の間の中間を通つて居る』斯うあるけれども、解剖學の十分でなかつた、當時の事で、翁の智識が、果して精確であつたか否やは、判斷に苦しむが、それに比べると、流石川合春充君の、丹田に關する説明は、科學を根據として、幾何學的、力學的である。

川合君は、道義の士である。君の如き、苦辛研鑽、學理と實驗とより、體育の一派を開き、而も大公無我、眞理を愛する人が、其の長所なる、科學的見地から、各健康法に對し、十分の論評を、試みられることは、實に願はしきことであり。吾輩は、斯道の同士と共に、刮目して待つ次第である。

宗教でも、學術でも、藝術でも、昔から、一派一流の開祖である者が、非凡絶群の人物であり、其の創制した事業が、一代を風靡し、百世に流傳する、實實のあつたことは、固よりのことである。

#### 完全無缺の貴き強健術

原田長崎高女校長。五月偶川合氏の著『心身強健術』を繕に及び、私は實に巻を戴いて、

且つ喜び且つ嘆じたのであります。其は氏の強健術其ものが、武道と一致して神に入り、且つ科學の微を盡し、生理の眞を穿ち、完全無缺の貴き術たることの、敬服に堪へない、と云ふことは、勿論であると同時に、川合式の精神



——眞に世を濟ひ、人を救はんが爲に、己の一身を犠牲に供し、一生の心血を傾けつゝある、其の熱烈の精神と、非凡絶倫の精力とにあるのであります。

私は實に、韋編三たび斷つ程に、精讀致しました。

今夏上京しましたのを幸ひ、直ちに氏を其の、道場に訪ひましたが。氏が清く貴き其の心事と、其の鍛上げた體軀とは、如何に見事でありましたらう。一氣充つる所、筋肉緊張して、身幹鐵の如く、一氣休する所、筋肉忽ち緩舒して、身體綿の如く、『強健術』の如何に、貴きかを思はせました。そして其の品高き風姿清秀の眉目に、浮び湛へたる深き同情の念は、將に溢れんばかりでありまして、見るからに懐しきの感が生じ、私は恰も兄弟の様な心地がしました。

**偉大なる驚異** 半田文學士。私が川合君の著述を見て最も驚嘆したのは、川合君の到達したる境地にあるのではない。その境地に到達する迄の川合君の踏み來つた道程にある。川合君が死の恐怖に面接しつゝ、その戦慄に壓倒せられず。猛然たる勇氣を振ひ起して遂に生の凱歌をあげ得られたるその心的經過を思ふ時には、私は川合君の人格に對して崇高なる敬慕の念の湧き來るを禁じ得ない。

**織骨、瘦軀、病者の如くなりき** 田邊高等小學校長。風暖かなる彌生十七日のことなりき。絶えて久しき川合春充氏の訪問を受く。氏は過ぐる明治二十八年より同三十一年に至る四ヶ年に渉りて、小沼小學校に於ける予が門下生なりき。縣の中學校を卒へて筈を東郡に移し、政、法、文、商の諸科を専攻して造詣する所あり。

然れども氏はもと蒲柳の質、織骨、瘦軀、一見恰も病餘の人の如くなりき。而も骨肉數人は相次で夭折し、氏三歳にして母も亦愛兒等の跡を追うて逝かれたり。予は當時、校庭の一隅に、故意に朋を避けて、冥想に耽れる氏の孤影を見出す毎に、其の前途の暗澹として、甚だ頼み難きものなるを思ひ、せざるに悲愴の情を禁ずる能はざりしなり。何ぞ圖らむ。其の顔貌の黠美にして婦女を欺くものあるに似もやらず渾身は恰も鐵石の如く、之を叩けば錚乎として聲あり。喙腕は老松の如く、之を揮へば颯乎として風を生ず。予茲に於てか、張目凝視、唯々今昔の感に堪へざりき。

而して其の鍛練の深酷なるを想うて、熱淚の雙眼に溢れ來るを覺えざりき。

**世界各國強健法の粹** 押川春浪氏。友人川合春充君幼小の頃は、石に頭いても倒れて死にさうな程、羸弱な身體であつたが、之ではいかぬと、自ら奮然として、決する處あり。世界各國の強健術、體育養成法を涉獵し、實驗を重ね、その粹中の粹を探り、更に體育を養成すると同時に、禪觀の妙用氣合術等を融合し、鍛錬工夫十有餘年にして其昔風にも堪へざりし羸弱少年は、今や！頑鐵をもつて打ち來るもビクともせぬ頑健青年と化した。

世に實驗の價値は高貴なものはない。本書の如きは強健術の空論ではない。其實際を示したものである。今日、神經衰弱者の多き世の中、泥棒の多き世の中、亡國的國民の蠢動して居る世の中、吾黨眞正の愛國者は、本書によつて強健なる身體を養ふと同時に、豪壯なる精神を練り、國を賣る泥棒なんかは片ツ端から拳倒して仕舞はればならぬと思ふ。

**數多き強健法のうち最も秀でたるもの** 成蹊中學校長、成蹊實務學校長中村文學士。人と生れた以上何か意味のある仕事をこの身に残したいと思ふ人は方法でのみ健康を得られないと思はねばならぬ。凡ての事は意氣込

でばかり彼岸に達せられる。尊いのはこの意氣込の持續で、方法ではない。

この點に就て私は川合式強健術を數多き健康法の内の最も秀でたるものと認める。それは方法の外に氣合術を基礎として、體力を利用してゐるからである。方法の外に意氣込を自然につける。即ち知らず／＼この運動を持続せられるからである。

**強き身心と聖き精神とを** 青山學院神學部教授左近義徳氏。強き身體に聖き精神とは豫て小生の所信なりしに、世間、心身不權衡の者甚だ多く、誠に遺憾千萬に御座候。然るに貴下は誠心勵精以て古今東西の三百餘書を讀破し、取捨創案具に自ら實驗得達して遂に筋肉の發達内臟の壯健、體格の均整、姿勢の調和、動作の敏活、氣力の充實等の方法を、而も金と時とを徒らに費さずして、自由自在に學び得せしむに至りしは小生の深く感謝する所に御座候。



眞に生血滴る貴著『心身強健術』を讀み、又前週は始めて御演修を拜見し、眞に完全無缺と申し得らるゝ程に、その運動方法の、最も精神修養の理に従ひ、身體運動の則に適へるを覺え申候。實に我國民をして身體を強健ならしめ、精神を高潔ならしむるは全く貴下の大責任大特權なるべしと被存候。國家のため御自愛御奮勵被成下度奉願候。

**體量増し氣分清爽**(報知新聞) 平民病院長夫人加藤さき子氏。妾の主人は非常に川合式強健術を賞讃して居ります。現に病院の近くに道場を説けて、虚弱な方々のために公開して居りますが、妾もつひ之を練修して見たいと云ふ氣になつたのでございます。そして随分強い遣り方をも習つて見ました。それがために、體量もめき／＼殖えて参りました。最も愉快なことは、氣分のサツパリすることでございます。

そして腰が据り、胸が開きまして、ズツと上體を起して居るのが大層樂になりました。そして脚に力が出來ましたから、一寸突かれましてもよろけませんし、電車に立つて居まして、曲がる時でさへチツと呼吸を定めますと平氣で居られます。又此の運動をやりますと、頭が重い、肩が凝るのなごいふ事は、無くなりますから、妾も按摩の必要が、絶対に無くなりました。

**透徹した美觀に撲れたり** 都新聞社會部長中里介山氏。私は川合さんの裸體姿の美しいのに、見惚れて仕舞ました。電燈の下で、光線に不足はありましたが、艶があつて、滑らかで緊張すれば、鐵の如く締まる肉が、自然のまゝで、ゆつたりと肥へて居る處は、實に美事なものでした。

同時に私の感じたのは、川合氏の肉體の美であることのみでなく、其の舉動が如何にも鮮やかで悠揚たるもので、見て居るうちに、透徹した美觀に、打たれた事でありました。直覺的に人を美觀に導く力には、そのうちに必ず、整うたものがある。無理のないことが、階調ある動作を、外に現はすものである。川合氏の得た處のものに無理のないのも、一道の奥に到達した人でなければ、見られないものが、存することを、私はその時、深く感じたのであります。

最初に私が武術的と直覺したのは、實は川合氏の全く首肯せらるゝ處ではあるまいと思ひました。期せずして武術の、達人等が現はす妙諦と、同じ感覺を興へるでせうけれども、川合氏の得られた處は、一歩進んで、極めて科學的

であることを、知ることが出來ました。力學や幾何學、解剖學等から運動の原則を、説明せらるゝ、その徹底した造詣には、さすがに、川合氏は一道を開いた人だといふ、驚異の念が漸く起つて、來るのであります。

### 體力増進に於て、尤も完全に近き方法

松尾陸軍二等軍醫正。川合式強健術と稱するのは、川合春充氏の唱道にかゝるものであつて、生理學、解剖學の上に、其研究の根據をおいて居る。而して之を實行するには、腹力を以てすべきことである。且つ何等の機械を要せず。又場所と金錢とに顧慮するを要せないのみならず一日の練修に於て、僅かに四分間を費せば、足るに至つては、實に體力増進の上にて、尤も完全に近き方法である。

されば知名の士の、認むる所となつて、驚嘆の眼を張つて、内外相待つて、完全なる人體の強健術と激賞し理想的完全と讃嘆證明せらるゝのも、決して偶然ではない。氏は元より不撓の精神と、不斷の練習とに依つて、その強健なる體力を得たと云つても、其一家を爲すに至るには、あらゆる古今東西の、強健法に關する著書を涉獵した。併しながら、各一長一短があつて、甲に是とする所、乙に非とし、紛々として盡る所がない。故に氏は斷然、此等のものを斥けて、獨特の見地よりして、研究に耽つた。而して氏が運動に對する全要求は、最も完全なる發達と云ふにあつた。

**川合式により、心身全く改造さる** 富士川ドクトル。川合式の心身強健術が、現今、唱へられつゝある幾多の強健法中に於て、嶄然として、一頭地を抜き、岡田式靜座法、二木式腹式呼吸と共に、三方鼎立の狀を爲し、斯界一方の權威たるの事實は、敢て予が暇々の辯を費す迄もあるまい。

川合式強健術は、机上の空論ではない。只一片の理屈でもない。又何等の實驗的研究も經ない推理的健康法でもない。氏は、東西に亘り、殆どあらゆる健康法體育法に關する、書籍を讀破し、一々これを實驗に附して、其の長所短所を、科學的、實際的に研究した結果、別に一方法を案出したるものである。如何に苦心研究を積んだかは、氏が讀破した、書籍の多數なるによつて知られる。況んや是等の著書に説ける處は、悉く實驗的研究を、經たるものゝみに至つては、川合式強健術の根底の深きは、實に想像以上である。

予は川合式強健術の、忠實なる實行者の一人であり且つ、川合式強健術によつて、殆ど心身を、改造せられた一人



である。故に予は予の實驗について、諸君の参考までに、述べやうと思ふ。予は小學校時代から中學校時代までは、學友から『カマキリ』といふ、侮辱的綽名を附けられて居た。そして極めて羸弱で、まるで萬病請負所たるの觀があつた。

すると怡度、大正三年の四月に、川合氏の『心身強健術』が出版された。予は直ぐにこれを購ふて、本と首引きで行り始めた。一月二月と、熱心に練習して居るうちに、呼吸も覚え、調子も氣合も呑込めて、スラスラ、行れるやうになつた。予は此の時、予が今迄、求めて居て、而も興へられなかつたものを興へられたやうな心持がした。運動をやれば、行るだけ、メキ／＼と効果が顯れ、運動の方法が複雑でなく、種類が少く、機械も器具も要らず、場所の特定もなく、相手も要らぬ、而も運動回数が少く、運動時間がタツタ四分間で、これまで予が試みた、多くの健康法、運動法に於て、不満を感じた缺點が、悉く除去されて居るからであつた。

此に於て、予は洪水の如く、猛然として、川合式強健術に傾倒し、毎日熱心に、實行するやうになつた。爾來約一年半繼續して居るが、數年前『カマキリ』の如く瘦せて、ヒヨロ／＼して居た予の身體は、筋肉隆々として、發達し自分でも驚くばかり變化し、運動の度毎に今昔の感に、堪へないものがある。

斯くて予の身體は、『川合式強健術』によつて、根本的に改造されたが、改造されたは、實に肉體ばかりでなく、精神に於ても、進取的積極的となり、快活となり、全然別人の如く、一變して仕舞つた。故に予は予の今日あるは、偏に強健術の賜なりと思ひ、案出者たる川合春充氏に對し、陸ながら滿腔の感謝をして居る。——(略)——

**筋骨躍如心膽寒し** 加藤ドクトル(時也氏)。一人で運動の、精神に合致して行く、所謂補修法は、藤田式息心調和、岡田式靜座法、二木博士呼吸法其他種々であるが、之れ皆運動法としては、各筋修練に缺陷が多い。兼て書に讀んだ川合氏の練習法は、隨に有効と私は思つたが、實際接しなくては何の評も出來ないのであつたが、今回好期を得て、川合先生に就て、練習して得た所感は頗る多い。

川合氏の法を、一言に盡せば『科學的合理的心身一致の修練法』といふが至當である。川合氏の法を遠觀すると、非常に面白い節が多い。川合氏が十年一日と、瘦せた茅棒の身體を心血を瀧いで練り上げた、あの見事な體格には、耐

久的堅忍不拔の精神が、充満してある事を會得して、他で一見しても、愉快の感じに堪へられなかつた。

人は各、癖を有し、相撲取も各得意の取組方をするから、其必要の筋肉が、よく發育するのに定つてある所が川合先生の筋肉は、自己修練で身體上必要の、各幅要筋肉の修磨が出來たもので、頗る合理的に發育して居る。特に或筋といふ、不平均の發育でなく、圓滿無缺の發達を遂げて居る。これが他の壯健術と比して優つた點であると確信する。

中學校や、女學校で、講義後に示した、自己修練の整なる筋骨躍如たる強烈の運動を見て、心膽を寒からしむるものがあつた。

川合先生が、勢力を振つて、運動をせられるのを見ると、心身好く協合して、一絲亂れず、合理的の運動が出來て居る。自己に適して居るから、汗が出る程の勢力も、障害が無いと思ふ。僅か數分で、一回の運動を行ふ迄には、練習を要することは、云ふ迄もない。

川合式が、二十世紀的新しい、進歩した強健術としては、已に定評あり。吾人は、學術的に合理で、且つ數分間でやれる、愉快な強健術を、會得した事を喜ぶ。

**『落葉』は純日本人の感情** 菅原陸軍少將。體格改造法、有りがたく拜讀仕り候。『強健術』の方は、誠に結構なる御趣旨にて、愚弟と共に、昨日より稽古を始め居り申候。又『落葉』の方は、純日本人の感情を、率直に披瀝したるものにて、全然感を同ふし、非日本人に、讀ませてやり度く、感じ居り申候。

**完全なる體格美の活標本** 武陸軍歩兵大佐。貴兄の自由自在、圓轉潤達たる動作、完全なる體格美の活標本を拜し、有形無形、得る所、多大にて御座候。

**邦家の爲め偉大なる福音** 松崎陸軍歩兵大佐。拜啓御令名は、豫てより、拜承致し居り候、然るに、今回貴著拜讀仕り候に、言々肺腑を突き、感嘆の情、禁じ難く御座候。國民體格日に衰退する今日、最も意氣の充實せる、此の強健術を、世に宣傳せらるゝ事は、邦家のため、偉大なる福音と存じ、小生も及ばずながら、御趣旨普及を切望



する次第に御座候。

**鐵壁を貫く勢** 藤田師團參謀。練兵中に生ずるは何入力なるか。恰も鐵壁を貫くの勢あり。

**子供を頼む** 巖崎海軍大學教頭。宅の子供及び、親戚の子供數名、貴道場へ遣はし候間御練修願ひ上げ候。

**壯烈なる演修** 西村主計監。今此の壯烈なる演修を實見し、數年前、近衛師團司令部に於て、相會したることを想起し、感慨に堪へず。

**腹力の發勁痛快** 第十五師管主計分團長谷林一等主計正。熾妙なる腹力の發勁、まことに痛快なり。

**自由自在の變化** 山田海軍中佐。敏捷、輕快、自由自在なる、姿勢の變化を見たる時は、全く氣を奪はれたり。

**壯烈なり** 歩兵第四十九聯隊副官黒谷大尉。壯烈なるかな。軍隊の體操の如き、強健術に比すれば、兒輩に等し。

**百邪摺伏** 野口復堂氏。一聲の氣合は乾坤を劈き、百邪摺伏す。

**神に入れり** 小杉天外氏。驚嘆すると云ふも及ばず。神に入れりと、稱すべきのみ。

**體育の効果無限** 松浦天風氏。深刻なる鍛練によつて造り上げた、川合氏の頭腦の、俊敏なることは、驚愕の外ない。専門以外に哲學、天文、美術、音樂等より、測度術にまで、精通して居られる。體育の効果は實に無限だ。

**机上にあれば愉快** 先生御研究の難行苦行の條に至り候と、既日數時、會心の言に遇へば、感激して、膝を拍ち躍り出すの騒ぎにて、中々抄らす。此の分ならば、全部通讀は、何時のことやら、分り不申候。然し讀まなくても机上に此の書あれば、何となく、愉快に感じ申候。(三田義塾長)

**健康の幸福溢る** 長田ドクトル。充實した肉肉、澤々しい皮膚、若やかな血色、漆黒の頭髮、純白にして、正しく列んだ齒、澄み渡つた兩眼健康の幸福を、溢る、ばかりに持つて居る氏の姿は、どうしても二十三四歳程の青年と

しか見えぬ。

**効力顯著、價值ある現代的強健法** 伊藤銀月氏。川合式は、予も實驗上、其の効力の、顯著なるを、認めることが出來た。唯かに新舊諸種の強健法を、消化し盡して、さうして、自家の新しい物を出した所の、頗る價值ある、現代的強健法と、許すことが出来るのである。

**名工の手に成りし美術品** 古屋ドクトル。川合氏の如く、緩弛すれば、牛酪の如き、緊張すれば、鋼鐵の如き筋肉は、未だ曾て、見たること無し。筋肉の質素としては、正に上々のものである。胸部機關、腹部機關の強靱なる、又其の比を見ず。其の體格の均整を得たる。恰も、名工の手に成りたる、美術品の如く、何人も見て、壯快の念に撲たれざるは無し。而も鍛練の結果、此所に到りし事實を思へば、感嘆敬服せざる能はず。

**實行者全國に普ねし** 國民新大辭典。『川合式強健術』。川合春充氏の創案に、懸る健康法なり。最も科學的研究を積めるものなりとて、推奨せらる。實行者、全國に普ねし。

**斯界最大の天才** 健康の泉。創始者川合春充氏は、曾て我が國が産んだ、此の方面に於ける、最大の天才である否、彼れが刻苦修練は、斯界に於て、何人も比肩することを許さざる偉大なる者に、彼れを、造り上げたのである。實際、彼れの實驗には、血涙滴るものがある。彼れの研究の博きに涉り、細きを穿つて居ることは、驚嘆の外ない。彼れが強固にして輕妙なる演修は、まさしく、一大藝術である。一大美術である。

**強健術今日の盛行** 現代強健術の眞髓。主唱者川合春充氏は、『茅棒』と綽名された程、瘦せこけた虛弱者であつたが、飄然として、悟る所あり。専心體軀の改造に志し、今日の強健體を、作り上げると共に、所謂『川合式強健術』を創設し、今日の盛行を、見るに至つた。

**流行的に世に行はる** 健康法全書。今日、岡田式靜坐法と共に、流行的に世に行はれてゐる強健法に、『川合式強健術』のあることは、何人も知るところである。岡田式は、治病と云ふやうな、目的も加味されてゐるが、川合式



は、筋骨鍛錬といふことが、ある丈、青年男子の間には、最も歓迎せられてゐる觀がある。

『キョーケンジュツ』 模範大辭典。『キョーケンジュツ』。身體を強健にする方法——川合式強健術！

筋骨雄偉、體格堂々 健康之友主幹田村醫學士。其の身瘦弱を、悲しむと同時に、意を決して體育の研究に、心を注ぎ、生理解剖、健康に關する、諸書を蒐集し、東西各種の運動法を、比較撰擇し、更に武術の氣合を基礎として新式運動法を組織し、十年來、之れに依つて、鍛錬したる彼れの體格は、今日全然改造せられ、従つて着衣のまゝ、一見した處では、顔貌は優しく、手足の端は、寧ろ細小で、別段に奇異の形はないが、一度彼れが、衣を脱して、全身の筋肉に、力を注ぐや、筋骨雄偉、體格堂々、誠に美事なものである。松村介石氏先づ之を見て驚嘆し、次に二本醫學博士も、非常に賞讃せられた。

體育法の粹、科學的完全 希望社主幹後藤靜香。著者肥田氏は舊姓川合と呼び、有名なる『川合式強健術』の創始者である。氏の強健術は、世界各國健康法體育法の粹を探り、科學的完全であるといふ激賞を受けてゐる。氏は人格の人で、冷かな體育家ではない。私は本書が、『何人も、健康であり得る』といふ、自信を興ふる點と、健康の根本を擧げせる點に於て、特に推奨したい。

驚くべき技術——世界的研究 通信協會雜誌。川合氏の壯烈鮮活なる、實驗終るや、通信省田中通信局長は聽衆一同を代表して起立し、森嚴なる態度を以て、謝辭を述べて曰く、『川合先生の、驚くべき技術を拜見して、勇躍の情、禁ずること能はず。此の世界的研究によつて、人類の幸福に、貢獻せらるゝ處、甚大なる事を念ひ、衷心より謝意を表す』と。

悲惨なる家庭より産れたる強健術 冒險世界。著者川合春充氏は元來虛弱なる身でありながら、奮闘努力主義を以て奮然として、世に遠大なる理想を實現せんと欲し、自ら苦心研究の結果、遂に頑健無比なる體格を作つた其の實驗から成つたものが本書である。著者が一片烈々なる赤誠を以て、世に處せんとした巻頭の『自序に代ふ』は

一讀弱者を感奮せしむるに餘りある。

簡單確實なる靈肉の修養法 道。本書は病弱の家系に生れ、骨肉の永別に會ふこと九回。自ら死の宣告を受けること二回、その瘦弱の故を以て『茅棒』とまで諷名されたのが、一朝奮然として各種の運動法體育法を研究し、遂に筋肉の發達、體格の均齊、内臓の壯健、動作の敏活てふ四大目的を貫徹すべき運動法を發明し、氣合術を基礎として僅々四分間の練習を以て足る強健術を案出し、纖弱の體軀を一變して驚くべき強健なる精力家となつた川合春充氏の著書である。虚弱に苦しむ人、適宜の運動法なきに苦しむ人は、本書によりて精神と肉體との健全を得べき最も簡單にして且確實なる方法を教へらる可きを疑はぬ。

之を開けば宇宙に擴がる 自働道話。ア、先生の運動法は、之れを開けば宇宙に擴がり、之れを捲けば、體軀の中心へ大氣を包擁す。此の靈妙なる奧義を知るには、先生の肉體中より發する光輝を、自得せればならぬ。

所説大に肯綮に中る 衛生新報。一家虚弱の、系統に生れ、孱弱多病にして、幼時、同輩間に、『茅棒』なる侮辱的綽號を、得たりし著者が、感ずる所あつて、奮起一番を試みて以來、十星霜、心身を鍛錬して怠らず。遂に強健なる丈夫となりし、實驗に基き、著者の新工夫に係る、氣合術應用の運動法を鼓吹奨勵せるものにて、坊間に流布する、空論と異り所説大に肯綮に中るものあり。

言々皆な實際句句何れも飛躍 教育の實際。本書は著者が、極めて柔弱な體軀であつたから、親ら強健術を實行して、天晴れ剛健の心身に、練り上げた、其の實際的強健術を説いたのである。言々皆實際、句句何れも飛躍、而も一事一項、悉く自己の實驗を述べたのであるから、所謂架空の事がない。文章も巧く、實質もあり、實に良い書である。切に一讀をすゝめ、又其の實行を望む。

尊き實驗の記録なり 道。二本博士曰く、『一夜川合君、予を訪問せられ、其の語る所の筋肉鍛治法、即ち此の書に載する所のものは、大に吾々が求むる所の、運動法に一致してゐた』と。松村介石先生曰く、『此の書實に、大なる



獲物を有してゐることを、予は茲に、斷言して憚らない」と。以て此書の價値を、知るに足らん。記者は此の、尊き實驗の記録の一讀を、讀者諸君に勧告す。

**斯界の權威たるは、天下周知** 向上。肥田氏は、川合式強健術の創始者で、氏が斯界の權威たることは、天下の周知知る處、今本書を出すや、社會は熱狂的に歡迎して忽ち十二版を重ねたり。氏の著が、江湖に信用高きこと以て見るべし。加ふるに著者は、開ゆるの名文家にして、附録『落葉』には、感想あり、教訓あり、格言あり、寸句よく、人を刺すものあり。見逃すべからざる好文筆なれば、是非とも江湖に、一讀を勤む。

**天晴れ美事の體格** 雄辯。一家虛弱の系統に、末子と生れた著者が其の所謂『茅棒』の虛弱なる身を以て天晴れ美事なる體格を作り上げたる實驗を示し、體育上の六大條件に對して、明細なる説明を試む。行文の趣味ある他と選を異にす。

**體育上合理的** 新公論。著者は、陸軍二等主計、明治大學政學士、中央大學法學士であり、又早稻田大學文學部明治大學商科の卒業生である。幼より身體虛弱で、『茅棒』と、綽名せられた程であつたが、大に感ずる所あり。強健術の研究に意を注ぎ、博く東西の運動法を涉獵して、終に同氏獨特の、運動法を發明するに至つた。僅かの時間を利用して、行ふことが出来、而も體育上合理的の方法である。二本醫學博士の如きは『此の書實に、吾が醫道に、貢獻する所が多い』と、述べられて居る。以て此の書の、價値が分る。

**最も珍重すべき著書** 文藝俱樂部。細腕瘦軀に恥ぢて、入浴を逃避せし程に虛弱漢たりし著者が、其の身體を改造したる強健術にして、其の簡易なる、何人も、實行し得べき、最も珍重すべき著書なり。

**英采堂々豪氣滿場を壓す** 武俠世界。武俠世界社贊助、健眞會主催『強健術實驗大會』は、社會各階級を通じての切實なる要求のもとに、五月九日午後一時半より、神田青年會館に於て、漸く開催さるゝに至つた。聴衆は開場前から熱々といつめかけて、一時間前にもう、満員となつて仕舞つた。一番目に附いたのは、參謀肩章を附けた十數名

の陸海軍將校と 數名の僧侶とであつた。劈頭川合氏と同郷の人で、竹馬の友であつた所の渡邊桂花君が川合氏の一家が、羸弱の人許りで八人の骨肉が、相次いで病のために斃れ、大工が庭の一隅で、よく棺を造つて居つたことが記憶に残つて居ること、そして川合氏が羸弱の體軀を抱いて、其の動作が、凡て婦女子の如くであつたことを語り、それが苦辛慘憺の結果今日の強健術となつた経路を物語り、聴く者をして、一種森嚴の感を起させた。

次に川合春充氏が隆々たる筋肉の裸體を壇上に運んだ。と同時に拍手喝采は雷の如く起つた。氏が演壇の中央に直立するや、滿場は忽ち水を打つた様に靜肅になつた。そして、ゲイツと首を上げて、鋭くして、而も澄んだ眼光を、正面の一點に定むるや、英采堂々、豪氣、場を壓するの概があつた。やがて其の身體各部の主要筋肉に向つて、個々の緊張を興へる運動に移つたのであるが、其の動作の敏活靈妙なる、氣力の充實せる、たゞく驚嘆の眼を見張らしむるのみであつた。腹胸式呼吸法に於ける、腹部胸部の伸縮の自在なること、人間の鍛鍊も亦、茲に至ることを得るかと思はざるを得なかつたのである。

**力士と雖もあんな均整した體格を有する者なし** 武俠世界針重主筆。今迄隨分健康法とか、壯健術とか云ふものが澤山あつたが、空論でなければ實行が難かしいものばかりで、眞に其効果を擧げ得るものが殆んど無かつた。然るに此川合君の強健術は理論と實行とが相伴ふものであつて、嘗て公にされた此種の著書では最も卓越したものである。

元來強健術なるものは實際の事柄であつて、理論のものではない。今迄の斯の種の著書の効力が無かつたのは、理論に偏重して實行を第二としたからである。元より理論に合しない法は何等の効もあるべき筈はないが、偏重は斷じていけない。川合君の強健術は實際を基礎として、而して理論に合致せしめたものである。

余は川合君の其強健術なるもの、實演を見た。胸腹部の呼吸法は腹式呼吸から來たものである。腕の運動と氣合とは劍道から來たものと見られる。又胸部の運動は柔道其儘と云ふ事も出来る。此等の運動を行ふに虚心平氣一切無我の境に入るべしと主張するのは、禪の主張する所と何等の異なる所もない。然して之等の凡てを綜合して、一大強健術



を成した其成果は、是等各種の運動を併せ行ふが如き効力あるものとなつて現出したのである。之れを實際に於て見るに、著者川合君は其好模範である。同君は幼小から非常に身體が弱かつたので多年の苦心と研究との結果、此強健術なるものを發見したのである。然して今同君の體格を見るに、血色から筋肉の具合殊に其胸腹部の運動などを見ると、如何にも立派なもので、力士と雖もあんな均整したる體格を有するものはない。論より證據である。吾人は本書を天下に推提する者である。

**醫學界稀に見る良著** 横濱貿易新聞。一昨二十五日夜七時半、市内青年會館に於て、明治大學政學士中央大學法學士川合春充氏が苦心鍛錬の結果に成りし理想的強健術の實習講演ありしが、氏は嘗て其學理的蘊蓄を發表してより、夙に世間の知る所となり、其の著書の如きは醫學界稀に見る良書として重んじられ居る位なれば、今更喋々を待たざるところなるも、同夜は氏自ら親しく會場に臨んで、筋肉隆々の裸體と成り、逐一實際に其簡易なる強健術を講演された遺傳的羸弱の體質を享けしを畢生の恨事となし、專心 意科學と心理の兩方面より古今東西の學理を研究する事數年に亘り遂に氏獨特の最も完全にして而も自然的なる強健術を會得するに至りたるにて、就中一日四分間修練法の如きは驚嘆に値するものなり。歐洲に於て最新強健術と稱され居る椅子運動法は斯の強健術の換骨脱胎せるものなり。

**各方面に喧傳** 同上。讀者諸君の多くは、近頃、川合春充氏の所謂川合式強健術なるものがあらはれて、各方面に喧傳せられてゐることを知つてゐるであらう。その著『川合式強健術』は、畏くも、天覽台覽の榮を賜はり、又近くは、北白川宮輝久王殿中に、親しく御教授申し上げてゐる。

大隈侯、比志島陸軍中將、三宅文學博士は、氏の筋肉を撫して、その體格美を激賞し、又本團顧問二木醫學博士は『理想的完全の方法なり』と讚稱して、その愛兒の鍛錬を依託せられ、商船學校校長石橋海軍中將は、全然余が希望に合致し、歡喜に堪えず』とて、數名の教官をして之を修得せしめ、現に全校學生に採用實施してゐる。山下海軍々令部長は、眞に日本男兒の、心身鍛錬に適合してゐる』と賞揚せられた。加藤病院院長ドクトル加藤時次郎氏は『最も完全

有効なる理學的強健法と確信す』と讚稱して、現に同病院内へ教習道場を置いてある。以て此の強健術が如何に深き根柢を有してゐると同時に、甚大なる價值あるものなるかを知るに足るであらう。

**新しきは強健術靜座法** 陸軍主計團記事。凡そ病氣に對する危險に對抗するには、常に體力を旺盛ならしむるの要あり。然し體力を旺盛ならしむる方法たるや吾人の淺き見聞を以てするも、舊きはサンゲウの體操法ベークマン強肺術二木博士の腹式呼吸法あり。新しきは川合春充氏の簡易強健術。岡田式靜坐法あり。

**絶對の體格を造りたり** 實業の日本。君は先づ其根柢となるべき、生理學、解剖學を調べると共に、世界各國に現存する運動法といふ運動法は凡て研究もし、實驗もし、或は柔道に練り、或は劍術に鍛へ、あれを取り之に鑑み遂に從來になき獨特な『川合式強健術』を案出し、之を以て日夜心身を鍛錬するに至つた。

其結果以前の『茅棒』は實に絶美の體格を獲得し、斯道に造詣深い二木醫學博士も、『理想的自然の發達よ』と嘆賞するに至つた。實に君の體格の絶美なること一度衣を脱すれば古羅馬の彫像を見るが如き、快感に打たれるのである。

**各社會第一流の諸名士より激賞せらる** 何處衛生。讀者諸君の中には、近頃川合式強健術なるものが現はれて、各方面に喧傳されてゐることを知つて居るでありませう。それは解剖學と力學を基礎とした身體内外の鍛錬法であつて、一流の醫學者、教育家、政治家、宗教家、文學者、軍人等が口を極めて賞讃して居りますし、其著書は畏くも天覽台覽の榮を賜つた所のものであります。

氏は、自ら強健の身體を得んことを志し、先づ生理學解剖學を修めると同時に、世界各國に於ける古今の有らゆる體育法、運動法を研究し、實驗した。氏の著書に参考書目として擧げられてゐるもののみでも、實に五百種の多きに上つてゐる。之を以て見ても如何に氏が渴者の水に對するが如き熱望を以て、その研究に努力したかゞ想像されます。斯くして氏は茲に全く新なる強健術を發明し、之に依つて鍛へた氏の體格は、實に見事なものとなつたのであります。そして東京の各大學で、法、政、文、商の各科を修了し、近衛師團に入營して豫備將校となるまで、常に優良の



成績を得ることの出来た精力家となつたのであります。

**科學的完全なる『川合式強健術』** 報知新聞。川合式強健術には其の人の體質に應じて、最も自然な方法を執る様に、幾多の形式が組織されて居ります。川合式強健術を現代一流の政治家、醫學者、宗教家、文學者、教育者陸海軍將官等より賞讃されて居りますのは、全く此學理と實驗と相伴つて居る點にあるのです。

氏は、虚弱な體質であつた爲め、どうかして強くなりたいと云ふ熱望に驅られ、世界各國の古今あらゆる運動法、體育法、健康術を研究し、遂に氏獨特の最も完全にして、自然的なる強健術を發明したのであります。其組織は値くまでも科學的であつて、一舉一動と雖も苟もしない。

### 古代ローマの彫像——男性美

大阪毎日新聞。裸體となつて、壇上に現はれたる氏の體格は、古代ローマの彫像を見る如く、實に男性美を發揮したるものなり。殊に其の腹胸式呼吸法に於ける、氏の腹胸部膨脹力の旺なること、三四升の鎗を、呑み込みたる觀あり。體格の調和せる動作の敏捷なる、氣力の充實せる、思はず驚嘆の眼を見張らしめたり。

### 最も組織的、合理的

萬朝報。最も組織的にして、且つ合理的なる強健法と稱せらるゝ川合式強健術の創始者たる著者が、其の練修法を説くと同時に、強健法に關する、種々の感想を述べたり。生氣液々、卷を措くに忍びず。

### 男性的修養

新愛知新聞。本書は川合式の強健法にて、運動最も科學的なるが特色なり。行文々學的にして、趣味に富み、運動法を説くと共に、著者の隨筆をも載せて、男性的修養を宣傳せり。此の種のものとして、最も價値あり最も權威あるものたるを疑はず。

### 絶好の良指針

大阪毎日新聞。合理的なる川合式強健術の創始者として、知られたる肥田氏の新著にして、著者は、伊豆山中に籠ること、二年有餘にして、此の著をなせりと云ふ。即ち、解剖學、力學を基礎として頗る簡單なる方法により、虚弱の身體を變じて、能く強健ならしむる道を説きたるもの、苟も、健康に留意する者にとりては、絶

好の良指針と謂ふべし。切に熟讀と實行とを勧告す。

### 奏効確實、文明的體育法

山梨日々新聞。日々僅かに四分間の運動にて、強健となる川合式の強健術は、力學、解剖學を基礎として、發明せられたるものにして、奏効確實、頗る文明的の體育法なりとの定評にて、各縣教育界、中學校、商業學校等にて、川合氏を聘して、傳修せるもの頗る多く、過般、某宮殿下の御前にて、台覽に供し辱なくも、御賞讃あらせられしと云ふ。虚弱者の一大福音として、何人なる推薦することを、躊躇せず。

### 體格改造の實驗記

二六新聞。一家虚弱なる系統を享け、幼少より逆も、成育の見込なしと、人にも云はれ、自分も亦、左様に考へし著者が、自ら發憤して、自己の體格改造を、企てし實驗記なり。書中六個條のモットーを提げて、著者は在來の、あらゆる運動法に就て、研究し實驗に照らして、斟酌したる結果、氣合を基礎とし、強健術練修法を發明し、極力是れを主張せり。此の種の著書として最も尊重すべき好著也。

### 獨特なる研究と實驗

萬朝報。筋肉の鍛鍊、氣合、呼吸腹力等の練修を説きたるものにして、其の説明法に、凡て著者獨特の研究と實驗とを基礎としたるが、本書の特色なり。

### 一奇とするに足る

山梨日々新聞。二木醫學博士が、言はれた如く、恠かる書物が、生理學者の手から現はれずに、反つて、政治法律を、學んで居る、若き人によつて、世に紹介されたのは、一奇とするに足る。他の迷信的のものとは違ひ悉く科學の臺上に、立つた理想的方法である。

### 身體の成り上り者

都新聞。一家舉げて、身體脆弱の家に、生れし著者が、今日の健康體となれる、徑路と方法とを説きたる、尊べき實驗談にて、松村介石氏が所謂「身體の成の上り者」となる、強健術を説ける書なり。

**所論實地的にして有益** 國民新聞。著者が經驗せる強健術によつて、過去の強健法を評論し、進んで諸種の、氣合術運動法を説く。所論實地的にして、有益なるを疑はず。文章も明快。補ふに多數の寫眞を以てす。



最も權威ある著書 中央新聞。本書は、體育上の六大條件を掲げ、自分がこれに依つて、斯の如き體格を造り得たから、君等も亦是れを行へと勧めた、最も權威ある著書である。

迷信的のものと異なる 山梨日々新聞。心身の強健を望む者は、川合式を學べ、氏は殊に本縣人、而して其術は具眼の醫師、軍人、教育家の確認する所なり。他の迷信的のものとは、全く撰を異にす。

虚弱者の新福音 報知新聞。川合式強健術の名は、今や、世間何人も知らざる無きに至りしが、本書は日々四時間の運動によりて無病強健の人たるを得る、強健法を説きたるもの、説明頗る平易にして、親切を旨としたれば、學童婦女と雖も、實行に困難を、覚えざる可く、虚弱者の新福音と云ふも、不可に非ず。

健康を、欲する者は、讀め 中外商業新報。内臟強健術、主要筋肉強健法、其他數項に分ち、説明を下したるものにて、健康を欲する者の、一讀すべき書なり。

効果の大なる他の及ぶ處にあらず 時事新報。幾多の體育法や、健康法などに落第せる著者が、苦心の結果獨創せる強健術なり。原理を内臟及び筋肉の運動に求め、全身の活動を主眼とせるは、其効果の大なる、到底、他の一局部に偏したるもの、遠く及ぶ所にあらず。各家庭に一本を備へて可。

著者獨創の健康法 東京日日新聞。日々四分間の練習にて、身體を強健にし、頭腦を、明快ならしむるを得べしとて、獨創の健康法を詳述せり。宛然著者の實驗を、目睹するが如し。

説明完全 國民新聞。所謂川合式強健術を、詳細に和けて説いた物で、内臟強健術、主要筋肉鍛錬法等、所論凱切靜坐法を壓倒して、海内を風靡せるも、故なきにあらず。

實際と學理と、共に群を拔けり、理脈整然 東京朝日新聞。強健術に關する、幾多の方法、幾多の著述類々として、出づる中には、多少怪げなる者もあれども概して、それぞれの、理屈と、効能はあるものに似たり。然

るに、獨り本書の、所謂川合式強健術は其實際と、學理的説明とに於て、此等の中に、群を抜けるものにして、其理脈、整然たる解説は、確かに、世の一讀を促すの價値十分なり。

科學的説明、推薦するに足る良書 福岡日日新聞。本書は、自己心身鍛錬の、實驗に基き、練修法を、科學的に説明したるもの、附録亦心身修養上一讀の價あるものなり。健康法に關する、新著として、推薦するに足る良書なり

極めて簡易、且つ有効 大阪毎日新聞。本書は、著者が十有餘年に亘りて工夫實驗の結果、了得せし方法に、説明を附し、最も重要な、姿體は之を寫眞にて示し、後半には著者の所感、紀行文等を收録したり。著者が本書に於て、提唱したる方法は、極めて簡易、且つ有効なるを以て、身體の虚弱を憂ふる者、精神に煩悶の絶えざる者、若しくは大に社會に活動せんとする者は、進んでこれを實行すべし。

天來の眞理と、最新の學說 新愛知新聞。題目からして、男性的である。少年時代に羸弱な、身體であつた著者が、鍛錬の結果、骨太く、肉固き體軀となつた。其間に體得した天來の眞理と、最新の學說とを融合して、一個の主張として、世に宣傳するにある。日々軟弱に、趨る我青年は、著者の説によつて、初めて激烈なる、競争場裡に立ち得らる。行文又、文學的にて人を引付けるに足る。

悉く生理的なり噴々世に行はる 中央新聞。著者川合氏は、幼時から、茅棒と呼ばれた位の、瘦せた人で身體も弱く、両親にも、少からず、心配をかけたので、自ら其身體を健康にする工夫を積み、十數年間、研究に研究を重ねた結果、今は生れ變つた様な、立派な體となり、其肉附の豊かさ、其の骨格の剛健さ宛て仁王の如き觀をなすに至つた著者は自ら得た經驗と、偉大な効果とを齎して、一般に之を發表したもの、即ち川合式強健術なるもので、氣合を基礎とし呼吸を調和し筋肉運動の、整一を謀り、悉く生理的に、多大の効驗ある事を、説明され、今や噴々として、世に行はるゝに至つた。

精力の偉大なる、驚嘆に價す 東京毎日新聞。幼年の頃『茅棒』と異名を付けられ、幾度か死の宣告を受けた



虚弱な著者が、今日の如き、偉大なる強健體になる迄の、發達狀態、攝生法、内臟強健術等極めて、趣きある筆法を以て、叙述し、且つ多數の寫眞版を、挿入して、何人をも、強健なる、身體に導かんとする處、著者の精力の偉大なる、驚嘆に値す。附録には、強健法より、哲學、美術、軍隊、行旅、社會等の各般に亘り、多趣味なる、筆を以て、其の隨感を記せり。綠蔭銷夏の、好讀物たるを失はず、何人も一讀を要す。

**極めて簡易有効、婦人の間にも盛んに行はる** 讀賣新聞。川合春充氏の強健術は、極めて簡易にして、効果多きが故に、婦人の間にも、盛んに行はる。著者は、綿きに心身強健術を著して、世の耳目を聳てしめ、今や三十四版を重ねたり。本書は、前著を擴大し、更に底深く、著者滿腔の誠意を、披瀝したるもの、數十の寫眞版を挿入して、肉體上の強健法を筆舌を極めて、説述せり。

**生理解剖學に基ける『川合式強健術』** 萬朝報。生理解剖學に基きて、筋肉發達、内臟壯健、體格均整、動作敏活の四大目的を、成就せんとする『川合式強健術』の原理方法を講述せるものなり。

**健康法中の最大權威** 紀伊毎日新聞。本縣出身臺灣民政長官下村博士は、『活社會の多數人より、歡迎せらるべき強健術』と稱賛し、二木醫學博士は『大いに吾が求むる、處に一致し、醫道に貢獻するところ多し』と激賞し、最近日本に於ける、強健術中の、最大權威として、世界各國強健法の粹中の粹として、朝野の名士から、驚嘆せられてゐる、川合式強健術の、創案者、川合春充氏は、今般三澤海草中學校長等の、招待によつて、東京から態々來縣せられた。川合式強健術の長所は、從來新聞雜誌等に於て、都下の名士の、談に聞いた所であるが、要するに、氏は體育上について、あらゆる研究を遂げ、内外の運動に關する書類を、讀破すること、五百餘種一々實驗考覈し、採長補短して、日本固有の、武術を根柢とし、これを生理解剖學に照し、その終局の目的を實現するに足る。健康法を編み出したもので、其の運動は積極的で、美術的である。尙ほ、氏は陸軍二等主計、明治大學政學士、中央大學法學士、明治大學商科、早稻田大學文學科卒業生で、成績は常に優良であつた。

### 靜坐法と覇を爭ふ、強健術

明治大學々報。顧みれば、もう三年も、前の事だが、著者の、心身強健術が武俠世界社から發兌せらるゝや、川合式強健術の、信者は、岡田式、靜坐法と、覇を爭ふの勢で、増加して、僅かの間に、三十四版を重ねるに至つた。『強い身體を造る法』大正五年七月の新版であるが、私の手にあるのは、同年十月第十二版であるから、この書の分佈力も決して、前書に劣るものでない事が分る。川合式強健術がもてるのは、著者の文章が、人を魅するからではない。——著者は、文章に於ても、甚だ侮りがたい——書いてある事が全く、著者の實験から出てゐるからである。本書の内容については、くだくしい説明をしない。何となれば、この本を手にして、一枚開けさへすれば、著者の均齊した、肉體美の寫眞が、自らそれを説明するであらうから——。

**實際的で、そうして科學的、そうして美術的** 都新聞。著者の強健術が、如何に實際的で、そうして、哲學的で、そうして、科學的で、そうして美術的であるかは、此書を一讀すれば、直ぐに分る。卷末には、著者一家の、感想録があつて、そこに、如何にも高調した、著者の學力、氣魄を見ることが出来る。此の書は身體の、強健術であると共に、精神修養の讀物として、絶好のもので、斯く強肉の兩方面に、活力を興ふる書物は一寸他に見當らない**四個の大學校を卒業せられし驚嘆すべき精力** 二六新報記者。守田有秋君。四十三年秋の事である。私は『簡易強健術』と云ふ一書を、前社長の秋山先生に呈して一讀を請ふた。豫てより斯の種の書籍に對する興味を以て居らるゝ先生であるから、定めし大に歡迎せられる事であらうと思つた。

すると、果然！ 二三日経つて先生は、私に向つて著者に遇つて見たいとの事を洩らされた。私は大に喜んだ。

爾來秋山先生は著者から直接に『強健術』の説明を受けられて、大部熱心に研究して居られた様だ。

當時秋田社長も川合君に面會せられて、同氏の強健術に感服せられ、右に關する記事の執筆を懇願せられた。同君が、非常に病弱な一族の中に生れて、暗澹たる少年時代を過しながらも、奮然躍起して自己心身の改造を期し、終に四個の大學校を卒業せられたと云ふ事は、吾々平凡者流に取つて、驚嘆に値する事柄である。



兎に角同君は、自造セルフメイドの人である。自修セルフカッチャードの人である。従つて其の實際的發明になつた強健術が、如何に吾人に價値あるものであるかと云ふ事も、亦想像に難くはあるまい。

**一騎敵軍中に奮闘する勇士の如し** 二六新報。……言々皆心血句々悉く實際……拜啓貴社益々御隆昌奉賀候陳者川合氏の簡易強健術に就ては先般來連日御掲載相成多大の興味を以て日々拜讀致居候貴社が斯る有益なる記事を掲げられし事に對し讀者の一人として默するに忍びず茲に一書を呈し厚く謝意を表する次第に御座候併し右運動方法に關しては杉本少佐の如く種々御質問も致度點有之當惑致居候處本日貴紙にて近日貴社の名に於て講演會御開催可相成旨御公表相成誠嬉悦致候就ては右講演會は讀者の興味を去らざる内に必ず御開催相成様特に同志に代り御願申上候先は御禮勞々如斯に御座候 敬具

本紙連載之川合泰充氏簡易心身改造法、實在體操界一開一生面、爲社會一使子馬齋少二十年、必可奉而周旋、今也老頼、萬事休矣、昔讀永平師座禪儀、欲傲焉亦不能、座上之律猶然、況體操乎、鈍根可深愧、強健術著者川合泰充君足下吾人は未だ足下と一面の識なしと雖も、先に二六紙上に於て足下が痛烈深酷なる體育の實驗談を聞き讀嘆の情いまだ覺めやらぬ今日此の頃更に又『椅子運動法』並に『自己療養』の新聞を見る。足下は法科政治科及文商の各科を修了し柔道に於て忽ち奧傳を許され、軍隊に在ては一氣に豫備役將校まで勤め爲す所一として全うせざるはなし足下が研究せし處を讀むに言々皆心血句々悉く實際。其考案したる方法が、直接世人に裨益する處甚大なるのみならず。足下が刻苦努力の面影は恰も一騎敵軍中に奮闘する勇士の如く懦夫の心に強き鞭打と刺戟とを與へずんば止まず。吾人は更に一日も早く講演會を開かれ、其實際の説明を聞かん事を熱望す。終りに二六新報が此の如き有益なる記事を掲載せられたるに對して默止するに忍びず。讀者を代表して茲に厚く之れを感謝す。(北島生)

(記者曰く) 講演會開催の件に關しては目下川合氏と協議中なれば決定次第發表す。  
**戦後の最大急務** 池田京都府知事。著者肥田君は、其の實驗に依り、得たる處を學理に照し、一々理據を精確にして、其の所信を以て世に行はむと欲し、曩に體格改造法の著あり、更に浩瀚なる強壓微動術を著して、その蕩蓋を

傾けたるに、未だ版を改めざるに、不幸にして印刷所の回祿の災に遭ふあり。君が多年の精力の結晶も、可惜跡方なきに至つた。

君乃ち先づ、體格改造法の改版を企て、今其の第四十五版を上梓するの運に至れるを聞き、欣抃措く能はざるものは君と君の友人のみではあるまい。

君は幼時羸弱にして、茅棒の綽名を蒙りし程であつた。肩竟の若者から、茅棒と呼べる、毎に、如何に君の神經を、刺戟したであらう。奮慨措かざりし君は爾來幾春秋、努力の凝る所血となり、精氣の滲る所肉と爲り、鍊磨鍊成、遂に克く圓滿無垢の人格の權化と爲り、鐵石も翅ならざる健康體の人と爲つた。而して其の爲はらざる告白と、自得自修の尊とむべき經驗とを、組織的に講述したるもの、即ち本書である。讀者若し心眼を開きて、色讀數次、能く君が精力を傾注せる中核を把持して、君が闡明にせむと欲する琴線に觸れむか。得る所のもの少からざるべく。此の書の弘布に依りて、戦後の國民體格改造の業成り、社界に貢獻する所あらば、其の効驗や、頗る偉大なるべきを信じて疑はざる次第である。

**肉體美の中に自然の力を見る** 杉本胃腸病院副院長 平野醫學士。貴兄の温かな笑顔を以て、歡迎せられた時の、私の喜びは、どんなであつたで御座いませう。『一見舊知の如し』と云ふ句は、自分が時々讀んだものであります。自ら感じたのは、貴兄に御逢ひした時が始めてです。星を見て樂しみ、自然の力を、人間の五體の中に認めて人體の美を讀せらるゝ貴兄が、半島の一角に起臥して居らるゝ事は、自然と人間とを對照して、誠に美しいと思ひます。私は貴兄の體格美、肉體美にも自然の親切と、人間の精進の力とを、認めたい。益々御自愛なされ、使命を完ふせられん事を、禱つて居ります。貴著は、入院する人々に、推奨して居ります。

**理想的男性美** 焦点主筆、岡田次郎君。肥田泰充氏の名は、川合式強健術の創始者として、又當代殆ど比肩する者なき雄辯家として、著聞して居る。其の肥田氏が、川合信水先生の令弟であることは、更に人の鷲鼻を惹く種でもあらう。洵に目出度き双壁と稱すべきである。竊に聞く、近時ますます、研鑽を極めて、造詣眞に、測り難きもの



ありとかや。

氏今、伊豆の山中に、世塵を避けて、優游自適しつゝ、濫りに坡上の人たるを、肯はれぬやうである。蓋し世上粉々、似て非なる賢名者流の出没するのを、慨いてはあるまいか。

昨秋有縁の人々と共に、川合信水先生に請ふて、其の神髓の一端を、聴くことを得た我等は又、身體の方面より進んで、文武の兩道を、其の一身に體現せる、斯の人に請ふて、まのあたり驚、べき強健美と、火の如き雄辯に接せんことを望み、切りに請ふて、止まなかつた處、幸に快諾の報を、手にすることを得、來る五月を期し、大阪市公會堂に於て、盛大なる講演會を催す計畫である。

押川方義先生の言に曰く、「吾輩曾て、肥田氏の實演を見たが、血肉躍如として、天來の言葉を放ち、純眞にして、強大なる生命力の迸る所、燦然として人の肺腑を照らすの感があつた。又その火の如き大雄辯は、手足悉く聲をなし文武の兩道が、遺憾なく、發揮して居つた」と。げに其の堂々たる態度、莊麗なる姿勢、剛柔兼ね備はれる音聲、變化自在なるウエスチユアは、人をして、恍惚たらしめれば止まぬ。眞にこれ氏に於て、具體化する、理想的の男性美である。我等は遠からずして、斯の人を、此の地に迎ふるの機を得たるを欣ぶものである。屈指して待て。

**暗夜光明に接するの感** 大島福井中學校長。何か適當にして、有効なる改善法も哉と、苦慮罷在り候處、先生御創始の強健術に關し、御高説を拜承し、妙技の御實演を拜見するに及び、暗夜光明に接するの感をなし、時弊を救ひ、眞に國民の身心を強健ならしむる唯一の方法なる事を覺り、雀躍禁する能はず。是非當校職員生徒をして練習せしめ、先生の偉大なる人格に接し、強烈なる生命力の迸りに觸れしめ度く、熱望致し候間、何卒、御許容なし下され度く奉懇願候。

**疾病治療上の一大福音** 平民病院長ドクトル、加治時次郎氏。僕此の頃、少閑を得て、肥田君の、強壓微動術を讀んだ。元より同法が、治病保健に、大なる効果がある事は勿論であるが、同書を讀んで、感じた事は、強壓微動といふのは、電流を通ずると、同じである。微動より起るエネルギーで、各種の病患を驅逐し、死滅せしめるもので

あると思ふ。

今日少しでも、醫學の智識を、持つて居る者は、誰とて、デアテルミーの偉効あることを、疑ふ者はあるまい。けれどもデアテルミーは、機械を購ふに、巨額を要する。電流も入る。電氣の智識なき者が、之れを扱へば、危険である都會に居住する人々ならば、其所に存在する病院には、其の設備の無い處は無いから、誰れでも、治療を受けられるが、地方僻遠の地に到つては、其の惠澤に、浴することが出来ない。

然るに微動術は、一種のデアテルミーであつて、其の効果亦、デアテルミーに劣らない。而して之れをなすには、一文の費用も掛からぬ。親護りの兩手があればよい。毫も危険なくして、隨時隨所に、行ふことが出来ると云ふ、便利がある。かくして地方僻遠の地に於ても、山の上、海の中でも、誰れでもデアテルミーを、應用する事が、出来る事となつた。

常に貧乏人ばかりで無く、地方に存在する、無資産有識階級も、強壓微動術の出現に依つて、生活上に、將た疾病治療上に、一大福音と、惠澤とを、齎されたものである。

こう云ふ理由で、僕は双手を舉げて、本書を天下に、推薦する事に、躊躇せぬ。

**有力なる斷案敬服の外なし** 商船學校長、石橋海軍中將。爾來打ち絶へて、御動靜御伺ひ申さず候へども、定めて、何等か御研究、成し居らるゝ御事と、推察罷在り候處、果然今回、強壓微動術の著となりて、御公表相成り、期待の空しからざりしを、悦び申し候。過日御惠送に預り候以來、日々就讀、本日を以て、全部完了致し候處、大に有益の良法に有之、多大の實行者を生じ、世を裨益するの大なるを信じ、大慶の至りに、存じ申候。殊に微動術方法の前後、例により、古來の金言名説を、蒐集し、心身關聯の理論より説下し、有力なる斷案を、下され候は、敬服の外無之處に、御座候。茲に、延引ながら、祝意を兼ね、謝意相述べ度く、如此くに御座候。

**眞強鐵の如し** 竹内陸軍中將。拜啓、益々御多祥、大慶に存申候。陳者御名著、強壓微動術、御送附下され、忝なく奉存候。大冊の美本、未だ内容精讀に及ばざるも、一册有益のものに可有之、邦家の爲め、感謝の至りに堪へず



候近尊容を、寫眞にて拜見、眞強鐵の如く、此の實證を以て、其の方法を、公にせらる。誰れか、信ぜざる者ぞ。恐らくは、他をして、後に譲若たらしめん。老生月始めより、久留米中心に、巡講致し居り候て、昨夕歸宅、御手紙と此の好書に接し、眞に嬉しかりし、時下益々、御自重を祈る。

**有益なるを疑はず** 代議士、押川方義。拜啓、益々御清祥大賀候。貴著、多忙に取り紛れ、内容も未だ、篤と拜見致さず候得共、其の有益なるべきは、推察に難からず、何れ充分拜讀仕るべき考へに御座候。久々にて、色々御面晤致したく、思ひ居り候が、御上京の機も、御座なく候哉。

**竹内中将賞讃** 二荒伯爵。過日も、竹内中将を訪ひ、談偶、貴兄の強健術に移り、同氏も非常に、賞讃致され居り候。九月十三日には、乃木閣下の追悼會を、靜岡師範學校に開き候處、同中將も來られ、貴兄の強健術の御話も出で申し候。

**徹頭徹尾科學的歡迎せらるゝ所以** 平民病院長ドクトル加治時次郎氏。川合式強健術の創始者である著者が、數年の研究の後、新に創製した、健康法である。從來の強健術が、何れも非科學的であつたのに對し、著者の健康法は、徹頭徹尾、科學に基礎を、置いたものである。從來の夫れは、非現代であつたけれども、著者のは、全く現代的である。其の社會に、歡迎せらるゝ、故あるかなと云ふべし。

**これぞ此世の寶** 内務省池田社會局長官。強健運動術の高著、御贈惠を辱ふし、雖有く存じ上げ候。裨益夥からざる事と存じ、陸ながら普及祈り上げ申候。『眞心も、軀ありてのものと思へば、是れぞこの世の、寶なるらめ』。

**有益なる御研究** 村井辻齋氏。昨日は高著強健運動術、御寄贈下され、謝し奉り候。有益なる御研究、服膺致すべく候。昨夜神奈川加藤ドクトル邸にて、晚餐を共にし、貴兄の御噂申し候。

**同胞が恩寵に浴する不尠** 松平早大教授。此の數年間、絶へて御目に懸からず、如何にも御懐しく存せられ、折々妻と、御噂致し居り候。高著口繪の寫眞を見れば、餘程御肥滿のやうに、見受けられ、殊に肩より、腕へかけて

著しく覺え候。老生も今年は、機會を作り、一度拜訪の上、御高論をも伺ひ、胸中三斗の塵を、洗ひ度き心得にて、今より樂みに、致し居り候。多年御研究の結果、又々此度の御著述有之、同胞が恩恵に、浴すること、少なからざるべしと、存じ候。老生は仔細に玩味致し、其の體得を、心懸け申すべく、只今上半部を、了へ候處にて、貴所の風神宛として、文字の間に在り、交際の想ひ有之候。

**學界に貢獻社會を裨益** 渡邊醫學士。『強健運動術』は、深酷なる、實驗と、該博なる研究とを以て、斯界を風靡したる、『川合式強健術』の創始者たる、川合春充氏が、新たに考案したるものであつて、所謂公明、加ふるに、優麗花の如き、筆を以てして居るから、病弱者は讀んで、大なる生活能力を自覺し、無限の慰藉を、此所に酌むことが出来る。——略——川合氏には、曾て東都の練習會場で、兩回、御目に懸つたのみであるが、其の體格の雄大にして、全體の調和の美しいのには、恍惚たらざるを得なかつた。一度力を込めると、鋼鐵のやうに、固くなるが、緩弛させると、軟かで、滑らかで、しな／＼して、丸で眞綿で包んだ絹に、觸るやうであつた。其の練修動作を見て居ると、一舉一動が、呼吸と調節して、活きた機械が、動くやうな感じがした。吾輩は肥田氏が明治大正に亘りて、勃興した特殊健康法流行の趨勢が産んだ、最も驚異すべき一大天才として、學界に貢獻し、社會を裨益したことを肥田氏に向つて、深謝するものである。

**盛名全國に聞ゆ** 岩手縣立蠶業學校長井上農學士。晩秋の候、益々御清祥の段奉賀候。體育健康法上の御盛名、今や、日本全國に、響き渡り候御事、大慶の至りに、存じ上げ候。昨夕、大磯の濱を歩みて、八幡野は、あの邊ならむかなご御噂申上候。

**醫學を學んだ私が教へられる** 間宮醫學士。『強健運動術』、拜讀致して、實に大いに、得る所がありました。精神と肉體との一致、内なる力の働き信の力、誠に共鳴を感じました。強健法については、醫學を學んだ私が、大いに、教へられます。一々御尤と存じます以外には、少しも批評など、申し上ぐる事は、ございませぬ。誠に足らぬ



言葉ではございますが、たゞ神を信じ、出来得るだけ努めて、己れを捨て、働いて居るものが、貴方の貴い誠に貴い、御研精の賜物に對し、貴方に對し、滿腔の敬意を、献ぐると申す、一事に盡きます。

**御高著に接して欣喜** 谷村農學士。強壓微動術、懇々御惠贈下され、御芳情有りがたく、拜受仕り候。通讀、再讀の上、又々御示教を、請ひ度く楽しみに、致し居り候。二申、玉利博士は、小生の師にして岳父、早くより靈氣邪氣説を聞き、其の靈氣の哲學に於ては、自ら大に、啓發する處もあり、何時かは、人類の進化向上に、實現せしめ度く存じ居り候折柄、御高著に接し、居る次第にて御座候。——小生邸内に、十五疊敷の道場を作り、毎日練習に心懸け居り候。行く／＼公開致さん心組に御座候。

**溪谷の黎明** 内務省技師、算工學士。書店より、貴著正に、送附落手仕り候。未だ精細に、拜見仕らず候へども相變らずの御努力誠に感佩の至りに御座候。國民保健問題の旺なる今日、溪谷の黎明と、感じ申候。

**治療法としての一派を開きたるもの** 實業之日本。本書は、川合式強健術の創始者として、有名なる著者が其の強健法の原理と、一種の物理的療法とを、論述したるものにして、之れに到達する迄の、著者の實驗、研究の悉くを網羅し、詳細親切を述べたることは、熱然たる約六百五十頁の、大冊子たるに見るも、明かなるべし。治療術としての、一派を開きたるものと云ふべし。

**活力を誘發する方法** 大阪朝日新聞。川合式強健術を、創始した著者が、一種の心理的暗示に依つて、病者の精神安定を計り、身體の諸機關に、或る刺戟を與へて、一種の活力を、誘發する方法を、詳解したものである。

**新式強健法** 萬朝報。著者の編める、新式強健法を述べ。此の方面に、趣味を有する人に、一讀を薦む。**學理と實際とに亘りて懇切極む** 東京朝日新聞。川合式強健術の創始者たる著者が、獨特の強健法を説くに、學理と實際とに亘りて、懇切を極め、巻頭數十の寫眞を挿入して、説明を助けたり。附録に、呼吸と丹田の一篇を添ふ。

**物理的刺戟に、心理的作用を** 婦人公論。虛弱者をして、健康體に導く、普通の強健術とは別で、病者に應用して、回復の助力をなすのが、此の術である。物理的刺戟に、心理的作用を、應用したもので、本書は施術の順序方法が、委しく記述されてある。

**驚くべき天才所論明快** 強健の鍵。『川合式強健術』が其の學理的研究に於て、其の熱烈なる實驗に於て、他に比肩するもの無きは、天下の周知する所、而して本書は、其の川合式の創始者なる、肥田春充氏が、該博なる、智識と、俊敏なる頭腦とを以て、多年研究實驗の結果、發明せられたものである。氏は實に、此の方面に於ける、驚くべき一大天才である。所謂明快にして、大鵬天空を翔けるの概がある。其の方法の、効果甚大なるべきは、吾人が疑はざる所である。

**叩き竭す森羅萬象の靈** 池田忠一氏。一讀肥田春充兄所著強壓微動術誠不堪感激。全篇以一誠貫之。殊立言丁寧。寓意深切。加旃。材料豊富。考證確實。趣味津津。易讀易行豈止日本國寶。實坤輿民衆之大寶典也。因恭賦得七律一篇。傾注滿腔之誠衷。以聊表謝意。

(春充曰く、氏は池田社會局長官の父君にして、郡長、感化院長其の他の官にあること四十有六年間、一日の缺席もなく、一回の遅刻もなかりし精勵恪勤の士なり。) 能明下物理兼心理に説到自然真敬聽。識博東西一語俊語學通今古一玩群經。悟來大地一元妙。易云。大哉。坤元。萬物資始。又云。至誠。叩竭。兩端而竭焉。森羅萬象。應代坤輿民衆。謝同生起死身靈。

青山傳客忠一蕪稿



### ▽終りにおいて

敬愛する讀者諸君、私は茲に、摺筆せねばならぬ。同じやうなことを、繰返し／＼して、私は如何に、冗長な筆を、弄したことであるよ。其の目的に就いては、序文に於て、既に一通り述べた處であるが、老婆の臭乳を絞つて、重ねて附言することを、許さるゝならば――、

(1)、人間は、肉體精神ともに、改造し得べきこと。

(2)、天地には、物理的精神的大法大道が嚴存して、其の本質は、光明燦爛たり、而して、生も死も、俱に純美なること。

(3)、前二者は、人體の正中心を鍛え、ダイヤモンドの神聖十字架を、衷に啓くことによつて、期せずとも、自得せらるゝこと。

(4)、而して、健全に活くるの道は、自己中心を養ふを以て主とし、衣食住共に、極めて簡素なるものとなし、日光空氣、水、土に親しまは、他の一切の器具、機械、營養物、滋養劑等はガラクタ道具同様、悉く不要なること  
(5)、病を治するの力は、完全に、自己體内に備へられて居り、何等人工的、方法手段、機械、藥劑、滋養物を要せず、天理に順ふることによつて、万病悉く、安全に癒し得ると、云ふことである。

若し夫れ、私が、殆ど四十年來、實踐躬行し來れる方法の如きに至つては、私は何等これを、諸君に慫慂せんとする意志を、持つて居るものではない。只其の方法によつて立つ處の根柢、並びに其の要領の眞髓をさへ、諸君が會得され



たならば、事足るのである。其れを以て、如何なる方法を執られても、障効擧げたらむことは、私の信じて、疑はざる處である。

現に私の家族、親戚、郷里の人達でさへも、一人も私の方法など、行つて居る者は無いし、又勧めもしない。のみならず、私自身でさへも、ソナナことは一切、更に念頭には、留まつて居ない。……タツタ數十秒時、毎朝、生命をかけた、練習する時の外は——。イヤ其の時こそは、私自身としては、最も私の方法に超越し、私自身に超越し、而して又一切に超越する時なんだ。然らば即ち、私の方法などは、何處にも、存在しない云ふことにもなるのだ。天地万物、已に微塵に屬す。而るを況んや、塵中の塵をや、血肉身軀、且つ泡影に歸す、而るを況んや、影外の影をや。

自分の方法に就て、話すが如きことは、最も好まざる所であつて、殊に之れを、人に勧めるが如きことは、私の一層厭ふ所である。一體話は、一切嫌ひであるが、其れが政治、宗教、健康法に亘るに至つては、贅澤な嫌ひは通り越して苦痛となる。之れ私が、面會謝絶の札を門前に掲げ、止むなき要談十分間の紙片を、門前と應接間に貼り付けて置く一面の理由である。そして、大抵の公の會合に、出席せないのである、流行の御座なり演説の仲間入りを、強要せらるゝのが、閉口だからである。

話して可し、聽いて良いのは、眼に一丁字なき、純朴正直な漁師、百姓、炭坑達である。大東京の眞中を横行する宗教家、政治家、實業家の面上には、私は私の村人程の純良な相を認めることは出来ない、市人に交はるは、山翁を友とするに如かず。朱門に謁するは、白屋に親しむに如かず。街談巷語を聽くは、樵歌牧詠を聞くに如かず。今人の失徳過擧を談するは、古人の嘉言懿行を述ぶるに如かず。

只、思ふ。寒燈靜かに眠るの夜、心ゆくばかり、中心の世界を語り得る眞の友があつたならば、私の心臓は、喜びの翼に打ち振ふて、如何に高鳴ることであらうぞ。

歌草が、緑の毛氈を、敷き詰めたやうな、サマリヤの原野の盡くる所、ゲリジム山の麓に、ヤコブの井戸がある。深さ七十尺、口徑は僅に、三尺位であるけれども、井戸底は直徑一丈もあつて、今でも、苔蒸す石層の間から、清泉は滾々として、湧き出して居ることである。

千九百年の昔、キリストは其の井戸石の上に腰掛けて、サマリヤの婦と語り給ふた。「この水を飲む者は、又渴かむされど我が與ふる水を飲む者は、永遠に渴くことなし。且つ我が與ふる水は、其の中にて泉となり、湧き出で、限りなき生命に至るべし」と。私はこの聖書の記事を、思ひ出した。

お前も、これ程迄に、自分の喜びを語つたならば、もはや、語り盡して、残された何もものをも、持たぬであらうと、讀者諸君は、云はるゝであらう。

然り。然り。否。否。否。

然り。然り。然り。其れ等は皆、流れて逝つた過去の閃きであつて、今の私には、何ものも、何一つとして、残されたものはない。一切は空だ。一切は無だ。身は繋がる舟の如く、一に流行坎止に任せ、心は既灰の木に似て、何ぞ片割香塗を妨げむ。

否。否。私には、活きた現在が、絶へず新たに、恵まれつゝある。ヤコブの井戸が、今に尙ほ、清泉滾々として、湧くことが絶へないやうに……、新たなる生命と、新たなる喜びとは、限りなく、私に恵まれつゝ



ある。孤雲、岫を出づる、去留一も係はる所なし。明鏡、空に懸る、靜躁兩つながら、相干かきさす。そして其の生命と、カミ、喜びさは、全く私の腰腹中心の一點から湧き来ることを、私は明かに、自覺することが出来るのである。清泉が、岩の下から、湧き出すやうに——一點から、中心の一點から、湧き来るのを、明かに自覺することの嬉しさよ。これぞ、活ける生命である。これぞ、活ける健康である。ア、これぞ、活ける至寶でなくして、何であらうぞ。

私は、此の書の讀者に、別に何の勸むることもなければ、望む所もない。私の方法などは、よし行はれなくとも、私の趣旨などは、よし取られなくとも、——只人は、凡てかくも、大なる天の恩寵のまことにありと、云ふことだけでも、理解せられて、人生の旅路に行き暮れた兄弟姉妹達が、せめては紺碧の空に輝く、希望の星を仰がる、縁ともなり得たならば、私が多年の苦心努力も、充分に酬いられたものとして、私は本懐の至りに堪へないものである。物を消ふ能はざるもの、人の痴迷の、處に廻び、言を出して、之を提議し、人の急難の處に廻び、文を掲げて、之を解救す。亦是れ一つの慈徳なり。

さらば諸君、謹んで諸君の御健勝を祈つて、爰に私は、拙き筆を擲つてであらう。「嵐のみ、さきく窓にをさづられて明けぬる空の、なごりをぞ思ふ」。戸を振して、庭に立てば、曉の爽氣、袂を拂ひ、空には、消え残つた星が、五ツ六ツ、友敬しげに輝き、大鳥は、線滴る梢を透して濃紫に染まり、其の後の露は、穏かな紅色に霞都つて居る。時々千箇時の燈臺が、ピカリツ／＼と、螢のやうに瞬く。天地一體が、目覺めた神の、瞳のやうだ。さても大變な景色なるとなアと、耽美の情に魅了せられて、恍然として、私は佇立した。——一燈臺として万籟静なし。宴寂四圍を領す。

曉夢初めて醒め、群動未だ起らず。一念惘然として、身高中心を返照す。「またきに歌ふ鳥の音は御前に出でよと叫ぶなり。雲井に残る星影は、神に捧げし篝火か」。……。「ア、神よ、くすしき君がみ力に、我がはらからを勵まし給へ」。 (昭和十一年九月二十五日)。

▽さ ら ば!

功名、花上の露、富貴、草頭の霜、何の傲驕、狂妄を、繼にし、何の榮華、嬌奢を逞しうする。日まぐるしき塵世の競闘、焦燥、これそも何の爲なるぞや。成功、權勢、黄金、聲譽、これそも何の意義をか齎す。

滔々乎として、流れ去る一切衆生の群れ、詐り人の虚しき榮えも、あはれ散り布く棉花一朝の夢、勝鬨の浪に捲らるる英雄、馬上の殿しき姿も、あはれ一瞬、眼前に躍るトーキーの幻影ならずや……夕の鐘の響きなは、花や散るらむ吉野山——。

あゝをぞまし、あゝ淺まし。浮びては消ゆる水泡のうつし世にありて、營々として驚馬に鞭うつにも似たらむ生を、送り迎へしつゝある同胞かなしや。

此の有爲轉變の、悔しき渦中にあり、我がひたぶるに望む所ものは、只水恒不變の活ける眞理の光なりとするは、そもく我が心、感へるものなるべきか。

中心悟道の高臺に佇みて、惠まれし慈眼を穩かに放てば、機縁に繋がる人の世、懐かし。寧しく死の枕に就くべき同胞いさほし。此の思ひ胸に充ちて、我れ拙き筆を擲りしも、心魂を虚にして、淡々焉として、これを受くる者、果して



これありや、否や。  
 是を聞く。近代世界の大藝術家ロダンに騙して、自己の像を刻ましめたる一富人は、彫成りし時、こは我が姿に似もつかぬ架空のものなりとて、直にロダンのもさに突き返せしと。  
 此の支離滅裂、醜劣無雑の一篇、もごよりロダンの巨作に比するが如き譏妄を、敢てするものにはあらずと雖も、これを世に送りて、此の書を受くる運命は、又その轍を履むべきものたるは、我が豫め、深く覺悟する所なり。「か、凡々の理は、奇に憶がる、今の世には、適はしからず。用なきものは擲ち捨てよ」と。さばれ我が務めは、獨り忠實に正しく、眞理の生命を究むるにあるのみ。又何ぞ、眞人、溝壑に願するの悲しみを避くる怯をなすものならむや。若し夫れ、本書によつて、一人なりとも、天真の大道を、自己中心の生命に覺醒するの友ありさせば、著者研鑽の意義も、執筆の勞も、酬いられて、餘りありさなすべきなり。……擲たんかな、重き此の筆……。  
 さらば、我が同胞の上に、眞の幸あれかし。——さらば……。

昭和十一年九月二十六日夜十時三十七分

人里離れし松尾の山上、半輪の月赤く、西空に傾けるを仰ぎて

著者

本書の刊行と本稿の校正とに當り、關根弘之助、増田智万雄兩君の深甚なる厚意と、多大なる御努力とに對して、著者は更めて、茲に滿腔の謝意を表するものである。

御願

此の書を読まれた人の中で、私の研究と實験とさうして私の精神意氣とに、多少でも共鳴を感じられた方があるならば、どうか一倍加運動として貴下の御友人御一人に本書の購讀を御勧め願ひたい。  
 眞理の爲め又、同胞の清福の爲め、切に諸賢の御後援を懇願する次第である。(春充)



私に面會を希望される方、私の講演を聴き度いと思はるゝ方は、往復はがきを以て豫め東京市小石川區丸山町二十一番地學生修道院内聖中心道研究會(電話大塚86二五七一)(電車小石川丸山町下車)へ講演の日時を知らせて呉れるやうに、御依頼して置いて下さい。自宅では一切御目にかゝりませんし、學生修道院以外では講演も殆んど致しませぬ。

肥田春充

昭和十一年十月一日初版印刷  
昭和十一年十月五月初版發行

不許複製



聖中心道 肥田式強健術

天真療法

(定價 金參圓也)  
書留送料 金三十三錢

著作者 肥田春充

靜岡縣田方郡對島村八幡野  
千六百三十九番地ノ四

發行者 肥田春充

靜岡市江川町四十五番地

印刷者 日比野仁作

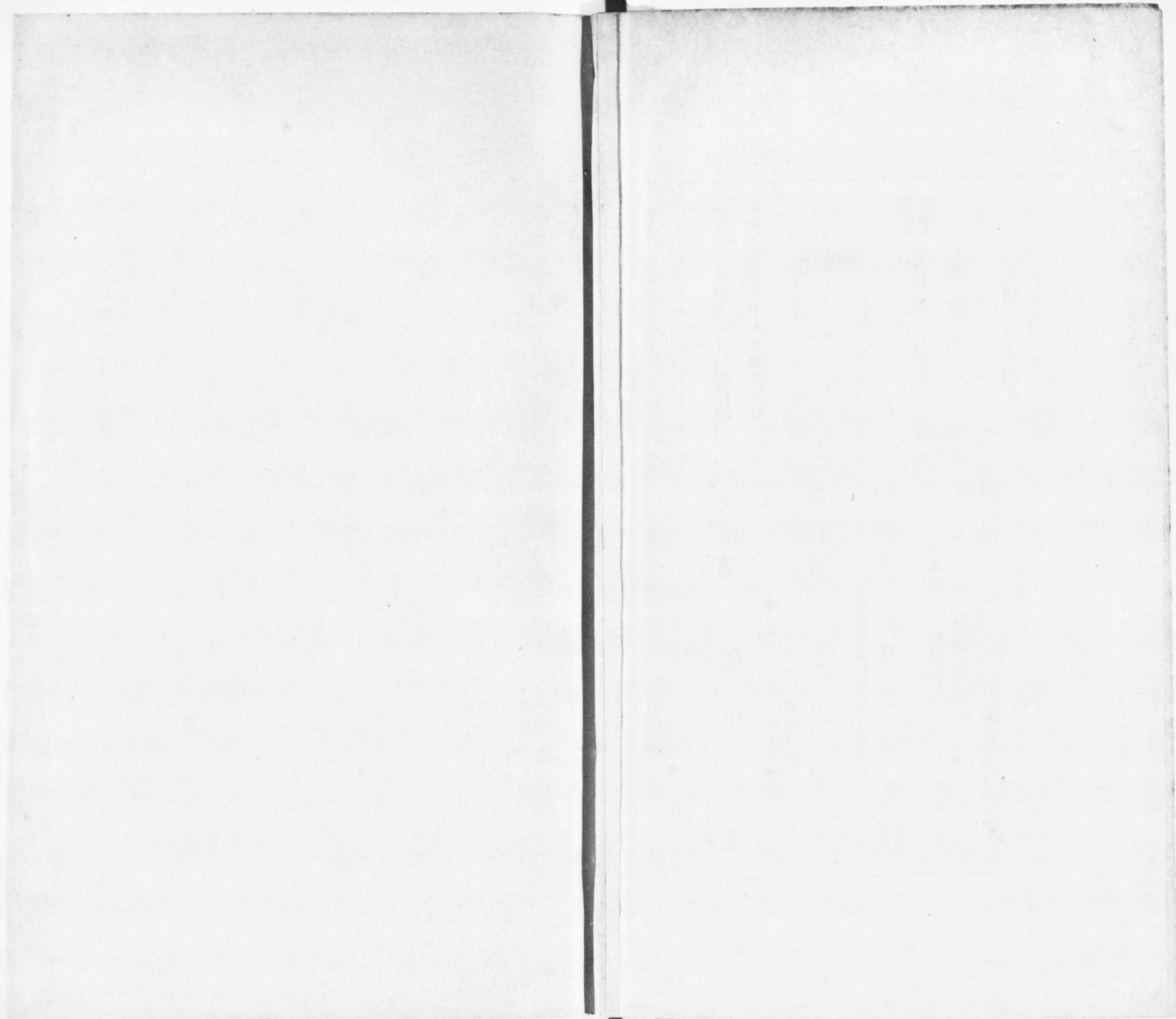
東京市小石川區丸山町二十一番地

學生修道院内

發行所 聖中心道研究會

電話(大塚)二五七一番  
振替東京一二〇六七〇番







終

